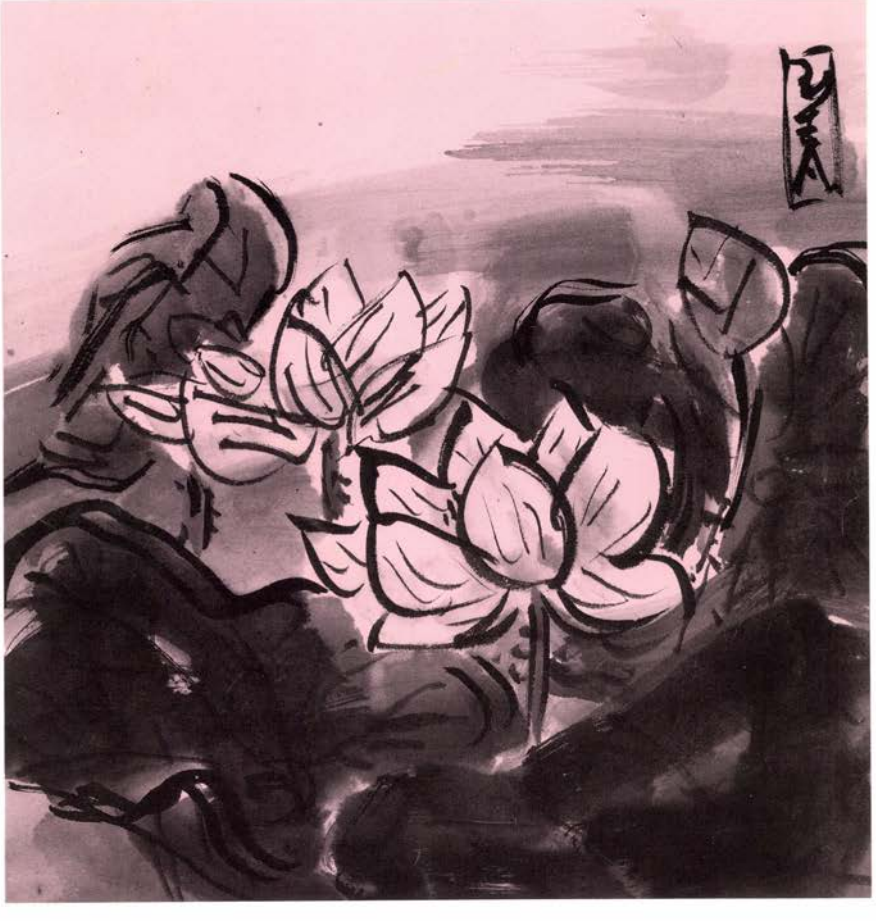
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成五年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七九五号



日川協加盟

No. 795

八月号

『川柳塔』800号記念全国誌上川柳大会

課題と選者（各題2句）

「大　空」　橘高薫風
「スタート」　斎藤大雄
「　妻　」　工藤甲吉
「　嘘　」　大木俊秀
「時　計」　森中恵美子
「雑　詠」　黒川紫香

○**参加料**　1000円

○**賞**　各題の秀句各3句に呈賞

○**締　切**　9月30日（木）

○**発　表**　『川柳塔』八〇〇号
（平成6年1月1日発行）

○**参加方法**

本誌の末尾にとじ込んだ参加用紙をきりとって所要事項と各題2句を書き、同人・誌友・一般の別を明記、参加料を同封して左記へ。

〒545　大阪市阿倍野区三明町2－10－16
ウエムラ第2ビル202号室
川柳塔社　誌上川柳大会係

八〇〇号記念川柳大会

とき　平成6年1月16日（日）午前10時開場

ところ　なにわ会館・金剛の間

兼　題　（各題2句・正午締切）

「　鏡　」　礒野いさむ選
「似　る」　奥山晴生選
「ジャンプ」　小松原爽介選
「　酒　」　田中好啓選
「　母　」　時実新子選
「　旅　」　山田良行選
「眼　鏡」　小林由多香選

（事前投句）「こころ」　西尾栞選

会　費　3000円（軽食・記念品・発表誌代）

懇親会　同日午後5時から同会場で開催
会費8000円（予約制　200名）

主催　川柳塔社

後援　㈳全日本川柳協会

路郎門十哲

西尾　栞

昭和三十年頃の八月の或る日だった。商工会議所から講演を頼まれ、麻生先生を紹介して案内した。その帰り、道頓堀のある料亭で一杯やった。先生の御機嫌を損じたら破門になるという話がまことしやかに喧伝されていた頃だったから、つかず離れずの距離を保っていた私だったが、講演もうまくいったので、先生の御機嫌を見すまして、「蕉門の十哲というのがありますが、路郎門十哲というのは先生考えておられますか」と訊ねると盃を口元へもっていってはおき、もっていってはおかれて、「栞君、君は考えたことがあるか」と問われたので、頭の中にあった、「出雲の尼緑之助」「フン」「みちのくの工藤甲吉」「フン」「北陸は小松の伊藤茶仏」「フン」、浪速へ戻って「今よう一茶の須崎豆秋」「フン」「水谷鮎美」「あとは後世の人がきめる。豆秋までで今日はおいておく」と言われたのであった。その頃先生と鮎美さんは句集刊行のことで一寸したトラブルがあったので、先生はご機嫌斜めだったのだ。

蕉門の十哲は、御承知の

宝井(榎本)其角、服部嵐雪、森川許六、向井去来、各務支考、内藤丈草、杉山杉風、立花北枝、志太野坡、越智越人

の十人をあげている本があるかと思うと杉風以下四人をやめて、

河合曽良、廣瀬惟然、服部土芳、天野桃隣

の四人を入れているのがある。

路郎門十哲も、あと六人があげてある。路郎先生のじきぢきの弟子で、先生の謦咳に接したものでなければならないので、『川柳雑誌』の流れをくむ『川柳塔』の皆さんからは大分離れてゆくが温古知新、ルーツを知る上においても、面白いではないか。あと六人、ひいきひいきの川柳家を適当に入れるのもまた趣向の一つであろう。

×××××××××××××

八月十二日から四日間、阿波踊りがある。

「恋の罠あの眼だろうか眼だろうか」

「行先はどうあろうとも火の如し」

というような先生の句を白地に藍で別染めした浴衣を着て、川柳連というのぼりの元、路郎先生を先頭に参加したものだった。

この踊りは、蜂須賀家政の築城祝に町民が踊ったのが始まりであるが、蜂須賀家は小六という先祖が野盗で、若き日の日吉丸時代に助けられた恩義で、秀吉が大名にとりたてて阿波の殿様にした。明治時代、大名華族が御所に集まったとき蜂須賀茂韶(もちあき)候が謁見の間の控室にあった葉巻を一本口にくわえ、もう一本押しいただいて内ポケットにしまったのを見て誰かが「さすがお家柄だな」とひやかした話がある。それをいつしか天皇が知られ、笑いながらからかわれたという伝説がある。踊らにゃそんそん、もらわにゃそんそん。

座右の句
最後の最後の味方は妻なりき　（栞）

私の句
風鈴を鳴らすくらいの風といる　松本ただし

川柳塔　八月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　路郎門十哲……西尾　栞…(1)
視　点……田中　薫…(2)
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選…(4)
自選集……(40)
川柳の群像　勝谷山川児……東野大八…(44)
■古川柳　柳籠裏二篇研究（十八丁）……(46)
水煙抄……黒川紫香選…(50)
秀句鑑賞「同人吟……西田柳宏子…(48)
　　「水煙抄……門谷たず子…(71)
大空のこころ(32)……橘高薫風…(39)
銀河系……河内天笑選…(72)

視点

田中　薫

ぼくはいま、激しい憤りに身を震わせている。

六月十五日付各新聞が報じた、ケースワーカーたちの川柳なるものへの怒りが腹の底から突き上げてくる。ケースワーカーたちの人格への怒り、新聞の、川柳を矮小な手慰みの如く印象付ける記事の扱いに、やり場のないかなしみを覚える。川柳という短詩が持つ悲劇的な宿命の一面が、この事件にはしなくも露呈されていると思う。明治の新川柳以来、百年近くになる現代の川柳界になお古川柳の三要素の延長線上の視野でしか川柳を理解出来ない一部の存在に思い至るとき、ケースワーカーたちの悪態を、あんなものは川柳ではないと言い切ってしまえるだろうか。

前記の記事に対する反響を読んでも、社説子の「機知に富み、風刺を利かして」、「これは世相を風刺したり、日々の喜怒哀楽を話す川柳ではない」の言は、日頃彼らの目に触れる川柳の質をおのずと物語っているのである。そして、そのような川柳を発表しているのが、

茴香の花……小出智子選…(76)
「這　う」……石原淑子選…(78)
一路集「のどか」……北　勝美選…(78)
「ソース」……山口美穂選…(79)
初歩教室「水　着」……吉岡美房…(80)
■エッセー「男とおとこ」……土橋　螢…(82)
全日本川柳大会に参加して……田中正坊…(83)
各地柳壇（佳句地十選／原さよ子）……(84)
■句会だより　はびきの川柳会……塩満　敏…(96)
七月本社句会……(98)
柳界展望……(97)
八月各地句会案内……(103)
■編集後記……(104)

座右の句

目が覚めてやっぱり一人という広さ　（紫　香）

私の句

朝顔が咲いたとポチと話する　小玉満江

ほかならぬ川柳人ではないのか。ぼくの怒りは、川柳という文学に正当な評価を持たないジャーナリズムに、ぼくのかなしみは、川柳界内部の猥雑な十七文字を生む土壌の深さに向いている。十七文字の人事諷詠が川柳であるならば、古川柳まがいのおぞましい句と現代人の魂の子である作品との明確な一線を引きようがないのではあるまいか。現代の川柳の秀れた作品が、香り高い文学であるのは自明のことであるが、かつて心ある人たちが、「川柳」という名称からの脱出を幾度となく試みた苦悩を、いまやぼくは、自身の痛みとして理解するのである。

太平に慣れ、川柳人口の裾野の広がりに腐心し、同じ短詩の俳句の隆盛にあせりを覚えてあれこれの策を弄する一方では、川柳の本質は諷刺、批判性だと言いながら体制に色目を使う。そのような川柳界の一部の現実をもって、ケースワーカーたちの句へ、力一杯の怒りをどうぶつけたらいいのか。

心ある人たちにお願いします。もっと声を大きくしてくれませんか。川柳への偏見やいわれのない誹謗、ジャーナリズムによる侮辱は、川柳界が内包する無自覚な寛容、怠惰なる安定指向、批評・評論が育たない体質にその源を発していることを、川柳を愛するが故に、声を高くすべきだとは思いませんか。

深いかなしみと切なる願いを込めて。

川柳塔

西尾栞選

島根県　榊原秀子

供花抱く涙で濡らさないように
偏見か色の眼鏡を嫌いぬく
同行二人　札所巡りに山の藤
時どきは姑のめがねを拝借す
兄ちゃんの東北弁に買うリンゴ
たまさかのひとりに心躍らせる

和歌山市　福本英子

結婚の儀の夕刊　駅に捨ててある
無視される気楽さ菖蒲三分咲き
涸れているわたしと雨を待つ菖蒲
武豊だけを知ってる馬券買う
虚勢張り通してローンだけ残し
この次の節目が恐い骨粗鬆症

青森県　田中叶

階段のとこで切れてた糸電話
叱ってもやさしくしても生卵
すみっこで動けば逃げる白ウサギ
父の日に開ける深夜の冷蔵庫
少しだけ寝せて欲しいといういのち
水たまり波紋が一つひとり言

松原市　小池しげお

警察を出ると俄に腹が減り
サウナ風呂ひま人出たり入ったり
ほったらかしのさつきが咲いた五月晴れ
父の日に腕立て伏せを五回ほど
頭だけ下げておいたら顔が立ち
茶柱へ朝の電話が鳴っている

竹原市　小島蘭幸

魚の目が恐いと言ったのは長女
犯人はキツネ納得してしまう
税金が還る申告でもしない
金魚の朱　昼はひとりの箸をもつ
哀しみの果てかも一匹の螢
樹齢千年　社の雨は美しい

和歌山市　西山　幸

進退を問う隧道が続くなり
現実を病む錠剤の赤い色
鉛筆をまいにち削る自暴自棄
流行は追わぬ追わぬと刻む葱
広告の量へ疑い深くなる
明日になる前に欠伸をしておこう

松江市　舟木与根一

子供だと思たらあかん衣替え
美人薄命さや豌豆楚々と咲く
百薬の長も薬害出はじめる
セクハラは甲斐性無しということや
嫁も留守ぼやき漫才始めるか
ボランティアへ夏でも上衣着て出かけ

米子市　林荒介

まぼろしの蝶と遊んで来た月日
真行草　墨は己を主張する
心棒は仰せのままに回るのみ
ちちははが見え隠れする長い坂
いしぶみは明日に続く道しるべ
時計が違っていた先生と生徒

奈良県　田中紀美代

もやもやをあじさい寺に置いてくる
ふるさとに光るものあり風と水
アマリリス母へ手紙を書けと咲く
哲学を夫に少々侵される
やきもちにされてしまったアドバイス
菜園できのうのみみずとまた出会い

寝屋川市　堀江光子

話題尽きて梅雨入りちかい天気など
ライバルの果物籠が早や来てる
応待に店主一番腰低し
高い利子取られる金へ頭下げ
金の世に変りなさそう新世紀
かの人の去った日に似る桐の雨

下関市　石川侃流洞

好きだから少しじらしてみたくなる
実力は劣るが勝負時の運
松枯れて天女過労死した噂
楢山の旅へ仮面はもういらぬ
時代劇終ると父は寝てしまう

鳥取県　新家完司

山青く誘拐された子が戻る
恋人のために腕立て伏せをする
一軒の跡に三軒建てている
ムーミンの絵葉書だれに出してやろ
宵闇が迫りわたしが売れ残る

松原市　玉置重人

マスコットみたいに我が家の雨蛙
隣の奥さんを久しく見ていない
城建てた息子がおじん臭くなる
度忘れがひどくて辞書が放せない
番組に合わせて組んだスケジュール

奈良市　宮口笛生

買う方が安い野菜へ力入れ
小引出し妻のへそくり入ってる
鏡台に女の残り火暖める
病院へ通うているが達者です
阪神が負けて寝付きの悪い夜

堺市　高橋千万子

ひとり言届いたように娘の便り
落ちぶれた男に一日つぶされる
ボーナスを比べる父と娘の笑顔
一年中父の日だったと亡母の声
母親に心配事がある五十

米子市　林瑞枝

螢いっぴきいつも飼うてる胸の中
脳裏かすめるだけでもいい学ばねば
亡母は港で今でも舫い船を抱く
糸口を少し噛ったのは土竜
帰ったようの声にラッパの葱坊主

八尾市　宮西弥生

長生きをしたいしたくない梅漬ける
お月さま出てはるうちの洗濯機
乗る駅も降りる駅もひとりなり
来る人よし去る人追わぬ自動ドア
風雪に耐えた誇りの熟女脱ぐ

和歌山市　松原寿子

優しさへこころの炎ゆれ動く
檸檬の香が真紅の傘へ溶けていく
導きへ重荷をそっと積み替える
夏の蓋あけてゼロから翔んでみる
一寸豆を茹でるこころの青に触れ

大阪市　西出楓楽

原色着て夏を手玉にとっている
シンプルに生かせてくれぬ慶弔費
わかってるから頷いたわけでない
物忘れこわいことある予感する
流れ星　冬彦ひとり欲しくなる

倉吉市　奥谷弘朗

人様を救う見事な嘘を言う
ライバルの影が射程距離にある
父の席俺が座っている温さ
共白髪　仲よしだけが自慢です
世話好きをもの好きぐらいしか見てくれず

作戦を練る腕組みにある自信
欲張ると公私の別が分からない
金ずくで済まぬ浮気はしたく無い
カードには疑心暗鬼の種がある
深追いが過ぎて招いた逆効果

堺市　楊井二南

生国は摂津の国に御座候
七十一あといくばくの余命表
体重計いのちの重さ計るなり
月並みな一生もよし羊雲
「大病人」観て尊厳死かんがえる

豊中市　田中正坊

生きてたかお前の噂していたぞ
お前が禁酒禁煙変ったナー
団体の参拝　私は下で待っている
朝昼晩　うなぎ　あさりの浜名湖
喜寿過ぎてボケないように畠仕事

柳井市　弘津柳慶

大正の井戸の蛙で七十年
悔しさに罪もない石蹴りあげる
軍人恩給これが命の代償か
句読点やたらに打っている焦り
ふところの都合も聞かず義理が来る

高槻市　川島諷云児

足の裏よくこそ耐えた八十年
四百四病患いつくして呆けに入る
鰻香を嗅いで隣のコップ酒
癌病棟　老人棟と隣り合う
地獄一丁目血の池湖畔に家を買う

名古屋市　越村枯梢

服のしみもみ洗いして夫婦坂
外面がよすぎて困る妻の愚痴
優しい人がいいと私にだけのこと
頑張れというと息子が駄目という
家裁出るとうにヒューズが飛んでいる

今治市　矢野佳雲

苦労と愛の糸で織りつづけた余生
泣かされた娘から届いたカーネーション
カネのない顔は絶対見せられぬ
耐えて七坂火を噴く山も越えて来た
生き下手　死に下手ひたすら枯野めく

岡山県　嘉数兆代賀

流行らない帽子かぶって疑われ
栗の花まだ人間はやめられぬ
方丈に花あり和尚今日も留守
雨三日梅雨の金魚は笑わない
紫陽花の雫に濡れている別れ

藤井寺市　吉岡美房

松江市　柳楽鶴丸

酒煙草やめて生甲斐ありますか
男女差別が勲章にありました
天衣無縫　大好きな言葉です
幸せな死を求めて日々を生き
変曲をしてうたいますと言う音痴

島根県　堀江正朗

転んでも起きるだるまと同じ道
足も歳か二歩が三歩の距離になり
手さぐりの歩幅も妻といる強味
人が人を住みにくくする文明か
活力を庭の若葉は話しかけ

島根県　堀江芳子

師にあまえあまえ人間教えられ
本心を明かして少し悔いも抱き
散髪の匂でとうさん帰って来
預金より借りてほしいと言う銀行
エメラルド好きで似合うと思う指

豊中市　安藤寿美子

岩不動　潮の満干にかかわらず
菖蒲園　晴雨兼用傘がよし
クラス会愚痴は聞き役がよろし
土埃あげて旧家がこぼたれる
マニアにもコレクターにもなりきれず

笠岡市　松本忠三

関西に住みついたのにべらんめえ
余所行きな顔で奥さんよう言うわ
ひらめいた第六感に物申す
目に青葉　顔を見てない初鰹
食物の旬　人間が狂わせる

島根県　小砂白汀

その日ぐらしの血を吸うごとし消費税
一銭五厘のいのちが未だに生きている
神でさえ過失先天性障害児
裸婦の像わいせつだろうとなかろうと
老人にゴミを拾わす福祉国

鳥取市　両川洋々

リトマス変色　恋の重病かも知れぬ
考えてみいな男が子を産むかい
ひきょうだぞ玉虫色の主義なんて
決断をしたにウロチョロしなさんな
ハッピーエンド僕にはそれが似合うまい

鳥取県　松下たつみ

ふる里も俗化乾いた人ばかり
アイデアのない一枝が挿してあり
美しくなれるお金はかかるだけ
耳と目と口がやっぱり犯人か
定退の後は図太く生きてやる

鳥取県　土橋　螢

約束を忘れ小指を噛んでいる
八月の螢悲しい火をともす
欲求不満の爺さまに叱られる
汗かいてよろこぶ父の貧乏性
赦そうか抱こうかそっと叱ろうか

富山市　舟渡杏花

その果てへおんな裸でダッシュする
再生紙の過去など問うて下さるな
閑話の中におにぎりが来て座る
引出しに息づく老いの相聞歌
あのときの意気投合のツケがくる

西宮市　奥田みつ子

目の届く所にいつも居て欲しい
素うどんの味に似てきた凡夫婦
素うどんがこの頃性に合ってくる
淋しいのだろう怒ってばかりいる
麦秋に身についてきたランドセル

西宮市　西口いわゑ

粛粛と十二単に風薫る
さみだれへ読書をせよと蛙鳴く
文学を気楽に語る人と飲み
さんちかへ来たというのにうどん食べ
丁重に個性的など申し上げ

廿日市市　林野甦光

喝采の坩堝でねじを締め忘れ
割り箸を割って和解に漕ぎつける
軒借りた犬がお詫びのふりをする
介添の専門医とか楽しそう
その花は嫌だと言わぬ石仏

東大阪市　森下愛論

意識する女と合うた瞳にあわて
医師の目を見て脈拍ちと狂い
渇水期河童の暮らし考える
うろたえた心口実作り替え
初老感忘れせっせと愛綴る

大阪市　津守柳伸

裾分けで繁る枝葉の核家族
七福神平均年齢問われても
遍路笠　淡路は花の絶えぬ島
休日は少しリッチな三面鏡
カラオケの友姦しい充実感

寝屋川市　稲葉冬葉

パチンコ卒業　専業主婦になる
お得意様を遠ざける煙草の輪
よたよたと老犬が後ついてくる
夫以外の男の人の夢を見た
ろうそくの灯が消えるまで離れない

大阪市　本間満津子

ジーンとして日本だい好きおめでとう
還暦の人を若いと羨む日
今日だけの今日と毎日思えども
怖い話を聞いても恐くない怖さ
古い服捨てる理由が見つからず

大阪市　神夏磯典子

折返し過ぎて時間の早いこと
新しいパジャマいくつになろうとも
ドア固く人情少しずつ薄れ
八十歳さほどに嫌な齢でなし
突っ走る足雷に止められる

京都市　山海友熙

お妃の無垢の天地に祝詞受け
新茶入れ夫婦の鬱を聞く個室
庭下駄を穿いてひとりの春惜しむ
五山の火燃えたぎるとき亡師を送る
妙法の「法」の火床の夏わらび

熊本市　永田俊子

峠路で句読点打つ男みち
炎えた日を古ネクタイは語らない
夢で終った無冠の父の冬帽子
白い花が白く描けない罪ひとつ
丸い絵が上手になった二度の職

高知県　赤川菊野

子の建てた家に私の部屋がない
山下りて与作がひげを剃っている
美顔術　顔より心にほしい人
結ばれた夜の海鳴りを遠く聞く
安産のお守り札を姑がくれ

京都市　都倉求芽

人間の臭を溶かす森の風
加減乗除　世の中うまく出来ている
風化など決してさせぬ胸のひと
余暇多忙　時をめくるのが惜しい
月交代の楽しみ年金と大相撲

尼崎市　春城武庫坊

はまなすの真紅に永遠の幸托す（奉祝雅子妃）
迷惑にならぬ生命を考える
寝ころぶと空一面が僕のもの
やんわりと京都ことばで逃げられる
先ばかり考え過ぎて不眠症

尼崎市　春城年代

ぽっかりとなに考える埴輪の目
身軽になって人生の坂いろはにほ
固絞りの雑巾で拭くぐいぐいと
けじめの好きな亡母をそっくり受けついで
独身貴族宣言されてお前もか

寝屋川市　柴田英壬子

皇太子さまが虜になったバラ（皇太子殿下御成婚）
雅子さまは女神ユノーの化身かも
梅雨からの戦へ明るい色を着る
面白くない日甘栗敵にして
負けて勝つ顔でみがいた靴を履く

京都市　松川芳子

蜆汁昔むかしの味自慢
一言が重い名刺の裏表
婦人科の看護婦さんも妊婦さん
ローンだけ残して消えた土石流
軽がると他人の噂持ち歩く

奈良市　天正千梢

夜叉の面はずして渋い茶をすする
失ってから値打が分かって来
四季報に笑いもらった事もあり
夢さめて父のマントが恋しなり
政界のイタチごっこに末世感

大阪市　藤田頂留子

ポストから戻ってあれは誤字だった
六月九日どこ回しても御成婚
お二人の話題まだまだ週刊誌
北鮮よ死の商人にならないで
離したら無口になった鍵の鈴

大阪市　河井庸佑

目立ってる割に人気のない男
頑固者納得させる策を練る
気苦労はあるが望んで掛けた椅子
なってみてわかる上司の気の疲れ
意見具申上司話の分かる人

宇部市　平田実男

島原の人　神様を信じかね
舌二枚ないから大臣にはなれず
エリートに履かれ地下足袋落ち着けず
この酒が絆を太くも細くもし
傾いた日もありました夫婦独楽

美祢市　安平次弘道

ストレスがたまり心に雨期続く
貧しさを言わない亡母の木綿針
あの頃はお利口だったクレヨン画
モノクロが似合う凡夫の自画像だ
無人駅になってもつばめ帰って来

西条市　片上明水

手が空くと雑巾を縫う母の癖
制服を脱ぐと間違いなく親爺
寺近く住んで縁起を口にする
趣味の無い父だが人の世話が好き
左遷地で落ち着いたのか来ぬ便り

今治市　越智一水

急いでも急がなくとも道ひとつ
耕せば土の匂と陽の匂
草花のひとつひとつにあるいのち
麦笛を吹く子へ風と野の光
愛情のキャッチボールで夫婦仲

寝屋川市　江口度

お隣を鍵代りにし妻の留守
雨止まず妻にもうつる大欠伸
ぶらんこの風に登校拒否はない
よく見ればぶらぶらしてる蟻も居る
好きとまだ言えず小石をけっている

米子市　小西雄々

点滴の遠くで弾む音がする
茄子漬けの紫　亡母の三回忌
金婚へもつれた結びすぐ解ける
楢山は遠くて近い百合ひらく
予期しない叙勲へ妻と息を呑む（叙勲受賞）

米子市　石垣花子

どう染めてみても出せない亡夫の色
腹割ってほろにがい味だけ残す
竹トンボ上手にけずり無口な子
停退までは靴も磨いて三つ指もつく
仲良しでずっと通せる距離にいる

米子市　野坂なみ

丸い輪をつないで鳩を呼びよせる
ひびかないその足音に気を許す
ライバルと距離が開いてゆく快感
人事と思った古希の薬包紙
航路みな向うの岸へ続いてる

米子市　政岡日枝子

椿事だろうか妻の声に艶がある
血筋辿ればみなO型で楽天家
鱗流してみな善人になるお風呂
悪友と行く温泉街の延長線
男辿れば回転椅子にある孤独

米子市　田中亜弥

残高はまだまだ人に見せられぬ
いっぴきの螢が団地さわがせる
果たし状　貧乏神へ届いたか
後ろ指それでも男たじろかぬ
霧につつまれ父よ母よと声かぎり

米子市　青戸田鶴

馨しい緑の中にいて不安
書き上げた充実感にひたりきる
幸せをみつめ直している日暮
遊び心いつも大切にしておこう
円い輪の中のやすらぎばかり追う

米子市　菅井とも子

途中下車して故里を確かめる
赤い字を彫ってあの世に行く支度
叙勲から君の背中はまるくなり
二人だけでわかる話を抱いている
弱点を知ってて二人丸く老い

米子市　澤田千春

鏡を磨く　生きる世界が広くなる
あの日から無口になって縄をなう
無口の父が老いてこの頃よく笑う
御先祖にひびけ祈りの鐘をつく
大臣と仲よしだったかごめの輪

米子市　光井玲子

初夏の風　紫蘇の香りを連れて来る
雑学で中途半端な道歩く
時々は頭を醒ます墨をする
いくつになっても手繰りたい母の紐
好きですと声に出したら落着いた

米子市　白根ふみ

立ち葵　廃家の壁を突きぬける
研磨機に出会って炎えるダイヤ粒
おりおりの庭　木漏日といるいのち
ボトルあけ愛のその先ゆらゆらと
みぞおちに昔の風がこびりつく

米子市　中井ゆき

雑草の念力私に押しよせる
トーン少し落した声をとどけよう
仲よしの傘がそのまま置いてある
仲よしを胸にしずめて薬包紙
三拍子揃った人に逢いました

米子市　新正子

三歳の絵によろこびが満ちている
青春をバラ色だって言う大人
一〇〇色のクレパス一〇〇の夢がある
色々とあって頼りになるワイフ
バーコードの笑顔がとても恐ろしい

和歌山市　堀端三男

今言えば相手逆撫でするだけだ
飽食の果ては麦飯食っている
立居振舞声まで亡妻に似て来る娘
核心に迫ると話題変えられる
クラス会誌みんな一病持っている

和歌山市　牛尾緑良

鉛筆の長さどこまで信じよう
握手して笑ってみせる太郎冠者
再生紙ほどの余生が絵にならぬ
人格の向うにあった紙オムツ
ダイエットの理論いくつも知っている

和歌山市　内芝登志代

パレードへ今日は女児まで肩車
長かった一日でした雅子さま
衣替えピチピチ肌へ初夏の風
歳はとし好きは好きだと恋してる
慰めの言葉につまる愚痴ばなし

和歌山市　垂井千寿子

燃ゆるもの無いが独身貴族部屋
泥かぶる覚悟へ心晴れてくる
突然の蒸発　他人には予感
紫陽花の好きな女でビル谷間
悪いとこ無いから困る検査室

和歌山市　木本朱夏

砂時計やせて秘かな恋終る
ゴーギャンの絵の中に棲む朱の女
往時茫々海は愁いを抱き眠る
賑やかに値踏みされてる胡蝶蘭
縁を切るお金冷たい肌触り

和歌山市　桜井千秀

うぬぼれ鏡煽てすぎてるようですね
出る杭も打たずにおけば役に立つ
十年に一度が余り早すぎる
健忘症の私を嗤うメモ用紙
エレベーターの中であなたと二人切り

和歌山市　福井桂香

日傘くるくる白い腕に遊ばせる
私の声雑音になるもどかしさ
爪を塗りかえ初々しいおばあちゃん
花びらを盗む　くちびるが渇く
政治改革　あじさいのくび重し

和歌山市　宮口克子

四の五のと人生いろは解けるまで
異性とは感じないけど良い男
手におえん大きな大人いう子供
つくばいに夜店の金魚二三匹
品性が覗く言葉の端ばしに

和歌山市　細川稚代

暗黙の了解だったとは知らず
さつき雨翡翠のような豆を剝く
パワー下さい　私　泣きたくなってくる
シグナルの青が続いて佳き日なり
カサブランカに気位負けをせぬように

有田市　松井かなめ

上京に内助の功を反省す（夫叙勲に際して）
その緊張二日も続く皇居内
お陰様忘れてしまう絶頂感
ファックスや電報　祝も山と積み
胸に勲章　熱気の中で笑む夫

海南市　三宅保州

吊り橋の上で好きとは卑怯です
かっこよく辞表を叩きつける夢
母物のドラマは男でも泣ける
見せて下さい飼主の血統書
再生紙ちょっと売れっ子過ぎないか

和歌山市　山田高夫

独り身のなんと虚しい目玉焼き
泥水に生きる女のうすい眉
過労死は人身御供ということか
世渡りのうまい男で多面体
電話でもしろと電話で子を叱り

和歌山市　玉井豊太

看板は迷惑工事わびている
軒に草鞋つるして京の映画村
家建てて男盛りをまっしぐら
背を向けた味方切っかけ待っている
妻は今日着て出る服が決まらない

弘前市　真喜内實

起床して背伸びをすると父の顔
晴れた日の仕事は薬ほどほどで
早乙女に雲とお山の水彩画
幸せが女のうなじからあふれ
話してて顔ととのってくる才女

弘前市　村田善保

終戦のあの日を想う蟬時雨
八月の海に祈りの鎮魂歌
虚と実の狭間にあった置き手紙
腹芸を秘めた男の深い読み
運命に流れ流されユダになる

弘前市　小寺花峯

紙切れがしどろもどろの新任地
自画像を描いて鼻毛伸び過ぎる
這い上がる岸辺を探る落ちこぼれ
万引きの言葉を知らずにジュース飲む
だが孫に見せてやりたい肩車

弘前市　佐治千加子

テレビ電話だったら困る癖を持ち
過去形の言葉とろけるチーズ載せ
歩道橋風の噂に見送られ
千手千眼見通されてる腹の底
自己欺瞞ある日魔性の爪染めて

黒石市　相馬一花

金持ちに見られて困る二重顎
朝顔が教えてくれる終戦日
ジーパンに女盛りを閉じ込める
いろいろな事もあったが石の下
我が家からスナックまでは一万歩

黒石市　千葉風樹

柩からオカリナの音聞こえくる
雪が舞うテレビの中にある故郷
ウルトラマンの面を付けても母である
おはじきの王座ゆるがぬ祖母の席
好きという言葉が言えぬゴム鉄砲

十和田市　斉藤劦

津軽のりんごは曼陀羅とも思う
買い取った牛が流産してしまい
金の成る木に提灯を下げており
大会の挨拶騎手達よ駿馬達よ
梅雨空をすかっと突くはVサイン

十和田市　阿部進

草笛を吹けば昔がよみがえる
タラの芽の天プラおいし旬の味
首横に振ることしないお人好し
古里のアユ住む川は汚せない
甘い香をアカシヤの花ただよわせ

大和高田市　岸本豊平次

やっとこさ峠を越した息になり
お茶漬けで満腹老いの妻楊枝
播いたより芽生え確かにこぼれ種子
粗大ゴミまだまだならぬ日曜日
コマーシャルの間に逆転ホームラン

西宮市　門谷たず子

都市砂漠雲は故郷へ流れゆく
胃カメラは白　紺碧の空がある
対角線あなたがだんだん遠くなる
今日の倖せ明日につづけとつむ積木
稜線の向うの晴を信じよう

姫路市　人見翠記

草花の根っ子の強さを悟りたり
その家の草木の手入れ主の顔
齢よりも今日一日を恙なく
四世代生きて祝賀も二度三度
打てぬならうつまで待とう長嶋さん

箕面市　坪田紅葉

見合いから披露宴までこのホテル
海浜のホテル冬から予約する
思う様にならないいらだち絵の具皿
簡単にしたいと異国の式もよし（孫の結婚式）
世の為人の為なぞ遠い夢

高石市　浅野房子

農協の御一同様着くホテル
ホテルから帰りお茶漬食べ直す
イエス　ノーあなた次第で決めている
青天のへきれきへ猫ひた走る
カレー三日そろそろあきてきた独り

寝屋川市　岸野　あやめ

放射線あてて病気も小休止
ドクターの言う強運を信じよう
ヒス起こりそうでデパートひやかしに
セールスに説教してる電話口
退院日十方おろがみたてまつる

宝塚市　丸山　よし津

負けいくさ雲はゆっくりついて来る
病名は告げぬ姉妹で母看とる
海に生き風のささやき聞き取れる
親のエゴ吃水線が狂い出す
赴任地で出逢った妻と根を下ろす

香川県　松村　迷観子

胸襟を開くと空は晴れてくる
栄転の椅子が少々高すぎる
端ばしを通ると路肩ゆるみます
澄み切った月に心を見すかされ
ツッパリもワキのあまさも相撲感

香川県　木村　明人

予約したように毎年ツバメ来る
大内山来世紀向きの顔揃う
六十年の不作互いに言い出さず
陰日向ない人生で悔いはない
六神丸ほどに効いてる袖の下

香川県　成重　放任

JR定員オーバーなんのその
医者の顔見て明るさを取りもどし
宴会を終え空腹で帰途につき
あの人のためにと嘘もついてみる
見抜いても知らぬ素振りで聞き流し

香川県　川崎　ひかり

言い訳が下手で嘘だとすぐ解る
名を聞いて慌てて上茶に入れ替える
あの嘘はあれで良かった人助け
欠点をさらけ出してる昼の月
嘘をつくルージュはまっ赤な方にする

香川県　工藤　吟笑

学園がそれぞれ色を染め上げる
丹念に足を洗って出直そう
馬の合う方へ向いてる回り椅子
用はないのに話したい人が居る
訪えば名人瓦礫の中に居り

八尾市　宮崎　シマ子

蚊も蠅も一人ぐらしの友である
当てにして利息は先に使っとく
次がある妻に白旗振っておく
スーパーマンに逢うて飛ぶのをやめた魔女
賢兄がうっかり踏んだ五寸釘

八尾市　高杉千歩

戦後史や兄の余命も生き継いで
五十回忌あといくばくの霊まつり
均等法　男にもある内助
仲よしのままで夫婦しています
無口だと信じてるのは社長だけ

八尾市　山下美津留

裏金が保釈の時に威力みせ
好きな事してきた父のちびた靴
秘め事を全て聞いてたマネキ猫
少年を脱皮する日の花言葉
旅先でゲートボールに狩り出され

八尾市　吉村一風

土の香の語る歴史のメモをとる
妻の漬けた梅酒の味見ちょっと過ぎ
とんぼ返りの出張の酒またうまし
お互いに馬鹿になってる嫁姑
プライドが邪魔して頭よう下げぬ

大阪府　籾山隆

生き様に脱輪しない見えぬ線
ここはそれ味方しておけ損はない
何はともあれ老眼鏡とクスリ持ち
こだわりの虫一匹が胸に棲む
調律師妻と合わないハーモニー

八尾市　片上英一

病室で浮き世の音を見ています
軟禁をされております　オー　ヘルプ！
王様になったようなり車椅子
血を換えてみたとてポパイにはならず
うす味のミニ会席を据膳で

島根県　西村早苗

命日の仏に新茶封を切る
だます日の女の癖で爪を噛む
滝しぶきここが一番よい茶店
去り難い眺め足もとからの風
誰か言う今朝の空気はうまいぞな

出雲市　板垣草丘

解るからしゃべりなさいと出雲弁
飛行雲　中州で草を刈りながら
梅干しで単純労務の日のお昼
伝達網　悔みに行こかやめようか
立ちくらみ夾竹桃に陰はない

出雲市　金村青湖

散る花へなお六月は雨の日日
裏がえし裏がえし乾す梅雨のうつ
過ぎ去った月日を梅雨でたしかめる
六月の空に建前論ばかり
紋服の袂で育つ黒い蝶

出雲市　久谷まこと

花も良し葉桜もよし呑み仲間
陽が沈む明日のために手を合わす
慎重に角を曲ったカタツムリ
セールスが三段論法踏みはずす
故郷の訛りをくずす県外車

出雲市　島祥庵

情念の森で振り子が蘇る
少年の夢に地球は狭すぎる
軍艦マーチの中で住んでる春の街
平成五年鳩が歩いてばかりいる
変りばえしない十指を折っている

出雲市　吉岡きみえ

背筋しゃんとのばす老母の生きざまを
いいことが続いて明日がこわくなる
アイロンのぬくもりさめて遠花火
役立たぬ指はつめだけよくのびる
ベランダで星を数えている女

出雲市　園山多賀子

いくばくの余命を庇う夫婦坂
刻の砂こぼれわたしを眠らせぬ
苛立ちがあり点と線つながらぬ
体型はレディメードに合わせます
久濶に杖持ち替えて握手攻め

島根県　松本文子

恋という字に何回も殺される
現役の頃には酒も美味かった
泣く鴉　笑う鴉も居て平和
赤富士の絵をいつまでも掛けておく
花散ってから責任も軽くなり

出雲市　石倉芙佐子

お局様の遙かはるかに虹が立つ
矢絣の中に交じって畏まる
禁断の木の実が熟れる白昼夢
琴の音も絶えて久しい桔梗の間
窮屈な矢の羽結びに少し慣れ

出雲市　伊藤寿美

噴水の向うに虹が立つ逢瀬
海行かばを信じた頃の夏の雲
みどり児が勾玉の形して眠る
楽しげな手話の少女と隣り合う
欲張りをみなこらしめている童話

出雲市　竹治ちかし

百の罪許し一つの善を待つ
親と居るよりも楽しい友が出来
まだ親の光が射している暮らし
歳月が他人行儀な里にする
何万も電話を掛けて娘は元気

出雲市　小玉満江

繃帯を大げさに巻く少年A
心ない言葉に寡婦はじっと耐え
侮って漬物石に押し切られ
大会に備えて髪を染めに行く
誕生日だあれも私を振り向かぬ

島根県　佐々木鳳笙

灯台の横たわりたい日もあろう
春雨じゃ濡れて参れぬ酸性雨
日曜大工釘も夫も腰伸ばし
ひと声がしじま破った山の宿
葬列の後ろは私語の列となり

岸和田市　福浦勝晴

遺産分け意気込む女のマニキュア
豪快な文字が躍っている色紙
つむじ曲りの案外几帳面な文字
旬の味飽かずに食べる豌豆めし
ワープロで慈悲なく馘首五　六人

岸和田市　高須賀金太

お隣と比べられてはかなわない
鈍痛をコントラバスのように聴く
ひとり言妻に聞かれたかも知れぬ
金バッジつけて悪さをしてみたい
愛してますと言われたらどないしょう

岸和田市　島崎冨志子

ルールなど分からずサッカーに燃えてます
親と娘の絆に負けて同居する
老若のはざまで息をする六十路
バカにしたゲートボールに遊ばれる
嘘をつくつもりはないが物忘れ

岸和田市　原さよ子

夏風邪を気遣う嫁の手の温み
人波に押されてまわる海遊館
なにげない一言重い梅雨じめり
初夏の色今年も茄子はよく漬かり
葉桜になって静かな句碑の里（弓削の川柳の小径へ行って）

岸和田市　岩佐ダン吉

鯨にはとっても居丈高な国
蜆汁吸う母さんがぶつぶつと
宿敵を破って苦い酒となる
少年のあの目この目よ飢えの列
蛙の声消えてさみしい里となる

岸和田市　三輪通彦

土壇場で血は水よりも濃いと知る
男気を出して無い袖振る羽目に
双方が強気でいつも平行線
お見舞いへジョークを言える回復期
平和でも殖えすぎ困る寺の鳩

唐津市　田口虹汀

孫が来る楽しい疲れ提げてくる
条件をつけて留守番買って出る
苦も楽も半分ずつという夫妻
我田引水畦が崩れた永田町
雲を呼ぶ龍昇天の機を狙い（弔句）

唐津市　久保正剣（正敏改め）

タイミングいろいろあっていま独り
妻の留守外野席から監視され
貪欲に裸体を舐めているレンズ
体力も気力も落ちている枕
モナリザの深爪隠す薄笑い

唐津市　仁部四郎

聖堂のドームで遊ぶキューピット
大番のハンカチ男の汗が好き
生来の内気でいつも賛成派
へそくりを隠す秘伝もお嫁入り
変人の証拠秘密のカネがない

唐津市　浜本義美

物忘れはげし呆けとぞ思わるる
一両日　無言無食に記憶なし
ブラジャーというものもなし島の海女
鉱山は消えても夏の祭りに燃える友
かなづちの娘が水着買い替える

唐津市　浜本ちよ

無口な子ワイパーのごと首を振り
判官びいき庶民の性の心意気
呆け始めくだらない事言い募り
息子らがいとも上手に無心する
冗談も言えぬ娘で緑遠し

呉市　槇田英詩

ちょっかいを出すと濁ってくる流れ
美しいその心根に惚れました
満持して黒子脱ぐ日を待ちわびる
ホスピタル美人ナースとすれ違い
暇ひまに内助の功の妻である

竹原市　森井菁居

プロセスに価値観がある多数決
溺愛の息子へ親の目が狂う
一歩登れば一歩遠のく茜雲
セールスは天気の事に触れぬよう
いそいそと帰る新婚さんで良し

竹原市　時広一路

生命線くっきり自信つけてくれ
また一つ役を貰ったボランティア
幸せを楷書で書いて崩さない
太陽と仲の良い日の海光る
しょうがない唯一言でお人好し

竹原市　岡本清水

農家に生まれ土に育って土に生き
四人兄弟甲種誇った過去は霧
お互いの未知数知った気の夫婦
過保護 保護 岡目八目だけが知り
頑張れば疲労が残る農繁期

竹原市　岩本笑子

雨みどり濡れているのは私だけ
少しずつ積み上げてきた夢の数
縞シャツを着てます夏になってます
命よ命アコヤ貝から出た涙
清貧の思想を軽く読めますか

広島県　藤解静風

夫婦から妻を引いたら零になる
妻に効いて私に効かぬ風邪薬
背景は妻だとみんな知っていた
時々は胃の腑も酒で洗わねば
敗残兵の顔で出てくるパチンコ屋

広島県　田村新造

蜘蛛の子を散らしたように捕虜の群れ（興安嶺逃亡記）
逃げまどう関東軍の成れの果て
柵破りもう今からは捕虜でない
集団脱走　兵隊の血がまた戻り
三百が逃げて三人生き残り

岡山市　川端柳子

再起する命の光試さんか
うまい話にこだわりつづけた街の灯よ
あの日雨あじさいの花露置いて
通過して惜しい大きな愛でした
目が合うてちりめんじゃこさんゴメンナサイ

岡山県　小林妻子

顔ぐらい洗えと剃刀が怒る
物好きがまだこの顔に用がある
まとまりの悪い顔だが売れている
この顔で三途の川は渡れまい
えんま様の気に入る顔にまだならぬ

岡山県　矢内寿恵子

足し算が下手で出世に遠くいる
余生とや風にもたれて生きんかな
亡びにも美学重ねて戦の譜
蒼天も雨も又よし老いざくら
Uターン都忘れが咲き揃う

岡山市　井上柳五郎

老いの身に健康という宝もの
灰汁のある過去も今では好々爺
ど忘れの名前どたん場ぽかり浮き
横道でやっといい人めぐり逢い
大切な一日なのにはや暮れる

岡山県　荻野　鮫虎狼

無事平穏呼び捨てにする妻が居る
置き手紙猫の餌まで書いてある
常に輪のまん中に居て粗大ゴミ
足跡をたどれば水子がまた一人
三の糸音痴がひとり出来上がり

岡山県　花田　たけ志

からくりの時計で風土記が見る陽の目
嫌われる仕事が福を連れて来る
大正が平成刻む古時計
税関の限界補う麻薬犬
取り締る方が打ってる覚せい剤

岡山県　二宗　吟平

一門の誉　証書を孫が受け
この証書　世界のためになれる幸
神様に愛と誠を授けられ
ボケルぞと尻を叩きに行って見る
犬が逃げ探す私を探しとる

岡山県　山本　玉恵

胸に住む螢を放つ山の宿
主役にはなれぬ裃着て居ても
口下手をトレードマークで生き伸びる
だんまりを通した父のちゃんちゃんこ
価値観を変えて立場を考える

鳥取県　林　露杖

御成婚うちの息子も嫁欲しや
Jリーグ俺は野球の方がええ
年金のやり繰り遂に底を衝き
忘れもの取りに戻って忘れ物
永劫に眠れよ胸部動脈瘤

鳥取県　土橋　はるお

海で食う社長の椅子もあるんだよ
るんるんに靴が嬉しいはずがない
赤褌が海の心を知っている
声に自信はあるがカラオケには弱い
ポイントがぐらぐら変わる話だな

鳥取県　羽津川　公乃

嫁に出す娘が急に惜しくなる
医療費はゼロ家計簿もうれしそう
責任の軽い荷物が性に合う
充分でないが自由な金と暇
娘より嫁を大事に丸く住む

鳥取市　西原　艶子

瓦葺き直して雨も好きになる
娘のいない老後を思う預金帳
女ですほんのり香る位置でいい
ひと目逢うだけでうれしい日に変わり
人と手をつなぐうれしくなってくる

鳥取市　春木圭一郎

妻を得た自信　仕事も冴えてくる
新しい自分　旅から見つけ出す
駒音が冴えて名人交代す
もう一度チャレンジきっと花が咲く
煮え切らぬ心を計る嘘をつく

鳥取市　美田旋風

車間距離守れば恋が実らない
ぬるま湯が好きでうだつが上がらない
遺伝子がわかればやる気など出まい
終章を汚職で飾る議員さん
美人アナ夜更けの視聴率稼ぐ

鳥取市　武田帆雀

説教はせずに心を聴いてやる
発信機巻かれた首と知ってない
零パーの天気に菊の土を干す
初恋の女と整形外科で逢う
義理欠いた電話お逢いしとうます

鳥取県　西浦小鹿

ハンストで正義の声を聞いている
骨かじる男の意志をみせておく
斬れぬものを心のなかで斬ってみる
運のない男ボタンのかけ違い
現役のままで引退させられる

鳥取県　さえきやえ

桐の花そろそろ答ださないか
愛きょうをふりまきすぎるライラック
匂さえよけりゃどくだみ嫁にする
どくだみを差別する気はありませぬ
もらい手がひきもきらない姫うつぎ

姫路市　大原葉香

移転先貼って老舗が都落ち
婦唱夫随命をつなぐ車イス
白旗はとうに上げてる車イス
後れ毛が時々風に揺れ女
曖昧模糊終着駅がまだ見えぬ

姫路市　丁坪サワ子

敬慕する人のある日を見てしまう
それからが聞きたい私の野次馬さん
民放も女尊男卑のコマーシャル
隣の花賞めると枯れた家の花
一日だけの敬老寝た子起すよう

姫路市　中塚遊峰

白鷺の波紋大きく城の濠
息子の嫁が決まる夢見た空し朝
捨てきれぬ亡母が手編みのチャンチャンコ
几帳面すぎて横道知らず生き
山門の仁王の睨みにする懺悔

静岡県　薗田　獏沓

旅かばん無料のお茶を二杯飲み
水溜り月を映して神秘なり
母さんを泣かす話はもうよそう
葬式の花輪の序列でもめている
スリップがガラスに映る女部屋

堺市　黒田　真砂

泡沫の夢に終った設計図
管理職になってローンをよく使い
ごみ袋に三杯枯葉の贈り物
恐竜で明けまた暮れる孫の日々
余生未だ一色不足のもどかしさ

大阪市　板東　倫子

一ドルで買えぬ日本の缶ジュース
ライバルが或る日フェイントかけて来る
山椒煮る亡母が毎年煮たように
交際費ジューンブライドが三人目
老いるほどいい顔になるお母ちゃん

羽曳野市　田中　透太

シナリオをまた書き直す曲り角
団欒の真ん中にあるスープ皿
熱燗で女とするとろろ蕎麦
反省はその時だけの二日酔い
約束を果せぬままに雨季に入る

阪南市　坂口　公子

撃ちてし止まんそんな私の赤い靴
被っても水で流せる泥しぶき
程々に濡れて美しき花しょうぶ
囮まで使うて泥舟乗せにくる
水子噫　水子のままで五十年

奈良県　長谷川　春蘭

支え竹見事に揃え茄子の花
新緑の声を出さねば睡くなる
青芝に寝ころべば風低きより
夏布団きちんと掛けて老いたもう
逝く人をとどむすべ欲し初夏の雲

神戸市　山口　美穂

傘をまた忘れた不覚を書く日記
少し惚けた老母が気づかう姉九十
餌をやって鯉と話をしてる老母
熱弁の医師　薬より大事なこと
草も木も話をすればよい返事

松山市　谷　真風

失敗が笑いの種になってくれ
誓ったがお天道さま笑うている
森は楽園ピーチクパーチク風薫る
そら豆むくかろんかろんと音楽し
又貸しをしたら到頭戻らない

西宮市　秋元てる

来てほしい老いの役立つ日も偶に
孝行のつもりへ「そんな事しなさんな」
着る物に迷う私も未だ女
先が見え憶せずノーと言える日々
色の濃いうどんだしにも旅の味

吹田市　山本希久子

小心な男と保つ車間距離
絆一つ断ち切るレモン厚く切り
そっとしておけば澄んでる夫婦仲
感情移入できず抑揚ないセリフ
味噌汁とコーヒーの香へ三世代

生駒市　北山悟郎

さぼれば義肢に笑われる責めを持つ
他人事に喙入れる臑かじり
尽さねば愛のこだまがこたえない
嫁の位置高い所であくびする
君が代に想いが多く胸しめる

大阪市　井上白峰

つなぐ手に想い出が湧く遠花火
善人と言われて仮面はずされず
能弁に勝る女の黙秘権
亡父の齢越えてもいまだ無位無冠
窓際の机で眠る肥後守

倉敷市　田辺灸六

残り歯を磨き余生に身構える
転落の歯止めに効いている内助
仲よしの味ですバーベキュー沁みる
問い返す意気地をもたぬ生返事
難聴が無口にさせてくる余生

今治市　野村京子

父母の絆たぐれば海がある
一対の碗が夫婦の絆かも
保育器を出ようとしない蛙の子
雨傘日傘なにもなかったように干す
前列でだんだんしびれ切れてくる

町田市　竹内紫錆

妃殿下の御印なりしか旅の花（佐渡　2句）
人形のせりふ不気味に採掘史
草野球の土に再会　万歩計
家人賛成　靴箱辺にハンを置く
乗り換え駅イヤホンの紐からみそう

羽曳野市　吉川寿美

愛無題　夫婦ゆのみの茶渋あと
リラ冷えや回想シーンが多くなり
豆腐やのラッパに気合いかけられる
人はみな淋しがり屋で花を買う
神様の裁きと思う不整脈

大田市　藤田軒太楼

けりつけた話に横から知恵をつけ
貧灯にめげず少年の読書欲
後ろ髪引かれる想いの幕が下り
お茶席へ作った顔で正座する
紋服で座れば養子見直され

大阪市　北勝美

御成婚日ぱっと開いた鉄砲百合
八十三歳誕生の朝にする挿し木
あと何回集う誕生を嚙みしめる
補聴器をつけたらどうやと目で笑い
万両の朱実　花の咲くのを見とどける

茨木市　井上森生

三線に憂さは忘れて海の民
新緑がくすぐるように五十肩
紫陽花の心ひそかに誘う色
湿原はほんとに最後のパラダイス
あいさつは尿の値や血の値

東大阪市　崎山美子

今日のパンあればなんとかなる生活
善人の面はずしたいはずせない
奇跡など信じぬ男のいさぎよさ
胃のきげんとりつつおかゆの日が続く
やわらかい風がうれしい老母の部屋

尼崎市　田中薫

目が合って今日一日を豊かなり
ランチタイムの人妻といる観覧車
きみの涙が吃水線を越えてくる
人の世やさまざまに書く夢一字
毒のないおとこの耳はロバの耳

静岡市　安本晃授

新緑に鼻緒の踊る試歩の朝
花道はなかった父の人生譜
背信の掟が責める会者定離
手のひらをかざす視点に佇つ仏
Vサイン歴史をかえる愛の鞭

大阪市　桝本蕗児

草笛の鳴る子鳴らぬ子ランドセル
天麩羅屋ともに詩人と言う男女
犬小鳥飼って娘は子を生さず
聞かされた内緒話が胃につかえ
捨てた犬先に帰っていて安堵

富田林市　片岡智恵子

病室に小さな嘘のふたつみつ
要る雨かいらない雨か知らぬ雨
マンボウのように眠たい梅雨晴れ間
恥もよし発展途上人だから
つゆの季を楽しむ傘のカラフルに

川西市　松本　ただし

キャッシュレス心の紐がゆるくなる
無器用で謀反を持った指ばかり
合掌の指の間にたまる欲
リサイクル大手振ってる天下り
重ね着を一枚脱いでする妥協

大阪市　上田　柳影

集印帖亡父の足跡踏む秋ぞ
変体仮名がまじる便りがなつかしい
踏張れるだけふんばれと子に教え
赤ちゃんを抱いて助産婦様になる
病久し風の唸りを聞くばかり

倉吉市　淡路　ゆり子

この国に生まれて好きなさくら色
わたくしもビールの旨さ知りました
菩提寺で墓地は如何と言ってくる
決心のにぶる言葉を妻が言う
ひとつだけ火種の袋隠している

守口市　森川　まさお

それほどに細うなったか夏パジャマ
病人の口数少ない梅雨の午後
暮れるまで西日射し込む養老院
急く時も順番守る蟻の列
貪欲な女が手折る月見草

大阪市　町田　達子

ウインドーのゼロにあっさりした妥協
マンションの風は住人十色なり
斜交いに物見る癖も自尊心
Gパンの舞妓きりりと京の雨
大奥を思う菖蒲の濃く淡く

豊中市　吉田　あずき

万緑に命の光る色を見る
衣替え今年の計は皆忘れ
だまし船折って持たせる人がない
若い娘の笑いの中で老いを知る
はやらない訳はお客が知っている

枚方市　海老池　洋

どう風が吹こうと今日も棒グラフ
親馬鹿と嫁をもろうてからわかり
忘られぬ恩あの名刺この名刺
易学では理想の釣書返される
止まるかとみせては走る一輪車

奈良市　米田　恭昌

義理堅い子の泣きじゃくる黙秘権
叱られた孫をかばって叱られる
パトロンをパパと呼んでた娘も嫁ぎ
パトロンの情けを蹴った寡婦の意地
ビル砂漠ロバのパン屋はもう来ない

富山市　酒井　輝

お后を誇れる国に住める幸
新聞と言えばレンズも持って来る
父さんに解らないわと降りて来ず
悪友の弔辞竹馬貸せ貸さぬ

守口市　羽原　静歩

幼稚園から帰り幼稚園へ遊びに来（幼稚園　2句）
父の日に母が来てソワソワし
神様の榊が枯れて買いに行く
もう一度西国遍路がしてみたい

高知市　北川　竹萌

不況風心豊かに腹八分
終身保険かけているのは葬儀代
夕顔はこちらの窓へ咲かせよう
歯の弱い友のまたとる冷奴

富士宮市　渥美　弧秀

香煙る遺影の兄の瞳もうるむ
性のこと辞書で探した少年期
犬嫌いの妻と散歩の回り道
つじつまを合わせた嘘がのしかかる

八尾市　鶴声庵　覚然坊

路地長屋住んで人情の裏表
老人会邪魔くさそうに杖を持ち
変り身の早さ職安呆れさせ
痛烈な政治批判の頭文字

仙台市　川村　映輝

アメリカに優る日本の治安維持
鯨より人権軽視のＵＳＡ
愛するも愛されるにも金が要り
九十年生き日本の善さを知る

七尾市　松高　秀峰

内示より先に噂が風に乗り
頭下げ続けた亡母を思い出す
点滴の横で猫背の母眠る
世渡りが下手でまわりも鬼ばかり

和泉市　西岡　洛酔

洗濯機　妻の日課が始動する
文化人　腰も痛けりゃ肩も凝り
お隣の噂が乗ったお裾分け
一歩前進　夏はねぶたに行くと決め

岸和田市　芳地　狸村

草餅の手づくり誇る峠茶屋（柳生滝阪の道）
足跡が残る王子の祠あと（熊野古道）
重文の門が泣いてるずれ瓦（中筋家）
涼をとるつもりが風邪を引く不覚

岸和田市　古野　ひで

信じあう友いてくれて風薫る
あじさいの育ての良さか大手毬
笑わせてちゃんと教えを説く和尚
サーカスの少女が耐えた愛の鞭

貝塚市　行天千代

知人出来通院の長さ知りました
身体中良いとこないが入歯なし
駅で会う着物姿に気が和む
書いたメモ忘れて要らぬ物買って

河内長野市　井上喜酔

老犬も手抜きを最近するらしい
自己主張おさえる器用な喉仏
神様も見えぬ心の奥座敷
下にだけ強いタイプの古狸

和泉市　岡井やすお

パレードを祝って梅雨もひとやすみ
麻雀は知らぬで通し出世せず
バツイチで芸が一皮むけてゆく
欲しければ他人の子でも盗る時世

吹田市　栗谷春子

早や白くまな板乾きかけており
家事なかば難解パズル思い出し
独特の味付け梅雨の山菜に
むかしから変らぬ味の力餅

堺市　柿花紀美女

トースト焼く今朝もリズムを崩さずに
ため息も楽しみもある老いの部屋
五十年　夫の癖も気にならず
財テクの話は遠く老いは聞く

堺市　一瀬福一

青空と自由の好きなちぎれ雲
喝采をじっと聞いてる驢馬の耳
もてもての話に妻が笑いこけ
素顔とは何だと思う花らっきょ

伊丹市　山崎君子

霊園のチラシ見ている老父の背な
いつからか美しい女　兄といる
連休はせめて二人で寄席にゆく
奥座敷歴史を変える若い声

守口市　結城君子

八尾の街そこここ温い話声（田中幸太郎写真展をみて　2句）
蓮見舟　竿一本に頼りきり
心惹く本あり雨を心まち
平静になれば些細なことで済み

寝屋川市　平松かすみ

不況にも笑顔たやさぬ姫ダルマ
好き好きがあって十色が売り切れる
詩集から拾う力とやさしさを
男性を隅に追いやる休憩所

河内長野市　植村喜代

生かされて幸せほしいと欲を言う
春が来て一からなんて歳でなし
友達にはがき一枚　梅雨の入り
神様の目を信じて今日も生き

池田市　岡本吉太郎

初入院うろうろさせる検査漬け
不景気で連休ごろ寝でも疲れ
北の島　塩送ったとて帰りはせず
碁敵が碁に勝ったけどガンに負け

箕面市　椎江清芳

大学を出てうどん屋を継ぐのれん
一陣の風が鍵穴抜けて海
弱虫は手の鳴る方へ従いてゆく
人間の弱さを覗く天眼鏡

鳥取県　津村八重子

いいみくじ拾い胸の血まださわぐ
夏休み都会の波がおしよせる
かざらない彩で八十路の身をつつむ
眉白き僧もくもくと庭きよめ

鳥取県　山根八重

控えめな女になって損をする
ランドセル緑の香る門くぐる
ゆっくりとおしゃべりつづく砂時計
泣きに来た涙を許す砂の丘

鳥取県　江原とみお

苛いらがつのると般若経をよむ
凡夫のうつ鼓　凡夫の音をだす
逆説が安宅の関でひっかかる
敗北の汗はしばらく経ってでる

鳥取県　田村きみ子

子育てと言う肩書で飯を食う
笑い話　袋に入れて持ち帰る
仏壇の花が気になるおばあちゃん
指五本丸めて伸ばす健康チェック

鳥取県　幸家単車

いたずらな猿と百姓知恵くらべ
勲章は要らぬうれしい趣味がある
新聞の隅に少年Aが居る
齢ですね新聞訃報欄を見る

島根県　高野律子

信頼の母子で綾取る日曜日
躓けば甘えたくなる里がある
冗談も核心まではとどかない
冗談の中の小骨が胃にささる

鳥取県　乾隆風

度忘れをするほど飲むじゃなかったに
間竿で計れぬ欲の深さとや
虹鱒のさしみを食べている行者
五感がにぶりヘルパーの手を借りる

鳥取県　上田俊路

撃ち殺し御免もあった民主主義
家風とは違う異色の嫁が来る
城下町ハンバーガーの店もあり
万歳で発つ栄転の都落ち

鳥取県　石尾かつ乃

新緑のぬくもり傷も癒えてくる
声届く所 子の部屋 孫の部屋
夏ばてのない孫三人に米を研ぐ
エプロンが真夏の風に立ちあがる

鳥取市　岩原喬水

三浪の合格家に花が咲き
イメージは悪いが金は持っている
ひたすらに尽した妻がいとおしい
けちけちと年金貯めて死んじまい

鳥取県　石谷美恵子

家中を模様替えして嫁をとる
かくしても耳のほてりで見破られ
合掌の小指そわそわ落ち着かぬ
いたずらなペンがわたしの鱗剝ぐ

鳥取県　西川和子

血を流すことも覚悟のボランティア
母の日の母の厨は休まない
六十の手習いファイトファイトです
一声をかけ合う温い擦れ違い

鳥取県　鈴木公弘

春闘の終わらぬ傘に雨季がくる
五月雨や小遣い値上げしてほしい
大きな寺だ　雨やどりしてゆこう
赤いべべ着て子金魚が里を出る

鳥取市　西村默光

長寿法いつも笑顔を絶やさない
廃校の庭が沸き立つ盆踊り
酒少し減らせと詩のアドバイス
薬より株価で治る妻の鬱

鳥取県　乾喜与志

老い独りテレビの前に今日旗日
梅雨そぞろ賢所はおごそかに
つまずいた道を回って散歩する
養老院よりも気楽な部屋であり

鳥取県　黒田くに子

白旗をあげて肩の荷軽くする
指紋消す手袋なんて悲しいね
アンテナを広げてうわさ持ち歩く
嵐の前のしずけさ妻の黙秘権

出雲市　板垣夢酔

鬼瓦病んで小鳥と仲がいい
死火山となるかも知れぬ父の喜寿
嘘かなと思う話で面白し
酒好きな貧乏神で出てくれぬ

出雲市　小白金房子

健康で働く老母のかっぽう着
ぴったりと寄り添う子牛の目がやさし
旅プラン孕みの牛が足を引く
どっしりと還暦祝う石燈籠

出雲市　富田蘭水

所作などは要らぬ二人で茶を愛でる
中国に旅立つ前に読む漢詩
自分史の終章をぬる色をぬる
漢方を飲んで自然がすきになり

島根県　藤原鈴江

たちがたき風情悲しき夏灯下
降りしきる雨の情けの裏表
自信過剰少しは歳を考えよ
神様へ正直だけが取柄です

島根県　槻谷一葉

日が沈む今日の幸せありがとう
夫がいる限り大事な命です
淡い恋　水平線に消えました
鯉のぼり風のない日はせつないね

岡山県　千原理瑛

泣くまいぞ笑顔で友に逢いにゆく
中傷に負けぬどうせ女の小さい腹
するが勘忍　血圧上がりそう
一人部屋　寝に帰るだけ日日多忙

岡山県　岩道博友

勇み足崩す梅雨空見て出張
進化論　犬も吠えつく人を選る
夢に見た風の旅人名が出ない
欲のない釣糸じっとチヌを待つ

岡山県　池田半仙

常識の通ぜぬヤングにもあきれ
紫陽花の移植土質で色を変え
雨風が昨日の温さ持って逃げ
近距離に息子と娘居る安堵

米子市　金山夕子

元もとの訛りが抜けぬまだ無口
キンチョール揃えて虫を寄せつけぬ
この街が好きでゴミを拾っている
留守番が上手な夫の均等法

米子市　茂理高代

後押しのない荷車を引いてます
いい人ねと言われ少し不安もつ
思いやりの言葉で傷をつけている
六十の色気しがらみ抜けてから

大阪市　寺井東雲

しとしとと手摺りに蛙露を踏む
かくし芸出しおしみせず友送る
カラ出張帰り思案の足重い
青春の若さぶつけたコマーシャル

大阪市　中西兼治郎

鉢巻をすれば力の出る不思議
世の乱れ子を取り金取り命とり
お茶代りですとビールの格下がり
窓の雨じっと見ている病み上がり

大阪市　大野武太

明治談　亡父の年齢ものさしに
主義主張いらぬ近所のおつきあい
予定表　大型ゴミと通院日
汗を拭くきょう一日も大過なく

大阪市　岡田ふみ

若い日の損は未来に花が咲く
お客さんの名前おぼえて流行る店
新しい畳を賞める妻の留守
あなた達外国映画見すぎです

大阪市　渡部さと美

かけ違い四コマ漫画して夫婦
引力にだめだめだめと引きずられ
旧暦の老母から届く柏餅
ラッキョウの白さつるりと梅雨が明け

大阪市　稲本凡子

まだ七十もう七十で今日も暮れ
ちっぽけな幸せでよい冷やっこ
ナツメロに思い出がありビデオとる
時間よ止まれ今花束を受けている

大阪市　神保拓生

マイカーで安売り卵買いに行く
つつがなく暮らす夫婦が飲む新茶
手術前ワンマンの父泣いている
悲しみにマイクどこまで行く気なの

唐津市　山口高明

黒帯のおんな気にせぬ胸の線
火の匂抱いたおとこがいっち好き
会釈さへ知らぬおんなの高い鼻
物言わぬ時が一番怖い妻

唐津市　筒井朴竜

焼そばの調味ソースで引き立てる
爺の膝へ這い寄る孫の初節句
野焼跡のどかな日和山菜摘む
潮干狩り家族のどかに松浦潟

宝塚市　吉田笑女

御成婚愛でて開花のアマリリス
わがままも言わなくなって父は逝き
終電も過ぎてテレビを消して寝る
頂上へ何時か老女も辿り着く

西宮市　瀬尾六郎太

マインドコントロール流行しだすね
少年よ大志は遊びほうけおり
おばあちゃん北林谷栄すばらしい
家庭回帰渡る世間は鬼ばかり

藤井寺市　中島志洋

美人だと誉めて団扇で叩かれる
愛情の縺れた糸をもて余し
なれそめは花火に酔うた帰り道
お多やんの口で西瓜を持て余し

香川県　永峰　伽名子

両殿下のスマイルとてもセ・シ・ボン
七曲りトンネル抜けて古希迎え
天手古舞しながら何とか辿り着き
天網恢々フセイン未だ漏れ候

香川県　新川　マサヱ

左遷地の椅子に優しい国なまり
地下鉄の渦に巻かれる蟻の列
一番鶏鳴いてそれから夜明け待つ
洗っても大きな黒い父の掌よ

香川県　池田　かおり

ボーナスを手にするまでの旅プラン
永平寺若い二人に数珠を買う
卵焼き上手になった妻の留守
新しい生命に今は首ったけ

和歌山市　青枝　鉄治

惜しまれた職場を訪えば他人の目
相槌を打ってはいるがうわの空
降るほどの縁はあったと妻の愚痴
身を削り大学出せば親を捨て

和歌山県　小倉　アサ

カラフルな流れに届く無色の絵
雅子妃の歳へゆとりのある笑くぼ
助手席ですぐ開けたがるコンパクト
本物の響きが妥協嫌い抜く

和歌山県　岩崎　瑞穂

鬼検事老いては只の好々爺
芽柳のみどりが映えるビル谷間
旅帰り嫁の緑茶に甦る
退社ベル母性にかえる急ぎ足

羽咋市　三宅　ろ亭

あらたかに晴れたパレード五分前
わが人生まだこれまでと思わない
人生へ楔を打ってくれた病
中休みツユの一日独り言

茨木市　堀　良江

振り向けば敵にまわせぬあの笑顔
凜と眉涼しおすべらかしのひと
いろは唄祖母に習った節のまま
強敵と思えばファイト湧いてくる

吹田市　茂見　よ志子

目の青い尼僧へ合掌したくなり
そのことを聞いたからにはほっとけぬ
はしり雨避けて意外な人とお茶
鈍行で終着駅へ急がない

藤井寺市　福元　みのる

喜ばれそうなお見舞い考える
髪型も服装も日本中真似る
惜敗の座席に夢が捨ててある
自分から出て自分見る癖つける

妻のレンズに嘘発見機がついている
絵にかいた餅を時々食べさせる
年金の海で静かに舟をこぐ
極楽へ行った証拠がまだ来ない

倉吉市　野口節子

日光消毒　老人の吹きだまり
籠城という手で親を困らせる
おれんちは男まさりの母ちゃんだ
努力した汗は二浪の子に吸われ

倉吉市　米田幸子

校門に思い出置いて脱皮する
立話聞いてにんまりする瓦
通帳は零でも母がよく笑う
魂が枯れて長者の増える国

倉吉市　最上和枝

夏まつり　東は東　西は西
松花堂よくよく見れば絵具箱
空のない男になった暗い過去
銃を持つ文化の違い思う夏

豊中市　滝北博史

幻想の父と話を一時間
雨の日にミシンを掛けるオムツ縫う
浮き沈み父の小舟は古びけり
五月晴れ水とみどりを追いかける

豊中市　三宅つえ子

盆踊り浴衣　蟹股　鼻緒ずれ
いつになく猫撫で声のボーナス日
向日葵に明日の暑さ聞いて寝る
大三輪の杉の木立の流し麺

大和郡山市　坊農柳弘

つぶやきは頭の中の詰将棋
吊り橋を渡る穴場の温泉地
バス停の小雨猫背を並ばせる
負けは負け相手をほめる苦い酒

茨木市　藤井正雄

挨拶の出来ぬ大人が増えました
寝転んで読む癖があり闘病後
灼けるのを避けて地下道愛します
切る音を聞いて受話器をおく躾

吹田市　瀬戸まさよ

若い目の選んだナウいプレゼント
輪の中へはずされていた招待状
泣けるだけ泣いたら生まれ変れそう
待つ人がない部屋荒涼と旅帰り

箕面市　中嶋田実子

胸襟を開き互いに損した気
菩薩　夜叉　おんなじ顔で使い分け
お先にと妻の手握り逝くつもり
不遇の人だから何でも自慢する

箕面市　岩津ようじ

さこそと思う才色兼備　雅子様
高感度十二単の目の動き
どんなにかおつかれさまとテレビ見る
坊さんもロックがお好きカーラジオ

堺市　古市　三千代

残り火にどんな彩りそえようか
Tシャツや少し派手目の夏を着る
朝食の音楽きいてるパンの耳
あじさいを裾模様にしハイチーズ

堺市　中野　欅子

ライバルは我を歯牙にもかけて居ず
大破した車窓に揺れる守り札
何億と摑む手もあり吾が掌見る
充電のつもりが不覚二日酔い

岸和田市　田中　文時

今朝もまた生きております酔ってます
フセインのような老人独り旅
ようやくに人の声するエアポート
目だけ真っ赤にスポーツ紙読む父の朝

高知県　小澤　幸泉

うぐいすのふんで美人になると言い
絵心をふるい立たせる河童橋
もう核はごめんとミミズ生きている

大阪市　松尾　柳右子

灯を消せば柱時計がさわぎだし
大学へ挑む灯がまだ消えぬ
スリラーを読んであかりをつけてねる

倉吉市　野中　御前

むらさきは雨の季節によく似合う
健やかで見舞にゆける有難さ
会長はどこか遊びのあるお顔

宝塚市　中田　純次

サングラスかけた女が翔ぶ構え
何をしに此処に来たかと思案中
不揃いな善意の椅子が暖かい

和歌山市　北山　好笑

泣きごとはお上手奥さん貯めている
妻らしい仕草をひとつずつ忘れ
番茶も出花　孫を見る目に涙あり

和歌山県　西口　忠雄

肩書の取れた名刺の無口なり
三叉路で白い空気がほしくなる
味方からそっと耳うちされました

芦屋市　黒田　能子

飛車角を守ったばかりに王詰まる
バイキングとるだけ取って食べ残す
何時までも事故の減らない交通禍

大阪市　清水　利武

国東のこんな奥にも磨崖仏
中禅寺湖思い出があり貸ボート
霊園の広告　蓮の花が浮き

豊中市　辻川慶子

ラブユーと書けぬ運命のボールペン
心にもコレステロール溜めている
ほどほどの小節でガイド親しまれ

倉敷市　井上富子

洗濯機和む三つの音で舞う
綾取りのもつれ母子の和で解ける
体調の良い日薬も飲み忘れ

鳥取市　前田一枝

ボランティア国のためとは申すまい
梅酒を作る自分は下戸なのに
徒食する日々叱るよう汗が出る

枚方市　小森正晴

人生の曲り角かな風騒ぐ
面当てのように聞える独り言
先ざきを読んでばかりで何もせず

豊中市　井上直次

大阪新聞土曜川柳の会　8月4日午後5時、サンケイビル322号室。宿題と選者は、保護＝当日発表▽暇＝河内天笑▽すこし＝森中恵美子▽曲げる＝磯野いさむ

茗人忌川柳大会

とき　**8月29日**（日）午前10時半開会
ところ　ホテル・ニューいなば
兼題（各題2句・午前11時半締切）

「風」　川島諷云児選
「刻む」　河内　月子選
「穏やか」　久家代仕男選
「袋」　小林　妻子選
「流れる」　八木　千代選
「墨」　但見石花菜選
「乾杯」　小林由多香選

会費　3500円（作品集・懇親会含む）
投句料　1000円（作品集呈）
◎投句は**8月15日**までに下記へ
〒680　鳥取市相生町3丁目204（森田熊生方）
うみなり川柳会

ふれあいの祭典'93
川柳作品募集案内

作品　3題・各題1句（未発表作品）
題と選者（1題5人共選）
「**歴史**」去来川巨城・卜部晴美・常岡孝風
春城武庫坊・鳥本　泰
「**策**」小松原爽介・中塚礎石・保西岳詩
前田芙己代・原田北涯
「**深い**」黒川紫香・和田光代・真殿舎句里
泉比呂史・平山繁夫
応募料　1000円（定額小為替）
賞　文部大臣奨励賞・知事賞ほか
締切　**9月10日**（金）　**発表**　10月31日
応募方法　400字詰原稿用紙の右半分に作品、左半分に住所・氏名を書き応募料を同封して下記へ。
〒669－23　兵庫県多紀郡篠山町北新町41
篠山町教育委員会「川柳祭」係

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころ (32)

橘高薫風

あの眼の中で男討死
出は出たが一人はさびし松の内
ひとりいればひとりは限りなくさびし
名をすてて十七八の恋もせん
だらしなさにいっそ死のうかたれとしの
愚かにも顔見にゆけば雪になる
人妻よ不惑とはかなしくもあるかな
撞球よころべこころを吸うてころびゆけ
金は無くとも金は無くとも君と俺
資本家はキャラクターまで買いたがり
妾となって奪るも戦術
機械の一部それが人間なんだとさ
夕桜とんぼがえりがしてみたし
気違いじみた夫をまもり老けている
ちんぽこを出す子よママちゃんお留守なの
悪運つきず資本家の端
暴力はよしキリストも殺される

句会の題詠

獣人にあわただしきは春の雲
君の酒はいいと言われて松の内
その話酒になったで言い出さず
てにをはのあわぬ悔みとなりにけり
けふの父は聞いてくれそうにも思え
神経衰弱の死でないことを書いて置く
もう泣かぬことを手紙の端に書き
とは言うものの金に頭を下げた人
間違ってお世辞を言えばキョトンとし
しめきってする旅のそろばん
他人らしくしたというのがもめのもと
運を待つように此の頃働かず
女中ではございませんと言いたそう
女中には桜は咲いて散るばかり
凡人にいっちうれしい桜咲く
このごろはあっちにいると大きく出
青空に芸者を連れた莫迦らしさ

以上が路郎の六月号までの作品の抜粋だが四月号の編集後記の一部を拾ってみると、

◇前号の最後の校正の日（二月二十七日）印刷所へ行ったら、来られないというひろし君（安井）が顔を出していた。「妻君が悪いそうだがどうかね」と言ったら「今朝は七度に下りました」「まあ早く帰ってくれたまえ、今日は僕が一日居るから」「誰も来ないかと思って来たんです」「まあお大事に」「エエありがとう」。こんな会話をしていた位だからまさか欣女が亡くなろうなどとは夢にも思わなかった。欣女は翌二十八日の午前四時に清らかな眠りについたのであった。電報によって私も飛んで行った。葭乃も出かけた。葬儀は三月一日にキリスト教会で行われた。

◇乱耽君が商大の高商部を出た。一人位後ろにいるかと思ったら二百五十七人の一番ビリでしたと語っていた。川柳詩人の天才もさっぱりワヤである。商算の試験だけ六遍受けました。先生の方が根負けされたらしいです。

◇愚陀君からも「この数日に落第のポシビリティが淡くなったり濃くなったりして忙しい様な気持がします」と言って来た。妻君から請求書をつきつけられて蒼くなるよりも、そんなことを言ってられる間が花だ。

月給は親父から奪るに限る。（路郎記）

伊藤愚陀・住田乱耽の学生コンビは編集部で「重役」のニックネームを付けられていた。

編集の割当てられた仕事をそのまま他人に押しつけて、煙草をくゆらしながら柳談・雑談に花を咲かせるのが常だった。当時の編集部の様子の一端が垣間見られる。

自選集

身を責める八月が来る諦観や
何食わぬ顔で痛みを吸い取られ
実母に抱かれて乳房を吸うている
森の向こうにちいさい小さい灯が揺らぐ
期することあって気にせぬちぎれ雲

野村太茂津

花いちもんめ記憶がずれてきたらしい
見つめれば手にも皺あり痣があり
年功のせいかとぼけのうまい顔
ご本復なされたらしい目のうるみ
さよならとお伽話の舟が出る

波多野五楽庵

梅雨どきへうれしい話とっておく
長距離電話向うも雨が降っている
雨しずくして沈丁花の葉がしげる
傘をわすれて女がかえり雨こやむ
雨あしへ海岸線がのびている

正本水客

年金の出る日を孫も知っている
メモするのを忘れ名句が消えてゆく
墓洗う五男三女を産んだ母
休日の時報ゆっくり歯をほじる
仕舞い風呂今日一日を振り返り

野田素身郎

質素な暮し好きでしているわけでない
蛙には住みよくなった過疎の村
杖が要るまでは達者と言うておく
技術にも誤算があった欠陥車
病魔の入る隙を与えてしまいそう

金井文秋

足の裏が辛い誰かを踏んだらし
辛そうにポストは畏まっている
わたくしの樹をわたくしが伐るつらさ
辛いなぁ　めくり遅れた紙芝居
辛いので受皿を耕している

八木千代

プリンスの熱意に渡る二重橋
飽食を平和と思いこんでいる
浮き沈みある人生を浮かばれぬ
うれしいと酒が飲みたくなってくる
雷が屋根を破って落ちてきた

小林由多香

餌をもらうだけに哀しい象の芸
年金の青葉へ鯉の餌を買う
生かされて君に寄り添う青葉風
もつれ糸隣の塀が高すぎる
回り道して地下足袋が性に合い

遠山可住

夏帽子　詩人のような顔をして
ふくろうの夫婦は森の哲学者
晩酌に響かぬ円高だと解り
食うことに事欠かなくて名を惜しみ
酒を飲む時には父と子の対話

月原宵明

お地蔵さま一言欲しくて掌を合わす
年金通知僕よりポストが待っている
産婦人科の看護婦さんも八ヶ月
心配か子供もカルテ覗き込み
乗務交替今度は髭の運転士

松川杜的

近代化　故郷の面影どこへやら
夢に来る亡母は丸髷結うている
本心を互いに知ってるから平和
金力にもの言わせ過ぎ言わせ過ぎ
馴れきった愛犬人語を噛み分ける

本田恵二朗

演出も日出る国のご成婚
大声に嘘なし軽く信じよう
信仰をしましょう神もコマーシャル
無念とやかかる一番差し違え
末っ子の孫の成長見たくなり

大矢十郎

梅雨晴れ間　外国船が着く港
坂の道あじさい濡れて人を待つ
肩先を叩いて久しぶりの顔
表札のないアパートに犬が居る
はみ出した飯粒食べてすしを巻く

黒川紫香

まろやかな新茶へ過疎の温かみ
底抜けに明るい人で弱い酒
奥さんの声はと電話褒められる
芸が身を助け余生のコップ酒
雑学を学び余生を若返る

恒松叮紅

保釈金いと簡単につくり出す
疾うに疾うに教育勅語など忘れ
赤い靴穿いていた子がもう嫁ぐ
天気予報住みよい所とは言えず
ワケもなく北という文字泣けてくる

工藤甲吉

野の仏きれいに染めて盆の月
苔むした墓石に我が家の歴史見る
名門の名残を秘めた墓の紋
ふるさとに心をつなぐ父母の墓
義理済めば父母亡き故郷直ぐ帰る

藤村〆女

恋をして見事な嘘の言える知恵
大正と昭和モラルにある段差
生きることに少し疲れたなと思い
肩組んで心は組まぬ顔もあり
一番に自分が入る墓が建ち

有働芳仙

人情の芝居が受けたドサ回り
見合写真　器量良過ぎるので迷い
電話口　仮病を使う声と知る
屋台引く夫婦は疲れなど知らず
その気持分かると逆らわずに酌ぎ

辻白渓子

どしゃ降りの酒で駅前から呼ぶ迎え
物忘れどころか耳も遠うなり
院長もうまが合うので断れず
雨やんでうざくがうまい風になり
夏暮るる根来地蔵とひとり言

児島与呂志

スペアを持たぬ私の肋骨
二女二男育てた妻の過労死だ
ぎりぎりに耐えてる私の薤旗
空缶を蹴ってる腹を立てている
叱らなくなったおやじを淋しがり

岩本雀踊子

鰻屋の前で一度は立ちどまる
見くらべてシシャモ選ってる妊婦服
大根を洗うに丁度いい流れ
死に真似がとても上手な団子虫
倉壁の穴から雀顔を出し

久家代仕男

とても気になるお隣の枇杷が熟れ
男の子今も理想を崩さない
男にはとことん飲める夜がある
これだからわたしは先に死なれない
雨が降るのに新聞が届いてる

小出智子

孫のよな若いナースの行き届き（手術の日）
只感謝付添さんと紙おむつ
俎板の鯉ほどいさぎよくはない
俺に似た頑固な便秘にいじめられ
一瞬の不覚を嘲笑う紙おむつ

西田柳宏子

政治家に血の一票がわかるかい
八月の墓標が水を待っている
黴くさい生身をさらす梅雨晴れ間
老いらくの恋をわたしもしてみたい
保険屋が居据わっているぼくの死後

高杉鬼遊

お料理の栞　茶匙に頼り切り
抵抗のむなしさを知る再軍備
プレゼント手頃な線を遙か越え
スカートへ毛虫が落ちて抱きつかれ
茶碗酒　俺も貴様も泣き上戸

植村客遊子

全国誌上りんご川柳大会　締切りが迫りました。「りんご」の句を葉書1枚に1句（1人2枚まで）を書き、9月30日までに左記へお送りください。

〒036　弘前市大工町50－6　川柳塔みちのく

第1回
和歌山県川柳大会

と　き　**9月12日**（日）　午前11時開場
ところ　農協会館5階（JR和歌山駅前）
兼　題（各題2句・午後零時半締切）
「偶　然」　池下まごし選
「迷　う」　牛尾緑良選
「やがて」　大矢十郎選
「長　い」　桜井千秀選
「　手　」　西岡ひろし選
事前投句　ハガキに2句・**8月15日**締切
「　風　」　渕田寛一選
投句先　〒641 和歌山市紀三井寺111－2
牛尾緑良宛
会　費　1500円（軽食・記念品・発表誌呈）
主催　和歌山県川柳協会
後援　和歌山県・市・文化協会

倉吉市制40周年
農業博打吹川柳大会

と　き　**8月10日**（火）　午前10時開場
ところ　倉吉体育文化会館（山根29－2）
おはなし　仲川たけし氏
兼　題（各題2句・欠席投句拝辞）
「　倉　」　河内天笑選
「　農　」　野村太茂津選
「　博　」　小林由多香選
「フルーツ」　林　瑞枝選
「　打　」　石原伯峯選
「　吹　」　両川洋々選
「天　女」　小西雄々選
「　盛　」　恒松叮紅選
会　費　2000円（昼食・会誌含む）
主催　打吹川柳会
協賛　倉吉市・鳥取県川柳協会ほか
後援　新日本海新聞社・川柳塔社ほか

川柳太平記（183）

川柳の群像

勝谷山川児

東野大八

山川児が亡くなってから、もう一年近くなる。

―私は今、ダブルベッドに、病軀を横たえMidoriの煙を顔の上にゆるがせながら山川児を追憶している。

山川児はいい作家であった。彼の作品には彼自身の思想がごく自然の姿で流れていた。それだけに私としては、今後の山陰柳壇のため期待するところが大きかったが、四十六歳の若さで夭折されたことは、なんと言っても惜しいと思う。

一周忌を前にして山川児句集『大橋』が出版されることになった。私はまだ、その内容は見てないが、彼の作品の全貌に浸れる日の近いことを思うと、待ちどおしいのである。彼の永い川柳生活に比して、作品の数はそれほど多くはないのではないかと思うが、出来るだけ珠玉の作品を拾って欲しい。

この句集の多くは、柳人以外の人々の手に渡ることも予測されるので、ここに山川児の句風の一端を示して本句集を鑑賞される上の資としたい。

私は山川児が職域方面で、どれだけの業績を挙げていられたかは一切知らない。ただ常に忙しい人であることだけは知っていた。しかし長のつく椅子を十一も歴任されたと、その死後知らされて驚いたのであった。おそらくどの椅子に於ても、エキスパートぶりを発揮されたであろう。

働けば四囲は輝くものばかり

という句のあることによってもうなずけるのである。

次にこんな句もある。

埋立ての好きな役人ばかりなり

出張の予定の中にプロ野球

だし昆布の如く停年すてられる

いずれも役人の姿をあからさまに詠んであって、何んとなくほおえましい。

これらの句のすべてが山川児の心境をひれきしているのではないが、彼自身、役人心理を巧みにつかんでいることを思わされるのである。

これらの中で、私は「埋立ての好きな役人ばかりなり」のしんらつな句が好きだ。

次に家庭方面を詠んだ句では

松の内いい父さんになっておこ

というのが目立つ（説明文略）。

人間のいろはにほへともう四十

という優れた句を遺している（説明文略）。

以上、数句を挙げたに過ぎないが、山川児の穏健であるが、徹底した人生観や社会観が句中に生き生きと飛躍しているではないか。斯くて水郷松江市にとっての能吏、山陰柳壇にとっての良き指導者は、多くの人たちに惜しまれながら幽明境を異にしたのであった

（以下略）。

一九六〇年七月　麻生路郎識・合掌

以上の長文にわたる序文だが、この勝谷山川児句集『大橋』はこの年、昭和35年9月、勝谷光子名で刊行され、平成4年9月、島根県川柳協会から（山根梟人著郷土川柳作家論6）として再刊されている。これには初版の句集に加えて「勝谷山川児・その生涯と作品」と題する山根梟人の労作20頁が挿入されている。B6判・二百五十頁の布張り美本である。

本稿はその作家論を資料として纏めた。いわば梟人作家論の要約である。

山川児は本名信義。大正2年12月8日松江市生れ。昭和6年県立松江中学校卒業後、松江市役所に勤務。昭和34年企業局長で停年になるまで、市各部局の要職を歴任した。

川柳は昭和9年からで二年後、しゃちほこ川柳会を結成、機関誌『芽生』を発行。同時に川雑松江支部幹事をつとめ、中学同窓の梟人と柳誌『潮』も発行した。応召復員後の戦後いち早く広江天痴人、本庄快哉らと『柳城』を発行。昭和26年『川柳まつえ』と改題して郷土柳界の育成につとめ、山陰新報・島根新聞の両柳壇選者、同年川雑松江支部長に就任したが、昭和34年9月10日没。享年四十六歳

浄信院釈昭義居士。

灯を消せば松江大橋月のもの　　路郎

この句は、山川児の師麻生路郎が、湖べりの旅館なにわ館で詠んだものである。

なにわ館は、山川児の父静二が大正十四年十月、宍道湖畔の松江大橋北詰に創業した眺望絶佳の旅館であった。

東方遙かに秀峰大山をのぞみ、北に松江大橋、さらに後方に連なる北山の連峰、前方には常に満々と水を湛える宍道湖があった。

このなにわ館の裏玄関に近い榎小路に、ラフカディオ・ハーン＝小泉八雲の旧宅があった。この彼が松江中学校の教師となった時、旧松江藩士の娘小泉節子と結婚した。二人の新婚生活は明治23年4月から翌年6月までこの旧宅で過した。この家の二階でハーンは名作『知られぬ日本の面影』を書いた。

この頃、新妻節子は、よく勝谷家の勝手口にある共同井戸で、米とぎや洗濯に、毎日のように姿をみせていたそうである。

麻生路郎は昭和7年5月8日川雑簸川支部創立五周年出席のため、途中下車してなにわ館に旅装を解いた。その際、山川児の父静二の乞いを容れ、前記の「灯を消せば…」の句をさらさらと揮毫している。

山川児とは、この時未だ川柳に手を初めていなかったが、後年この人を師と仰ぐ柳縁がそもそもこの時に始まったとみてよい。

山川児の私淑した麻生路郎には、父性にあふれた愛妻想いの名作が多いが、山川児が師路郎に教え導かれたものは非常に多い。その第一は川柳の道であることはいうまでもないが、妻子への愛のあり方についても、不知不識の間に幾多の教示を受けているように思われる。従って路郎調がほのみえる。

さるにても子供だけは喰わせたし　山川児

三人の子はよく眠り夜の蠅　　〃

大中小へそを並べて切る西瓜　　〃

布団敷く妻の姿にある平和　　〃

妻の留守妻の雑誌を読んでみる　　〃

妻待る方へ煙草の煙流れ　　〃

山川児は多趣味な人物で、釣り・麻雀・野球・盆栽いじり・相撲など、ほとんど何でもござれの方であった。光子未亡人は寂しく語る。「いろんなことを手がけましたが、長い歳月をかけた川柳が結局最後に残りました。」

もう秋か冷しビールが歯にあたり　山川児

がこの世に残した絶唱であった。

▼次号は「**香川　酔々**」

柳籠裏三篇研究（十八丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田甫

304　**しわひ所コとてくれないが上手也**

八木＝「くれない」は京紅と、くれないをかける。

前にも出たが、江戸の紫と京の紅とは対になっていた。そして江戸は宵越しの金を持たぬ、気前のよさを誇り、京都は上品なようで「ケチ」であった。それに対する軽蔑と、京の文化に対する、江戸のやっかみもあったろう。

くれないといへばぜんたいしわいとこ　安七信3

七久保＝賛。しわいとくれないの縁語で処理したところがミソ。

青木＝賛。懸詞、いわゆる狂句の台頭か。

佐藤＝賛。京紅、京鹿子ともに。

鈴木＝賛。例句が句解になっている。

岡田＝賛。

305　**八百のまなこで富士をふだんミる**

八木＝近頃のように、スモッグで悩まされることのない江戸時代には、江戸の各所から富士が実にきれいによく見えたことであろう。

「八百のまなこ」は単に大勢の人の意に解してよいのであろう。これをどこか特定の場所と考えるとすれば、本所羅漢寺と考える。

主題句は、三囲堂からの富士の眺めが美しい事を五百羅漢の目にかけて、沢山の人が見物に来る有様を詠んだものであろう。

七久保＝「八百のまなこ」は江戸八百八町を指していると思う。

ながめてる方へつんむく富士の山　筥一35
不二山は江戸のまなこで見へる所　七30
よふ拝はどこでも出来るふしの山　一九7

紀内＝賛。「八百八町」のきかせ。

鈴木＝八百は七久保氏のいう「八百八町」をかけた。どこからも富士がよく見えたのでしょう。

岡田＝同。

306　**一ト思案してけんぎやうの妻に成り**

八木＝検校の妻になれば、金には困るまい。しかし、盲人の妻になるには、やはり一思案あるであろう。

七久保＝金が目当てなら別だが、何も択りに択って盲人などに嫁がなくとも、ルックスを兎や角言わなければ、五体満足な伴侶を得られるはず。世間並みな思慮深い人なら、ためらうのは当然です。

高利貸などのサイドビジネスで、人々からひんしゅくを買った検校の妻となれば世間の見る眼も変わろうというもの。

岩田＝賛。

けんぎやうの妻つれ立ツをせつながり　六7

岡田＝賛。

307　**金の威光をおとしたは高尾也**

八木＝二代高尾の句は前に幾つか出た。

玉の輿ぜんたい高尾乗る気なし　七〇27

と同巧の句。

七久保＝タルの初篇に、

百両をほどけは人をしさらせる　一2

という句があるが、そのような黄金の威力（または魔力とでも言おうか）など屁とも思わぬ江戸の遊女の張りの強さを歌い上げた句です。

西原＝賛。仙台高尾。金銀積んでも動かず。

金箔の附いた浅黄を高尾ふり　五〇9
徳をとるより名を取ったは高尾　二四13

岡田＝同。

308　**桜を折ルとかすがいにしめられる**

八木＝自信ないですが一説。

「桜」は桜田門、門外に浅野家あり。桜を折る、で浅野家の家運を賭けた殿中刃傷の件をいっているのであろう。

かすがいにしめられる、は梶川与三兵衛にはがいじめにだかれたことを言うのであろう。

七久保＝私も八木氏同様に自信がないが、本句は、上野の山で花見の折に桜の小枝を折って、山同心にこっぴどく詰責されたというのである。

西原＝山同心を「鎹」と称したものであれば「かすがい」にしめられて捕えられる景にもなろう。

青木＝七久保氏説妥当と思われる。「桜切る馬鹿。梅切らぬ馬鹿」。

佐藤＝七久保説賛。ここでは、寛永寺の山同心。

鈴木＝同。山同心の法被の印は鎹印。

岡田＝同。

309　**おもひきらせた其当座番を付ヶ**

八木＝ドラ息子に吉原通いを思いきらせたのであろう。座敷牢よりちょっとましな所か。

七久保＝ドラ息子に番を付けたものの、すぐに気変わりしないかと両親の危惧、察しても余りある。

岩田＝どうも微妙な違いなのだが、私には娘に思えてならない。恋する相手とは所詮添いとげられぬと意見され、思いきるとは言ったものの、胸に残る熱い思いは如何ともしがたく、此世で思いを遂げられぬならば、いっそあの世で…と一途な娘心は死に急ぐものではなかろうか。

しかられた娘その夜ハ番がつき　四31

西原＝岩田説に賛。「おもいきらせた」という語感が女であるように思う。

青木＝恋は盲目ゆえ、主題句男女何れにも取れそうで、諸説の如く大いに迷うが、礎稿および七久保氏説の息子と思われる。

佐藤＝岩田説賛。私も娘のように思う。

鈴木＝娘説賛。

岡田＝同。

310　**朝帰リろくろっ首の母が出る**

八木＝息子が吉原からの朝帰り。母が心配して首を長くして待っているのである。おやじは、プンプン、ブリブリ。

朝帰り母のかぶりで横へ切れ　五30

岩田＝賛。

朝かへり母ハはだしで二三間　四23
朝かえりきけんハよきそ早入レと　一四43
母門トで大腹立てござるそよ　二四13

佐藤＝賛。これに似た江戸小咄がある。

岡田＝同。

秀句鑑賞

同人吟 ―7月号から

西田柳宏子

しばらく秀句鑑賞をしない間に、随分、投句される同人も増え、賑やかな楽しい「川柳塔」欄になっていることは、同人ご一同のご精進とご協力のお蔭と感謝すると同時に、ご同慶に耐えない。また、何といっても毎月の選句をされる主幹のご努力に衷心から敬意を表したい。

さて最近、川柳が面白くなくなったとか、理屈っぽい句が多く、また、判らない句が増えたという声を耳にする。確かにそれはあると思うが、川柳人口が増え、句会が増え、発表の機会が増えると、川柳に追駆けられるようになって、勢い「作る句」が多くなり、また、競い合う所にどうしても難しいことを言う句になっているような気がしてならない。

もっと大らかな、楽しい句を心がけたいものと思う。そして心から笑える句、お互いを明るくする温かい句、そんな川柳がもっともっと増えてもいいのではないだろうか。そうした気持で同人吟を楽しく鑑賞させて頂きました。

フィルムが残ったそうで撮ってくれ

小池しげお

小旅行、あるいは吟行などでよく見かけることながら、ともすれば見逃がされやすいものだが、パッチリ川柳カメラに収められたのは流石と言うところ。くすぐりの効いた、ウフフと笑いたくなるような句。

小鳥に餌を忘れなハワイから電話

林野甦光

海外旅行が日常茶飯事のような昨今、「ハワイから」がとてもよく効いた微笑ましい句だと思う。

悪友と知ってる犬も起きて来ず

上田柳影

お互いの交友関係がよく判る句。小品ながら友情が、起きても来ない犬に巧みに詠み上げられているようだ。

きりきりしゃんと紫の花桔梗

土橋螢

言い得て妙、多言要せず、紫の花桔梗の姿が彷彿として目に浮かぶ。綺麗な描写句。

生きるには逃げるほかない命がけ

田村新造

具体的なものがないのが惜しまれるが、必死に生きる人間の姿の一面を抉る鋭い句。弱肉強食の生存競争の実態に迫る句として取り上げた。

筍の一尺伸びて生き残る

山海友熙

皮肉と言うか、筍自身、竹にとっては喜ばしいことで、一尺伸びたことが人間に食べられずに、本当の生き方が出来て立派な竹になることに喝采を送りたい。自然界と人間関係の一面を巧みに捉えていると思う。

芸のない男早起きして困る

玉置重人

私のことを言われているような皮肉の効いた句。しかし、妙に憎めない軽味をもっていると言えよう。定年後の無為徒食の人たちには何とも面映ゆい句かも知れない。

勤勉が叱られる世となりにけり

小野克枝

二宮金次郎の銅像と共に螢雪の功を積んだ熟年、老人たちには何とも言い難い世の中と言うべきか。曰ク働き過ぎ、曰ク遊び方を知らない、そして週休二日に身も心も持て余している人の慨歎の句か。

受験後の絵馬カラカラ嗤いた

薗田　獏　沓

困った時の神頼み、終ればチョンの人間のエゴを巧みについている。カラカラ鳴っている絵馬は果して合格か、討死か、お礼参りもないことを非難する絵馬の声が虚しい。

正座して叱られ上手が待っている

槇田　英　詩

叱る方が思わず苦笑しているさまが目に浮かぶようだ。家庭内でも会社でも、一般社会の触れ合いの中にも、こうした叱られ上手な人がいてくれると大いに助かるものである。うまくさらっと読んで、余計くすぐりが効いてくる、川柳味豊かな句と言えよう。

陽のぬくみ妻のぬくみだなと感じ

堀江　正　朗

戦盲の作者の作品にはいつも心打たれるものを感じているが、この句にも本当に妻に対する感謝と愛情が溢れていると思う。また、こういう受取り方ができるということは、作者に尽くす奥さんの献身的努力が蔭にあることも伺い知ることができよう。

夫唱婦随から婦唱夫随の温かい心の通い合いが、太陽の温味の中に見付けられるということも嬉しい限りである。お互いにいたわり合って元気に過して頂きたい。

軒下の石臼　父母はもう居ない

奥田　みつ子

現在殆ど見かけなくなった石臼、近郊農家にも納屋の奥深くか、物置の軒下などに放置されたり、物置台にされたりして本来の使われ方はしていないようだが、その石臼にまつわる幼ない頃の想い出、ことにお餅搗きなどは本当に今なおはっきり覚えているのだろう。使われなくなった今もなお、厳然と石臼は貫禄の重さで健在であるが、石臼との想い出の中の両親はもうとっくに逝ってしまった。取残されたような石臼にも父母を偲ぶよすがを感じさせられる佳句と言えよう。

火消壺一気に燃える夢を抱く

石川　侃流洞

これも都会では殆どお目にかからなくなった火消壺。イメージ的にも華やかな表舞台に立つものではないが、そうした脇役的な位置の火消壺にも、パッと燃え立ちたい想いを秘めたものと考える作者の胸の中には、今なお燃え立つ若さを秘めているのであろう。

正直に言えばこの場は治まらず

原　さよ子

兎角この世は難しいものだ。正直は宝と言われて来たが、また一方、嘘も方便とか、世間の交際の中で、ただ正直だけで事がすめば結構だが、そうもいかないところに世渡りの難しさがあろう。正直に言ってしまっては実も蓋もなく、事をこわしてしまうことの方が多いかも…。

作者は今までの経験の中から、そうした事態の処理を学びとったのであろう。

ビル三つ持って貧乏くさい伯父

丸山　よし津

身内ならこそ言える貧乏くさい伯父さん。「ビル三つ持って」が何とも皮肉である。大阪の「ドケチ物語」にでも出て来そうだが、得てしてこうした伯父さんは、ド偉いことをするのかも。「吝」と言わず、「貧乏臭い」と言った所に親しみと温味が感じられる。

沈黙は父の最後の武器だろう

川島　諷云児

定退後の年金生活を余儀なくされている年代には、何とも身につまされる実感句で、共感を呼ぶ人も多いのではないだろうか…。多言不用、味のある句と思う。

数々の佳句に筋違いな解釈もあろうかと思うが、観方の一つとしてご容赦を。

平成5年度川柳塔社同人総会・本社句会

10月3日（日）午後3時から大阪市立労働会館で同人総会、同5時から本社句会を開く。

黒川紫香選

河内長野市　大西文次

別荘番になり別荘で暮してる
周辺は皆ちょぼちょぼで住みやすい
褒められて取るに取られぬ付け黒子
念仏が下手で成仏致しかね
階段はとうに気付いていた老化

名古屋市　藤井高子

シナリオを狂わせて鳴る電話ベル
同じ頃同じ花咲き忌のめぐる
旬を描く赤さ青さも陽のめぐる
ご本尊小さくおわす水子寺
余命表延びて閻魔も一と休み

砂川市　大橋政良

単身の朝はスープをあたためる
満身創痍使い捨てとは情けない
コンパクトだけ顕末を知っていた
子育ての楽屋は茶の間かもしれぬ
ボタン穴違う釦にのぞかれる

松山市　宮尾みのり

いろいろな母国語に会う中華街
大道芸　見物人に乗せられる
両面が使えて軽い利用価値
父権地に墜ちていびつなにぎりめし
印象が強烈すぎる空まわり

富山市　島ひかる

野仏に嬉しい話分けにゆく
初恋の話がはずむ五十路坂
いい人と言われるわけを考える
書き直ししてもやっぱり書き損じ
みよちゃんがわたしの飴を取りに来る

宝塚市　永田暁風

運河は澱んで記憶の中の北の街
亡妻が待つ雪化粧した墓で待つ
女々しさの限りを尽くし亡妻記
妻を隠した霧の晴間を今も待つ
振り返らぬ子を見送って親となる

人間哀史何処まで飛べば春の海
点滴の一滴　性器の闇を越す
魂が叫ぶ翼を失いて
劣等感を持つと引金が狂う
労働歌不況社会の弾丸か

柏原市　大峠可動

結び目が一寸ゆるんだ赤い糸
おめかしで妻いそいそと行っちゃった
言い負けたお返し糊が効いている
そっくりの似顔絵だから気に入らぬ
都合よい耳で都合よく生きる

熊本県　大川幸子

傘一本で迷う愚かさ恥じている
故郷が実感できる墓の道
ポイ捨ての言葉飛び交うクラス会
見るつもりなかった老母の美顔術
墓の草引き引き無言になっている

西宮市　牧渕富喜子

君がいる国に連なる海と空
星の降る千人風呂に一人いる
ハウステンボス出島のように船で行く
紫の香りが優し庭の茶葉
長逗留遠来の客使われる

和歌山市　岩本美智子

貧乏の家に生れた私の名
げんまんの指のもろさが佗しすぎ
見え過ぎる眼鏡で困るときもある
筒抜けに聞こえる夏の南窓
香焚けば心へゆとり湧いてくる

静岡市　沢田きん

ペダル踏む脚に若さを漲らせ
平凡な娘でよし茄子の花が咲く
私には少し派手です街の風
肥えたねと言われ納得して帰る
便り待つこころ恋情かも知れぬ

広島市　流奈美子

鷺草の夢はあなたの空を飛び
今のうち森の伝説子に話す
人波を縫って歩いた日の疲れ
一期一会　幾度襟を正したか
ありがとう生きたことばを今日も聞き

広島市　森田文

小走りで用事を済ます梅雨晴れ間
面倒な言葉はいらぬ掌が温い
器量なら負けるが笑顔ならわたし
初孫の話ばかりで日が暮れる
剪定の枝生き生きと捨てられる

熊本市　宇野照代

藤井寺市　高田美代子

真っ白な紙で答が書きにくい
おじぎ草に触れる依怙地になっている
ひとり旅西でも東でもいいさ
ワンマンに付いて行けない影法師
負け癖のついたタオルを持っている

旭川市　朝倉大柏

席ゆずる少年の瞳を忘れない
神さまの前は無実の顔をする
まずいものに慣れて健康取り戻し
親友という名が金を借りに来る
泣き虫が呆けを叱りに来てくれる

富山県　高畠五月

からたちの花の香りや寺の道
花ことば無言のままで燃えている
ポケットの愛を落さぬ返し縫い
子の墓のそばに野の花咲き乱れ
生涯を雑用ばかりで逝った母

富田林市　池森子

境界を越えてしまった恋螢
うやむやにされた話と枯れ急ぐ
ぼやいてはみても季節は行き過ぎる
喜々として遊ぶ六月　雨蛙
合鍵がときどき謀反考える

尼崎市　児玉歌子

預かったペット豪華な食事付き
五ツ六ツ病いを抱いている内気
駅前の流れすっかり夏になる
計画の手順狂わすにわか雨
充電のギター浜辺の風に乗る

尼崎市　長浜澄子

限られた余白ゆっくり埋めてゆく
あの話火元どうやらここらしい
論争を隅の無口が締めくくる
せからしい話口紅引きながら
あざやかなスピーチ主賓置き去りに

尼崎市　森安夢之助

名門の歴史を背負う鬼瓦
炎天下地蔵の頭もえている
むつかしい話は嫌い落語すき
反省の跡が涙でぬれている
融通のきかぬ男の孤独感

久留米市　鶴久百万両

愛妻百句　満点パパになれずとも
火の国の女にハート射抜かれる
憎いあんたへ紙のつぶてが届かない
願わくば恋の金環蝕になれ
俺らしく生きた戯画には悔いがない

出雲市　西尾和子

日々好日風さわやかに吹いている
よくしゃべる娘帰して風が止む
雨だれのリズムに合わせ碁石打つ
利子目減り旅の計画ミニにする

和歌山県　杉山精子

はにかんで転勤の夫降りて来る
わさび漬の所為だけでない涙
小骨抜く苦労は誰も気付かない
後ろから突き上げてくる棒グラフ

十和田市　阿部喜久江

極楽が満員ですとことわられ
巧妙に霊感商法忍び寄る
そよ風に弾んで居ます風車
温泉で息吹き返すフルムーン

鳴門市　八木芳水

年金の余生一歩を慎重に
苦労する覚悟は出来て二人部屋
矢印もなし人生の下り坂
負け戦それでも未練捨て切れず

今治市　渡辺南奉

線引くと治まることともめること
ゴミの山文化文化と言うなかれ
あやふやな答の方がほっとする
負けそうになると父さんトイレット

高槻市　守先伸子

候補者のうたい文句がきれい過ぎ
花嫁は着せ替え人形で宴終わる
いつ来てもポストはわたしを拒まない
好きだから好きな切手で出す手紙

兵庫県　西井つや子

お目出たい日の目覚しが鳴り響く
老いの愚痴吸ってもらえる青い空
あの人の影は私の守り札
友情がしみじみわかる曲り角

摂津市　木下道子

あと二日の命を悟る悲しい目
恐妻を甘えた声で呼び寄せる
活字読む気力の失せた眼鏡拭く
父に呼ばれるこれが最後の返事する

和歌山市　辻翠子

笹舟に乗りたいような初夏の風
豪快に駆ける振向くのは止める
雨音よわたしも少し狂いたし
人間を磨き美酒を飲む美学

和歌山市　田中みね

孫できた出来たと皆に触れ回り
孫という宝に出会う日の涙
欲目かななにせ可愛いうちの孫
幸薄く気心知れた人が逝く

米子市　鹿島松子

投げた石大きな波紋描きだし
だらだらと生きて欲の皮つっぱる
絵を描いてしばしリッチな時すごす
夏空のあの雲辺り幸せそう

尼崎市　的場十四郎

喜寿祝いくれた布団が重すぎる
姿見と語り合ってる後家の朝
冗談のなかのまことが責めたてる
左遷地へ決心つけて男顔

尼崎市　田辺鹿太

うちの猫素手で魚を盗ってくる
碧い目の僧かろやかに般若経
引導を渡す楽器が寺にある
弁解は止そうよ傷が深くなる

尼崎市　尾宮弘治

俎でみじんに刻む消費税
潔白を通し去就を考える
花人にそっと作句を覗かれる
姉ちゃんのお下がりなのと子のエクボ

東京都　山口新子

掌の温み変わらぬ人に逢いに行く
四十路坂バラより菖蒲咲き誇る
悪と灰汁煮詰めるほどに浮いてくる
住み変えて金魚も委縮した泳ぎ

唐津市　木内ミチ子

呆け防止何時か覚えたパチンコ屋
どの句にもひねりが効かぬもどかしさ
神さまのお慈悲隅まで届きかね
雑草の生える地球に安心し

熊本県　岩切康子

姉ぶって穏やかに聴く恋敵
同窓の集い声沸く楠若葉
逆風に耐えた過去をつい喋り
勢いがついて先走りしてしまう

長岡京市　山田葉子

スピード違反で流れにのっている
本番は大胆にいくつもりです
追っ払ってもまた座りこむ軽いうつ
小ぜりあいいつも続けて達者です

熊本県　高野宵草

法師蟬　手紙書きたくなる日暮れ
掃除機へいつか子の部屋男の香
シャボン塗る顔は役者になれそうな
枕元時計バンドも寝そべらせ

熊本市　遠山夏生

郵便受チラシが先手打っている
残り一行母によろしく書き添える
五時からの避けて通れぬビアホール
病室を出ると心配顔になる

松山市　白石春嶺

野仏の小皿も洗う山イチゴ
スーパーで見た先生の主婦の顔
吉報を待つアンテナを高くする
耳なれた億へ麻痺してゆく怖さ

今治市　白石サダ子

輪が好きで笑いを貰う靴をはく
輪の中で光ってみたい野望持つ
春の海カモメのおしゃべり聞いて暇
終極はみんな一線手を結ぶ

西宮市　山本義子

独り住む長所ばかりを主張する
新茶注ぎ美味さのわかる歳になり
抜け駆けも背のびもせずにきて余白
嫌いだけど納豆食べてみようかな

西宮市　菊池トミエ

釣書を前にコーヒー冷めている
こだわりの手打うどんは三代目
素うどんが一番うまい路地の店
飛鳥路にかげろう立って石舞台

西宮市　岡本道子

会釈した男は葱を持ち代える
五分五分の不満ラーメン食べている
反省の首を支えているギプス
傾いた月に同調する恋か

西宮市　亀岡哲子

アンテナの一つが風に横を向く
楊貴妃のつもり牡丹の花の中
イヤリングまた置き忘れ里帰り
話し聞き手料理食べてくれて友

西宮市　古谷ひろ子

首かけると誓う男は信じない
父までがぶら下がってる母の首
左遷されなぜか健康取り戻す
海外赴任息子の住む国は雨季に入る

和歌山市　堀畑靖子

結婚とはこんなものです皿洗う
はったりの効かぬ私の目鼻だち
いいかっこしいの財布を補塡する
肩こらぬ人と暮してつく脂肪

和歌山市　玉置当代

大空へ丸を書いたら晴れてきた
七人の敵に背広がくたびれる
秘話めいた事は苦手なやじろべえ
好奇心燃やし少年たむろする

和歌山市　森茜

この店も不景気らしい不愛想
世間にはよくあることと躱される
野の花を届けてくれるおつきあい
間おくつきあいにして長らえる

意気込んだのにイントロが気にいらぬ
思い出が乗り込んで来た海の駅
花はみんな育った庭を忘れない
目の高さ揃って話はずみだす

和歌山県　岡本睦美

梅雨晴れてオープンカーは華やかに
背のびして柱を拭けば亡父の声
遊びから競争心が湧いてくる
途中下車出来ない父の敷くレール

大阪市　勢理客トミ子

レモンの黄朝の目覚めを問いかける
自己主張してる売場の玩具たち
好きな人います悲しい嘘でした
拷問に堪えてるように歯科の椅子

羽曳野市　芦田絢子

ピカドンの言葉が風化して老いる
涼風が吹き始めてる夏の朝
一年生どの写真にもVサイン
ご自慢の肌はハワイで焼きました

岐阜市　渡辺杏村

花束のカスミ草さえ自己顕示
政治改革　片目のダルマ増える党
義理で書く紋切り型の名刺裏
蚊の命　一滴の血と引き換えに

鹿児島県　大山舞烏影

箱苗になり合唱を蛙やめ
かなだけの母の便りが捨てられぬ
病院の話の中に姉がいる
名を書いた受付帳も書道展

福岡県　本田忠男

飾らない人柄のまま笠智衆
足もとの覚束無さに眼鏡飛ぶ
生き返るように新茶の香に噎せる
躓いた足跡の土陽を弾く

熊本市　黒田緑

御成婚奉祝熱で雨あがる
オープンカーパレード身近なものとなり
子に譲り副院長で脈を取り
四世代同居日々の賑やかさ

熊本県　増田一乗

恐がりの番犬いつも吠えている
ため息をわざと聞かせる電話口
おしゃべりにくたびれ口も重くなり
何事かあるたび夫が偉く見え

福岡県　井崎ミサ子

人生の荷が重くなる老いの坂
お互いにこぼす姉妹の長電話
肩書きがとれて気楽な服を着る
要領の悪いもぐらの空回り

富山市　鍋谷冨士子

寝過した老いの身無策の今日も晴れ　酒田市　永澤裕子

セレモニーの隅で旧交暖める
欲の皮まだ持っている籤の列
風呂敷を拡げ帰って来た呵責　寝屋川市　土井英明

階段へ片足かけて止めにする
花にお茶次は運転免許証
此処のとこ傘寿の知恵を借りに行く
嫁の名で出せば来ましたご優待　相生市　中塚礎石

人形の向きをたまには変えてやり
振り向けば一人もいない丸木橋
孤独との戦い風は知ってくれ
先頭を羊の群れは信じきり　尼崎市　吉永伊三郎

姿見に昔を偲ぶ帯を解く
七三で公民館は婦人党
先見える妻の後から杖の夫
会者定離　運鈍根の根くらべ　尼崎市　中澤向西

角の店お好み焼きがよく売れる
商談へケジメを付けて酒を注ぐ
どん底へ冗談だけは景気よい
皇太子長き六年愛実る

大口を叩いた髭を剃り落す
封印をされて真相ヤブの中
たっぷりの新茶に眠気うばわれる
六十歳女の恋に蓋をする　八尾市　平川幸枝

平成の絵巻に涙老い二人
提灯ゆらゆら明治は涙もろくなり
たれよりもやはり主治医は妻でした
小さい旅妻すえ膳がうれしくて　尼崎市　湊修水

印象を残して帰る箸袋
旅に出て緊張感が若がえる
女の二十四時が変わる二十一世紀
苦労した役者のウイットあたたかい　貝塚市　池田寿美子

留守ばかりつづくと犬がぼやいてる
紫陽花としっぽり語る梅雨に入る
茜色装束お似合い皇子(みこ)凜凜し
妃のおしるし香りも高い玖瑰(はまなす)の花　枚方市　森本節子

鼻唄は大工する時父のくせ
妻の目は誤魔化せないよやせ我慢
太陽におふとん干して母を待つ
八月の御馳走ハモに決めている　東大阪市　安永暁子

京都市　小林英子

翔んでいる余生孫ともうまが合い
この辺で炎える火種が欲しくなる
肝っ玉母さんだった義母を恋う

尼崎市　岩倉キク子

ハンサムなあの星きっとうちの亡夫
名物の土産届けて無沙汰詫び
何時までも若いつもりでいるえくぼ

高槻市　芦田静江

解決の急所知ってた丸い背な
古代のロマン　ガラシャ満ち足る西の京
も一人の私同居早いと責めて来る

唐津市　市丸はる子

自分史に恋愛二三足しておく
丸くても掃くだけましな嫁と居る
包丁に週休二日とってやる

大阪市　清水絹子

お好み焼きとぜんざいですむお付き合い
付き添いの貸し出しベッドも消費税
見舞いには来なくてよいと子に電話

兵庫県　森脇和子

うれしくてみんな吐き出すお人好し
アメ玉も嚙めて入れ歯に慣れました
意のままになって舌までよく回る

大阪市　小糸昭子

茶柱が立って始まるついてる日
ため息が出るほど親に似てくる子
雨の中肩怒らせて猫帰る

松江市　松浦登志子

実になって初めて知った梨の花
大浴場やっぱり隅で膝を抱く
過保護です犬も私も昼寝癖

兵庫県　倉垣恵美

葉桜へがんばってます蛙の子
巣作りのつばめよ亡夫の二十五回忌
糸切歯抜いていやに静まれる

藤井寺市　楠昭子

どうしても祖父に勝てない草の笛
不器用に土を愛した太い指
ひざ小僧いろいろ庇ってくれました

岡山市　中嶋千恵子

罪ひとつ母の背中に裁かれる
絵にかいた餅の噂も風に消え
裏表干して女は季を畳む

綾部市　藤田芳郎

逢いたいと電話しといてもう三月
成るようにしかならないと注いでくれ
沈着と言われていつも後に居る

唐津市　山口ふさ子

掃除機の掃除いつでも忘れ勝ち
日本語も上手に喋れぬ日本人
あれこれと聞きたいと思う亡母偲ぶ

尼崎市　河津正治

石ぶみが太古のロマン語りかけ
褒められて安物ですと言いそびれ
男には笑って堪える意地もある

寝屋川市　後藤黎之助

好きな色塗って下さい愛あれば
ああ定年通勤電車音高し
墓建てて御先祖様と近くなり

寝屋川市　太田とし子

道問えば工事現場も道順に
居心地よい鬼と仏が住みなれる
御成婚朝はやっぱり日の丸だナ

枚方市　濱田良知

いたずらが信じられない児の寝顔
出血サービスほんまかいなと買ってみる
晩成といわれ続けて友逝った

今治市　村上久美子

真結びでなかった絆すぐほどけ
胸に棲む鬼一匹をもて余す
逃げ足がとっても早い金と運

東大阪市　指宿千枝子

淀川の水を飲んでも生きてます
無理強いをすれば三つ子も反発し
野次馬は何んだ何んだと知りたがり

鳥取県　土橋睦子

徳のある人生訓を読み返す
追うなんて貴方の値打ちさがります
人見知りせずシオカラ蜻蛉手にとまる

寝屋川市　籠島恵子

口惜しいが整理整頓夫に似る
気がかりなすきま風だが無視と決め
目刺しが好きな夫で肩は疑らぬけど

弘前市　岡本花匠

少年の森で大志の育つ四季
世事転変きっと咲かせる花がある
運鈍根自然に生きて恙無い

大阪市　尾崎黄紅

若さが欲しくて昔に住んだ町をゆく
老いということでお暇にしてしまい
立て板の水が嘘とは思えない

寝屋川市　井上すみれ

戦前派レモンをいつも絞り過ぎ
わてぇとこにもいますよええにょぼ
妥協して靴履いてから腹が立ち

大阪市　江城修史

ちぎれ雲流れる果てにある墓標
一期一会二度と戻らぬ出逢いの日
口ずさむナツメロ遠い日の慕情

静岡市　小木久子

混浴にためらいもないオバタリアン
薬漬け実感してるわたしです
強がってばかりで本音寂しい娘

島根県　松本聖子

しまい風呂あすの構想練るところ
古里が待つから楽し夏休み
留守番へ長い一日やっと暮れ

高槻市　執行稲子

Jリーグ　ガンバボーイが跳ね回る
後学に食べたパパイヤ病みつきに
きっちりと福助　女を演じきる

和歌山市　池永正雄

哲学のみちで哲学忘れてる
おしどりはどう過ごすのか倦怠期
大漁旗　三原色の男振り

和歌山県　村中悦男

聞き終えて本音の在りかやっと知る
助手席は妻が化粧をするところ
許される嘘の範囲で生む絆

岡山県　富坂志重

気のゆるみ思わぬ人が足掬う
窓一杯明けたら春が皆入り
順を待つ皆それぞれの癖を出し

松山市　丹下美津子

老人会　一茶芭蕉の句碑の前
雨天順延　主催者迷う雲が出る
全自動　朝をまかせて見るテレビ

寝屋川市　宮崎菜月

体重計　梅雨の重みという裸
カミナリが怒って夏の貌になる
本音詰めいずれ間歇泉になるだろう

岡山県　土居ひでの

約束を皇子と交わした妃の誉れ
以心伝心パレードへ届く陽の恵み
提灯を行列にしておめでとう

兵庫県　北川とみ子

知恵の輪を解いて会話がよく弾み
何も言うまい嘘の続きが生臭い
病む妻の箸が弾んで蒼い空

宇部市　中村三良

もう投げやりで矢鱈自分の影を踏み
粉飾して哀しいまでのイミテーション
ビルが邪魔虹は一色塗り残し

今治市　越智青園

瞑想に煮こぼれてます電話ベル
花の恋蝶に仲人たのみます
八月の雲は戦争忘れない

新潟県　高野不二

犬にまで通帳作る暮し向き
生活費へらしてしまう交際費
仕事一途に生きアルコール依存症

静岡市　三浦つね

混浴でばったり逢った好きな人
離乳食やってる親も口をあけ
新茶汲む家族の茶碗皆違い

羽曳野市　福田悦子

コスモスが咲きましたと言うたより
ふるさとの母よ夏バテしてないか
曲り角秋の涼しい風が舞う

松江市　浦辺静江

だんだんと調子にのった万歩計
近道は犬がどかっと座ってる
ビルが建ち町のイメージ一変す

松江市　安食友子

ゆっくりとあらぬ方から矢が刺さる
愚痴話近くのわたし的にされ
孫が言う「少し離れて歩こうよ」

静岡市　片平静代

漬物は姑おだてて任せてる
教会の椅子に正座したくなる
贅沢な平和日本の食べ歩き

鳥取県　小西五十鈴

バイキング欲ばりすぎて恥をかき
指切りの約束孫は忘れない
単身赴任の夫と結ぶ赤い糸

大阪市　今西静子

考えが古いと軽く子が笑い
頼まれて不覚に押した印でもめ
忍耐を胸にたたんできく話

尼崎市　向井末貞一

青春は疾走させるエネルギー
回復の兆しほんのり紅が差す
宴会を盛り上げている下戸の人

鳥取県　権代康女

どたん場で女心がゆれ動く
ふる里は亡母の温もりする景色
失敗をしてから自信ついて来た

泉佐野市　内田倫子

春風は蕾も心もふくらます
小包の紐ほどく間の期待感
叱られた子供が犬と話してる

地球との接点で浮く土踏まず　島根県　小林延子
好きな娘と握手した手が洗えない
あの団体大阪からの人らしい

極楽へ推薦したいひとが居る　寝屋川市　豊福路子
退院へ空いっぱいの五月晴れ
健脚にお礼を言うたことがない

緑陰の椅子に暑さを助けられ　静岡市　永倉柳華
お師匠が美人で喜寿に見えぬ齢
叱ったが夜も裏木戸開けておく

雨あがり墨絵のような山の雲　静岡市　浅子まつゑ
待つことに慣れてストレス少しへり
親展も茶封筒では驚かず

娘より身近な嫁をたよってる　八尾市　生嶋ますみ
自画像がだんだん他人めいて来る
当てもなくマンションを出る万歩計

象の耳団扇のようにゆれている　熊本市　北川一進
何時も見る番組孫が知っている
道楽に書いた俳画がほめられる

被害者意識　自己催眠をかけすぎる　和歌山市　山口三千子
色眼鏡かけて真実見えますか
忘却にするには傷が深すぎる

川岸で真夏の暑さ避けている　米子市　足立由美子
まぼろしで終らぬように夢を追う
涼を呼ぶ風鈴つるし夏本番

母よりは何故か小さく父を画く　広島市　元林光子
夢醒めていい夢だったと目をつむる
ワープロに遺句を打ちつつ夫偲ぶ

弁当の用意あります花の寺　岡山県　大石あすなろ
着ぶくれを一枚脱がす春の風
よくひびく妻のラッパでつつがなし

薬草を軒に吊るして母が病む　島根県　森茂美
内緒ごと遠いはなしを近くきく
二階級特進はないボランティア

旧道の道しるべ見てほっとする　静岡市　増田扶美
急カーブ抜けて涼風声弾む
美しい自然を残し過疎となる

子をあてにしない覚悟で貯める癖　青森市　山上嘉邦

町内の規律がわかるゴミ置場
姑の愚痴は健康のバロメーター　鳥取県　奥谷彩子

手のひらに小さな欲を遊ばせる
かごめかごめ悲しみ分かつ友といる
ライバルから辛口のジョークが届く　島根県　森山修光

句を練れば蛙の声も遠くなり
過疎の里山並み青く目にしみる
友出来て盛んに電話してる孫　佐賀市　古川かずのり

肩書が取れてめっきり父が老け
なるようになるさなさけの酒に溶け
梅雨空にころころ変わる永田町　兵庫県　酒井靖子

ときめきをほんまかいなと頬つめる
控え目の母の小言に刺がある
握りこぶしの中で耐えている涙　寝屋川市　北岡波留吉

軽い嘘ついて手応え探ってる
へそくりがマイナスになる不況風
髪洗い男の匂消している

ライバルと飲んで禁酒を持ち出せず
四十年の支持政党を見かぎる日
孫の守り朝からできる贅沢さ　寝屋川市　前たもつ

遠会釈しているらしい腰を折り
裏切りを責める哀しい瞳に出会い
削られたペンキ氷海から戻る　今治市　渡邊伊津志

見えっ張り嘘と本音が同居する
病状によって患者に嘘を告げ
年賀状だけが絆の余生です　香川県　田中ふみ

矢面の汗は背広にまで滲む
パソコンに迷いがあった経理ミス
ロボットが平気で仕事取っていく　和歌山市　山田博章

果物屋　彩とりどりの夏のいろ
五線譜にない歌うたうから可笑し
争った夜も布団は敷いてくれ　鳥取県　山本正光

俄雨もうれしき二人軒の下
好きだった味噌汁残す日多くなり
うとうととしながら自慢を聞いてやり　島根県　福間博利

好物と言えばまたまた膳の上　香川県　堤　くに子

人生を一期一会で幅広げ
喫茶店で椅子温ためる営業マン　岡山県　江口有一朗

とても便利な電話で喧嘩してしまい
美しい嘘で手紙に味を添え
外面も飾って老いの爽やかさ　岡山県　伏見すみれ

順序よく並んでメダカ唄になり
どじょう掬い習うて帰る山陰路
悪友の財布で酔うた縄のれん　鳥取県　山内芳江

少年の頃と変らぬくそ真面目
反省を責めてだんだん溝が出来
心まで映る鏡で怖くなり　静岡市　大村正雄

漬物の売場で選ぶ郷里の味
遺産分け考えている親孝行
利口ぶりピエロとなって踊ってる　唐津市　岩崎實

孫の手に渡す土産を先ず選び
言う程にかいた鼾の高からず
何かせむしきりにこぶし握りしむ　河内長野市　妹背尽呂久

公園の隅にしょんぼり紙風船
息が絶えるまで金庫の鍵握る
深刻な不況知ってる社寺の鈴　今治市　池田郁美

駅弁の楽しみ乗せて汽車は出る
旅楽し土地の文化でもてなされ
喜びも愚痴も拾うて海静か　大阪市　畠中智恵子

仏壇へただいまを言う孫の声
用心しへそくりの場所忘れてる
夕映えてラストシーンの長い道　羽曳野市　徳山みつこ

冷蔵庫の中で果ててくお買い得
女にも七人の敵夏の陣
皇后様よかったですね長い道　静岡市　宇佐美寿美

湯が溢れ心の愚痴を軽くする
み仏の私語を聞いてる数珠の指
躓きが心の襞に深く住む　出雲市　園山かおる

無位無冠父は卒寿を自慢する
嬉しさを倍増にする手を叩く
雨季に入る心に錆が付くように

それなりに床に納まる只の石　吹田市　馬渕光子

振り向けばカウアイ通り日本人
ファジーには日射し厳しいオアフ島　豊中市　月原方郎

今日あたり来てくれそうな見舞客
鬼婦長見舞の花を活けてくれ
雨の日もそれほど読書はかどらず　広島市　中村要

あれこれと医者もあきれる病気持ち
タレントの離婚で日誌しめくくる
蠅叩くことも叶わぬ五十肩　香川県　山地マツヱ

訃に急ぐタクシーもある雨の街
足踏みが多くて友に出し抜かれ
どの窓も幸せごっこの灯がともる　鳥取市　植田一京

思い出を絵本のようにだして見る
いたずらが消えて少年大人びる
ほろ酔いにぼちぼち父の唄が出る　神戸市　岩田信義

鏡だけ見てくれている夕化粧
独り者の愚痴聞かされる膝小僧
感情がこもらぬ台詞の覚えすぎ

俺だけの宇宙に浮かぶウォークマン　東京都　小寺九

杖ついて歩く老母が道譲る
嫌な奴が鏡の中で俺を見る　茨木市　島元ふみ

いさぎよく子離れをして二人ぼち
老いの愚痴言う暇もないスケジュール
五十年経っても夫クェスチョン　岡山県　牧野秀香

梅雨晴れ間　光と風の中を行く
友逝きてゆっくり構えて居れぬ気に
雨の中ゆっくり引越す蝸牛　唐津市　入江喜久亭

腹立ちをおさめてくれる熱いお茶
テレビ見て一と日終りし休日よ
ナツメロにふと足止める裏通り　唐津市　野田旭恒

澄ましてる顔に隠れている孤独
在宅へヘルパー手を取り足を取り
待つよりも待たせる身にもある苦労　唐津市　浜本治幸

煮こぼれに気付かぬ春の長話
ふわふわと春は浮き立つ流れ雲
あるいはの希望抱かす宝くじ

説明を聞けばそうかと孫の図画　姫路市　丸尾はる子

もう無理と手鏡までが嗤いだす　姫路市　福島姫女

髪型を変えたら女あごを引く
ユーモアな僧の話術を聞く説法　弘前市　一戸ツネ

雑記帳の私語がうるさい午前二時
文化推進カルチュアの窓花ひらく　鳥取県　中西智恵子

宿題もすっかり忘れアルバイト
ふるさとの井戸は涸れずにうまい水　兵庫県　中野とよ子

相手には通うパイプがつまってる
バランスのとれたメニューの市場かご　島根県　菅田かつ子

アマリリス　ラッパを空へ吹くごとし
ＰＫＯに命を捨てに行かされる　島根県　武島ちよえ

梅雨入り宣言折目正しく雨が降り
ご馳走を前に祝辞がまだ続き　岡山市　山磨行子

土を練る園児のひとみ豆陶工
ウインドの和菓子それぞれ自己主張　唐津市　江川青琴

禁酒した夫に何かと気を遣い
健康とは忙し過ぎて暇がない　和歌山市　森口恵子

見てくれは悪いが心美しい
浅くかけいつでも逃げる用意する　吹田市　西岡豊

坂道が億劫になる子の住い
縄のれん潜ればやあと顔馴染み　河内長野市　印藤智子

ＰＴＡついしゃべりすぎ役貰う
先生が美男で血圧また上がる　兵庫県　奥野テル

開通式汗知らぬ手がテープ切る
リハビリの肩にやさしい若葉風　東大阪市　松山隆

七転の波乱の割に素直な子
あの山にかかる夕陽に明日の幸　静岡市　青柳金吾

気の利かぬ主と犬の視線言う
カタカナのニュースをさがす世界地図　八戸市　島田昭治

気の毒なくらい正直で貧に居る
貧でもいい小さな楽しみ下手な句を

飲めばすぐ効くように売る薬屋さん　広島県　森川抜智

せんべいを買うてるとこを鹿が見て　羽曳野市　酒井一壺

道草は傘寿がきてもやめられず

マンションのベランダに咲く傘の花　鳥取市　中澤正恵

車椅子いらない口にいる手足（入院生活）

ササユリの香りに酔うて口軽く　天理市　飯田昇

吼えるだけ吼えて孤独がもみ手する

生煮えのままで噂が先走り　藤井寺市　川端たかし

父親に似た上役に誘われる

コーヒーが冷めてしまうぞ長電話　和歌山市　木村親路

浅漬のうまい女と添いました

その上にまだ塗るのかと鏡言い　明石市　小川酔月

誕生日念をおされて家を出る

今日もまた男をだます夜の顔　川西市　田中喜俊

友と会い楽しい食事弾みます

バッグにも薬しのばせ出かけます　富田林市　山原昭水

梅干が食べたくなって日本人

半日を昆虫図鑑で童心に　豊中市　みきわきみ

余生とや末っ子ようやく嫁をとり

どちらが長い妻のテレビと我が読書　大阪市　川原章久

追いかけて追いかけられてかくれんぼ

ＯＬの足濡れている雨宿り　島根県　児玉幸子

さわやかな朝へ届いたカーネーション

しょうぶ園流しそうめん食べに行く　泉南市　坂根流水

名選手老いて三振空仰ぎ

何気なく暮せる平和有難く　鳥取市　谷口百合子

玉手箱に私の香り詰めて置く

祝い唄聞かされてまた涙ぐむ　松江市　佐野木みえ

樟脳の匂う紬に亡母を恋う

まだ余力残して子供に寄りかかり　和歌山県　吉田武治

逃げ腰になると犬にも見くびられ

無視するな聞こえよがしの咳ばらい

鳥取県　今本早苗

段々と自立してゆく子がまぶしい
石けんの香のする妻とお茶を飲む

羽曳野市　山本たけし

ユーモアも混じる講義に湧く人気
恋もあり別れ話もある茶店

鳥取県　橋本孝由

癌告知反省したり悩んだり
妻と反省歩幅だんだん合ってくる

八尾市　秦正子

口約束のままで終った親孝行
自己主張して見せたとて露地の菊

姫路市　服部一典

相手から掛かった電話は長話
こっち向きなはれ妻にせめられる

青森県　諏訪明雄

将棋指し一番勝負に二番負け
錯覚か隣の奥さんやたら美人

兵庫県　安達厚

おだてだと思いながらもほほ染める
亡き姉の年になったと線香たて

池田市　木村一笛

母の背に濡れあとがある泣き寝入り
焼塀の下町風の平屋建ち

泉佐野市　大工静子

自動ドア四股踏んでまた踏んであき
掃除機を蠅取りぐもがうまくにげ

鳥取県　橋谷静江

手作りへ旨いといってくれる夫
疲れたといってパチンコへは行ける

唐津市　山門幸夫

ゴム長を穿いて螢に身を焦がし
燕来る窓を大きく開けて待ち

箕面市　木村天弘

視聴率サッカー野球と競い合い
敵もいま苦しいはずだあと五キロ

出雲市　中村トク子

観光に一役買ってる蜆汁
五月晴れゆたかに泳ぐ鯉のぼり

米子市　服部朗子

雅子妃の礼服が花びらのよう
湯上がりに孫を肴にコップ酒

寝屋川市　坂上高栄

髪切って女一念発起する
長談義しびれ切らした助け舟

唐津市　福島紀一

サングラス隠しているが見えるシワ
水着姿あれはうちのおかあチャン

留守がちな夫に妻の隙間風　兵庫県　玉田三重

離着陸くり返しいま雲の中　和歌山県　藤井春子

プレゼント嫁御の心身にしみる

結び目を解いて味わう宅急便　米子市　小塩智加恵

ご近所がさつきを褒めに上がり込む

目覚ましに頼りきってる低血圧　岡山県　国米きくゑ

おふくろの味はグルメの上をゆく

登山靴　生気もろうた岩清水　寝屋川市　瀧本八十八

引き算のロシアに夢を足す支援

カラオケの自己満足の迷惑度　大阪市　乾哲静

男の汗に惚れた女の社会学

年取れば寄る年波の顔となり　海南市　谷口義男

嫁貰い息子は急に他人面

尻馬に乗って先棒担ぐ無知　米子市　木村春枝

雑草の強さあたりをはばからぬ

農協の指令が動く田植苗　豊中市　田中道胤

焼鳥の匂にちょっと寄ってゆく

ここからは朱色が好きな中華街　藤井寺市　田中孝子

再会を声なくじっとみつめ合う

明け暮れの忙しさ孤独包みこむ　米子市　池尾保子

遺産残す兄弟喧嘩せぬように

うれしい日今日は鏡を磨こうか　河内長野市　橋本弘美

お土産は大阪駅で買うてくる

恋人が出来ましたのとふれ歩く　出雲市　林悦子

若葉萌ゆ私もみどりに染まりそう

青い空　気温上昇初夏の風　大阪市　中橋恵美子

週刊誌皆読み終えてパーマ出来

達筆な手紙読むのに一苦労　藤井寺市　菊地繁男

一歩ずつ傷も癒えて松葉杖

町会長会費の使途に気をつかい　大阪市　出山美津枝

妻よりもママに足向く帰り道

妃殿下のまなざし凜と気品満ち

湧き水の富士の神秘に浸る旅　静岡市　中西　雅

田起しのあとは蛙の天下です　十和田市　小笠原　敏夫

会えば腹互いに見合うお中年

朝靄に犬好き達の高笑い　大阪市　平井　露芳

海遊館見て来た大阪行って来た

昆虫の館で蝶が飛んで見せ　大阪市　中井　正秀

み仏にチンしたご飯供えます

意気がって極道すると妻に言う　和歌山県　上岡　正直

定退し雑事に追われ日が暮れる

日は西に今日もくれるか海の凪　島根県　岩田　三和

テレビ殿食い道楽のすすめ過ぎ

かたつむり決して戦せぬ歩み　鳥取県　清水　加代子

愛情の裏がえしは憎しみか

高い授業料だったと笑える日　香川県　辻上　よしみ

苦しんでやっと明るさ戻って来

病む母の元気な姿夢で逢い　河内長野市　水谷　正子

追伸を何時も書いてる友が好き

たこ焼きがポロリ金魚の網に落ち　米子市　永井　三津子

ハイテクのトイレで祖父が叫んでる

一人身の孤独かみしめ医者通い　大阪市　大河　未佐子

借りたのはどっちの方かあの態度

借金をネタに稼げる漫才師　鳥取市　近藤　秋星

誰が吹く口笛なのか子守歌

二人目が生れますのと姑若し　鳥取市　谷口　侑里

うれしい日誰彼なしに声かける

娘の恋人父は仇にして困る

第17回全日本川柳愛媛大会

文部大臣奨励賞

一直線を貫く父の火よ風よ　三重県　木野由紀子

川柳大賞

軋む日もあった線路を振り返る　大阪府　川島諷云児

—水煙抄

秀句鑑賞

—7月号から

門谷たず子

引き受けた無理が今夜を眠らせぬ

岩切康子

何とタイミングよく、この句は今の私の心境を詠んでくださったことでしょう。うかうかとお引き受けしたものの、鑑賞などとおこがましいことをと、身のすくむ思いでペンを取っております。

自己主張孔雀が羽根をたたまない

高田美代子

美しい羽根をいつまでも広げている孔雀、それを自己主張と見たのは、やはり女性の底辺に流れるきびしさのようなものでしょうか。同じ女性として共感を呼びます。

風船を飛ばした返事まだ来ない

森脇和子

こんな句は、素直にふんわかと受けとめたいものです。夢のある遊びのある句もいいですね。

裏返す言葉の中に愛を視る

中尾まゆみ

ポンポンと憎まれ口をたたき合うていても落ち着いて考えてみると、それは愛情の裏返しだったのかも。仲の良い二人が見えます。

見つめられて果実は早く熟れてくる

辻翠子

果実もおんなも見つめられるから、心も姿も美しくなりたいと願い、努力するものでしょうね。胸がジーンとあたたかいもので満たされます。

目をとじて育った川とよく遊ぶ

鹿島松子

ふる里は、いつまでも誰にも、心のやすらぎです。すんなりと同感できるいい句です。

ふところに母の鏡を持ち歩く

流奈美子

母の鏡は、ほんの少しの心の翳りも見のがさず、やさしく慰めてくれます。母の句には弱い私ですが、母の鏡は上手な表現だと思いました。

一に一足して二でないのも答

藤井高子

こうはっきり言い切られると、ほんとほんとと、思わず納得してしまいます。杓子定規の世の中なんて、面白くもありません。ファジーという言葉もはやっています。それぞれの答を楽しみたいものです。

もう棘もない老母さんの鯨尺

長浜澄子

しっかり者と言われてきた母さんですが、今はもう老いて、やさしく丸くなって来ました。ほっとした安らぎと、そこはかとない淋しさが胸に伝わってきます。

四季みんな酒の肴にして楽し

朝倉大柏

幸せなことに、日本にはそれぞれに美しい四季があります。チマチマと暮す日常の中でたまには気宇壮大に、こんな楽しい句があってもいいのではありませんか。

まぐれでもホームランには違いない

岩本美智子

よくあることを上手くとらえられました。ホームランはホームラン。悔しければあなたも打ってごろうじろ。まぐれのホームランに乾杯！あと私の好きな句を並べます。

タンポポに学ぶやさしい妥協案

池森子

この人も淋しい老いか赤を着て

永田暁風

こんな時ぐらい止ってよい時計

遠山夏生

銀河系

河内天笑選

豊中市　田中正坊

やることが多すぎるので昼寝する
海を見て山へ行きたくなってきた
くたびれた軍旗が父の陣にある

米子市　林　瑞枝

でこぼこの道で惚けてる暇がない
運命に胡坐をかいて生きてきた
ときどきは夢の鞍替えして遊ぶ

唐津市　久保正剣

善人と言う賛辞なら欲しくない（正敏改め）
困ります叱られますと従いてくる

大阪市　大河未佐子

成り行きに任せる勇気ちょっと出来
天国で好きに走れと首輪とる

名古屋市　藤井高子

あれもこれも硯の海へ消えてゆく
亡父も亡母も見たこの窓の銀河系

大阪市　尾崎黄紅

敵にするほどでもないと強気なり
老僧が正座しなくてよいと言う

岸和田市　島崎冨志子

走り書きのメモで夫婦をつないでる
イエス・ノーはっきり言って疎まれる

香川県　池田かおり

銀行の都合でカード持たされる
年金の話で終るクラス会

鳥取市　武田帆雀

恰好の遊び相手に僧が来る
パチンコの関所が無事に潜れない

寝屋川市　堀江光子

好きというわりには多い言葉かず
ふるさとへ客分で行く代替り

吹田市　山本希久子

あきらめか悟りか犬がもう吠えぬ
客間より贅を凝らしたニューキチン

米子市　澤田千春

図に乗って鬼に出逢った山の道
生きている証拠と医者はかたづける

唐津市　山口高明

一言をぐっと堪えてめしを嚙む
来賓の祝辞はどれも棒で読み

砂川市　大橋政良

十字架とだぶって見える棒グラフ
喝采の抜ける壊れた非常口

米子市　光井玲子

約束を一途に守り売れ残る
道半ば祈り足りない亀である

藤井寺市　高田美代子

気楽さが好き止り木の客となる
落し穴へ続く矢印だと知らず

香川県　山地マツエ

遠くなる虹へ足場を組み直す
三つ指をつく悪妻で憎めない

西宮市　西口いわゑ

ジューンブライド皇居の森も華やいで
遊歩道ひとりで歩くとこでなし

唐津市　田口虹汀

砂風呂の妻　上機嫌上機嫌
おんな優先岩戸神楽のむかしより

倉敷市　田辺炙六

治療費が無料になって済みません
仲よしになれそう軍歌好きな人

八尾市　山下美津留

新プラン敵がにおいを嗅ぎにくる
年金も利子が下がって損の渦

和歌山市　古久保和子

何となく納得をして出る役所
楽しそうに面白そうにイヤホーン

大阪市　藤田頂留子

使わないとこから人は老いてゆく
噴水が海を見たいと飛び上がり

鳥取県　鈴木公弘

居酒屋へ父を忘れに行ってくる
地下街を抜けて風船飛んできた

出雲市　島祥庵

米子市　政岡　日枝子
肋骨の一つ一つも宝なり

倉敷市　井上　富子
見ず知らずの石屋がくれる年賀状

尼崎市　春城　年代
晩成を信じつづけたあほらしさ

寝屋川市　後藤　黎之助
妻の目がキラリと光り電話です

米子市　新　正子
若返る話に弱いイヤリング

鳥取県　上田　俊路
連れ添って剥げたメッキに慣れてくる

米子市　八木　千代
縦糸の瘤どのように活かそうか

富田林市　藤田　泰子
鬼も良し蛇も良したのしけものみち

青森市　工藤　甲吉
大敗をしてあきらめがつきやすい

鳥取県　権代　康女
せかされてその気になったおてもやん

広島市　中村　要
神様はやっぱりこわい無神論

鳥取県　西川　和子
もう一度使えないかと考える

藤井寺市　楠　昭子
見て聞いて他人の事は面白い

唐津市　山門　幸夫
物指しを捨てて息子と渡る橋

岸和田市　田中　文時
お米より酒がよう減る妻の留守

香川県　川崎　ひかり
バーゲンで尻ごみしたら負けになる

鳥取県　新家　完司
憎しみを支えに壁を乗り越える

米子市　林　荒介
飼犬の体内時計と歩を合わす

海南市　三宅　保州
心臓がたまに休みをくれと言う

和歌山市　木村　初子
満足な答出ぬまま椿落つ

鳥取県　江原　とみお
口説きたいけど糸口が見つからぬ

唐津市　市丸　はる子
触発の危険まだある共白髪

和歌山市　玉井　豊太
ひとさんに渕の深さは話せない

松原市　小池　しげお
妻と医者組んでるらしい酒の瓶

西宮市　亀岡　哲子
再会の目じりの皺が優しくて

米子市　鹿島　松子
誰とでも本音で話すから困る

大阪市　川原　章久
きれいごと娘のハガキには裏がある

岡山県　土居　ひでの
節目ごとまあるくなって行く理性

兵庫県　遠山　可住
男死すあしたの地図を描きながら

出雲市　板垣　夢酔
風鈴が満足そうに歌いだす

堺市　高橋　千万子
確率を言うたら夢がこわれそう

米子市　石垣　花子
水たまり考えるより跳んでみる

鳥取県　さえき　やえ
子の遊ぶ地図が次第にあせてくる

出雲市　竹治　ちかし
禁煙を破り自分を取り戻す

大阪市　桝本　露児
古希すぎて空想癖がなおらない

香川県　木村　明人
ベランダの椅子は大きな夢を見る

和歌山市　福本　英子
五分前に晴れたらいいね船が出る

阪南市　深日　白光子
今もあざやかに定年の日の記憶

寝屋川市　坂上　高栄
マイナスになった助言を胸で詫び

宇部市　中村　三良
絶叫がまだ残ってるデスマスク

岐阜県　渡辺　杏村
だんだんと地球の顔がガンになる

鳥取県　乾　隆風
コンドームなすびの花に嗤われる

和歌山市　桜井千秀
ぶっちゃけた話で出鼻くじかれる

岸和田市　三輪通彦
子宝を重荷と思う時もある

大阪府　籾山隆
つゆ晴れ間　生駒の山を天に干す

箕面市　岩津ようじ
病室を出てからそっと泣く見舞い

姫路市　北条てる代
笑えないジョークに笑う宮仕え

鳥取県　土橋螢
特攻の秘話を漏らしてなるものか

鳥取県　土橋はるお
通帳に銭が黙って入っている

鳥取県　土橋睦子
決心がつくまで水平線を見る

寝屋川市　岸野あやめ
苦の種のバスト　グラマーとも言われ

倉吉市　野中御前
人生の甘辛潜ったホームの灯

箕面市　椎江清芳
胃カメラを飲んだ帰りの缶ビール

大阪市　井上白峰
鮮やかに変身妻がハイヒール

八尾市　片上英一
初競りは三本〆でゆく新茶

西宮市　奥田みつ子
攻めるのが好きで背中は隙だらけ

海南市　谷口義男
美しく老いる事だけ考える

池田市　岡本吉太郎
人類はいまに地球を使い捨て

和歌山市　玉置当代
婆ちゃんになったと弾む声が来る

今治市　矢野佳雲
一戸建て買うて通勤楽でなし

岡山市　井上柳五郎
負けん気がため息そっと吐きすてる

米子市　金山夕子
奥さまに読まれるはがき五分書きに

熊本市　遠山夏生
友逝ってより歳月の速いこと

奈良市　米田恭昌
悟りきった顔してやはり見るポルノ

和歌山市　田中みね
孫などはいないいないと自己暗示

寝屋川市　江口度
坊さんもしびれきらしていた法事

鳥取県　石谷美恵子
聞く耳は持たぬ真只中の恋

静岡市　永倉柳華
嫁ぐ日を聞けばリンゴのような頬

静岡市　沢田きん
ふくれてる小銭をバスで軽くする

鳥取市　植田一京
丁重に失礼なこと言いに来る

鳥取市　西村黙光
検診のための晩酌欠かさない

大阪市　亀井円女
一蓮托生もめて笑って住む二人

羽咋市　三宅ろ亭
共感を求めぬゴーイングマイウェー

鳥取県　山内芳江
充分に反省してる丸坊主

熊本県　高野宵草
剣山に疲れ花瓶に依りかかり

熊本県　増田一乗
傘寿の宴　子等秘密裡に事運び

有田市　生馬芙美子
大げさな噂に堪えて看護する

岡山県　小林妻子
老妻も均等法を知っている

和歌山県　村中悦男
田植も二人　苗箱洗うのも二人

宝塚市　丸山よし津
消えかけた種火を起こす本に逢う

八戸市　島田昭治
孫五人いるばあさんの熱い恋

鳥取市　前田一枝
鳴き砂に好きか嫌いか聞いてみる

唐津市　山門タミ
首都圏の車の波に居る孤独

鳥取県　田村きみ子
珈琲の香りにつられ起きてくる

広島市　流　奈美子
竹踏みに励む楢山への助走

弘前市　一戸ツネ
雑記帳に愚痴がこぼれる心不全

唐津市　浜本義美
決めかねていることのあり鉦叩く

倉吉市　米田幸子
白黒をつけられてから敵視する

倉吉市　最上和枝
優柔不断の私を叱る鬼瓦

広島県　田村新造
腰にシャツ巻いた娘のニューモード

旭川市　朝倉大柏
世を嘆く仲間とうまい酒になる

川西市　松本ただし
運命線支線がたんとありすぎる

今治市　月原宵明
饒舌な鴉と暮れる松並木

香川県　新川マサヱ
男手が無くとも人並の田植

和歌山県　西口忠雄
銀婚式でもち上げられてキッスする

守口市　結城君子
豪快な笑いで消えたわだかまり

唐津市　浜本久仁於
たばこ屋の娘も老いて販売機

静岡県　薗田漠沓
民族と宗教世界のむずかしさ

堺市　神原文
ここへ来て運命線を信じ切る

笠岡市　松本忠三
退職をしたら水虫すっと退き

大阪市　町田達子
負けん気の果ての煩悩もて余し

和歌山県　福田和子
せめてもの親孝行と耳を貸し

枚方市　海老池洋
親を見て子も力泳の鯉のぼり

姫路市　丁坪サワ子
住みついた卑しい鬼が出てゆかぬ

弘前市　村田善保
慚愧の樹一本切って起ち上がる

有田市　松井かなめ
嬉しさを隣へ分ける祝餅

茨木市　堀良江
決心をしたらストンと荷が下りた

大阪市　北勝美
スライディング激突シーンにある余韻

豊中市　安藤寿美子
人物は不要菖蒲を写します

藤井寺市　川端たかし
倒れ際独楽がブツブツ言っている

藤井寺市　中島志洋
知恵袋などと煽ててこき使い

広島市　森田文
夢多くあじさい色になるわたし

綾部市　藤田芳郎
一年で倍の話にうかうかと

香川県　成重放任
農繁期　患者途切れる田舎医者

茨木市　藤井正雄
川ひとつへだてば違う地方版

和歌山市　池永正雄
会席に座る暇ない芸達者

松江市　松浦登志子
カップルが横のカップル値踏みする

唐津市　浜本ちよ
鯉のぼり波立たぬ日は立ち泳ぎ

藤井寺市　菊地繁男
この辺り闇市だった一等地

唐津市　浜本治幸
酒飲まぬ時は仏のような人

福岡県　本田忠男
遠慮せず言ってけんかにならぬ友

大阪市　大福留吉
ボランティアして充実の大ジョッキ

米子市　足立由美子
実るまで彩たしていく私の絵

「銀河系」への投句は、同人・誌友を問いません。川柳塔用箋に3句を書き、毎月15日までに到着するよう、川柳塔社事務所へお送りください。（選者）

女性コーナー

黄香の忠

小出智子選

母の日も父の日もなし真正面　八尾市　宮西　弥生

縦横の線をはっきり引き直す　和歌山市　山口三千子

壁にもたれて壁と妥協をしてしまう　西宮市　奥田みつ子

古里の川で仮面を丸洗い　岡山県　矢内寿恵子

八分目と思いながらも注ぎこぼす　富田林市　藤田　泰子

どくだみの匂　私もくどくなる　和歌山市　堀畑　靖子

嬉しいことにまだ糠みそを漬けている　和歌山市　福本　英子

毬つけばひいふうみいと亡母が呼ぶ　弘前市　佐治千加子

口紅を引いたが何のあてもない　米子市　小塩智加恵

学びたし自動ドア開くタイミング　大阪市　西出　楓楽

伸びきったゴム紐に似るいのちだな　和歌山市　木本　朱夏

グラスの底のからくりが見えてきた　伊丹市　前田しゅう子

比較しないで長女次女三女　寝屋川市　平松かすみ

揃えてはなかなか描けぬ両の眉　米子市　鹿島　松子

石仏やがては風に負けてゆく　米子市　石垣　花子

せっせっせ両手で受ける幸がある　鳥取県　奥谷　彩子

ポイントを摑んで私いち抜けた　米子市　林　瑞枝

ストローの先に異和感が残る　島根県　松本　文子

風が来てエッセンスなど振りかける　米子市　白根　ふみ

花の事には無口なひとと思えない　大阪市　稲本　凡子

どんな明日なのか冷蔵庫を覗く　堺市　横田マリ子

賢所のカラスが驚いて啼いた　藤井寺市　高田美代子

亡母の齢目安に歩く土踏まず　大阪市　鈴木　節子

賄婦たった一人の舞台裏　青森県　福士　トキ

走っても夢に追い着くことはない　河内長野市　植村　喜代

お茶碗がひとつ割れただけのこと　守口市　結城　君子

一つずつ苺潰している思案　芦屋市　黒田　能子

友想う遠く近くに飛行雲　大阪市　上江洌勝子

ああ惜しい虹へ梯子が届かない　兵庫県　酒井　靖子

長い道でした花野が見えて来た　米子市　茂理　高代

朗報はない六月の空の色　和歌山市　西山　幸

人の手に渡した花が惜しくなる　鳥取市　谷口百合子

足元は五歳の差あり容赦なし　吹田市　栗谷　春子

幸福を願う柱の影がある　大阪市　津守　柳伸

亡母にまた無理を言いたい事ができ　西宮市　門谷たず子

煩悩を一つずつ消し蓮ひらく　米子市　中井　ゆき

ぼたん園静かな乱をみる如し　西宮市　西口いわゑ

正面は嘘でなかった三面鏡　倉吉市　淡路ゆり子

耳学が時々躓きそうになる　羽曳野市　吉川　寿美

言訳のない一日で星数え　兵庫県　中野とよ子

叶う日のない夢故に持ちつづけ　寝屋川市　堀江　光子

騙されたふりして舌も妥協する　米子市　政岡日枝子

新郎の笑顔に拍手してあげる　米子市　新　正子

テレパシー転がるように逢いにゆく　米子市　澤田　千春

独りよがりが過ぎるくちなしの白　羽曳野市　芦田　絢子
花手桶　身体の不調など告げて　寝屋川市　岸野あやめ
ひとり咲くことにも慣れた花あざみ　名古屋市　藤井　高子
射程距離で試されている影法師　堺　市　山下　途子
空振りかも知れぬがタクト持っている　八尾市　高橋　夕花
雨宿り雫きれいに仲直り　堺　市　山本　半銭
制服が白く弾んで六月に　堺　市　小西　小雪
留袖で子育ての日を締めくくる　大阪市　市野　鞆美
遠回りしてよかったと今思う　和歌山市　桜井　千秀
遊時間とやローヒール履きながら　尼崎市　春城　年代
アイリスに女ひとりのたち姿　弘前市　一戸　ツネ
口下手な人の発言待っている　大阪市　北川　弘子
音頭は人に委せて舞うている　姫路市　丁坪サワ子
生かされて今年も会えた軒ツバメ　香川県　川崎ひかり
喜怒哀楽　深い森から出た夫婦　有田市　松井かなめ
挨拶はまず久濶の握手から　出雲市　園山多賀子
味方からきびしい野次がとんでくる　八尾市　高杉　千歩
許し合う風が静かに止むように　豊中市　辻川　慶子
森英恵のハンカチ汗はふきません　倉吉市　野中　御前
どこかがちょっと抜けているのを愛される　大阪市　本間満津子
マネキンとおんなじ服が似合わない　大阪市　神夏磯典子
羨ましい二人三脚という言葉　枚方市　森本　節子
肩書をとると夫に笑みもどる　松江市　松浦登志子
その時のためにと母の知恵袋　和歌山市　田中　みね
愛犬が今日の鼓動を察知して　大阪市　松尾柳右子

いい知恵も出ないリンゴの丸噛り　鳥取県　小西五十鈴
合せ鏡うしろ姿が齢をとり　大阪市　渡部さと美
お隣と手つなぎたがるスイートピー　島根県　小林　延子
都合よく忘れ上手になれるなら　大阪市　町田　達子
言葉返すなと言ってくれた花　鳥取県　さえきやえ
自分史をパズルのように組立てる　鳥取市　植田　一京
小唄会　余韻が残る帯を解く　姫路市　中塚　遊峰
向い風　今の私だから耐える　岡山県　千原　理瑛
悟れずにまだ愛憎の日を重ね　泉佐野市　内田　倫子
短夜の趣味の話がつきもせず　姫路市　福島　姫女
逝く人がつぎつぎに出る南町　唐津市　山門　タミ
いざ執刀というところで目が覚めた　松江市　安食　友子
好きですと若い言葉が跳ね返る　兵庫県　森脇　和子
頑なに減反守り豆をまく　和歌山県　小倉　アサ

ゴシックの**一句目**―作者には今年もまた父の日も母の日もなかった。真実独りであることを殊更思う真正面がある。真摯な表現に句の深さを見る。**二句目**―人の世には縦横の繋がりというむつかしいものがある。生き方をはっきりするのは大切なことで、きっとそれに気付かれたのであろうか。複雑なことを爽やかに纏められた。**三句目**―厚い壁なれど、いっそもたれてみれば、やさしいものだということを知る。案外、壁の方から妥協してくれるのではあるまいか。**四句目**―古里へ錦を飾れる場合はよいが、そうともゆかぬこともある。「仮面を丸洗い」と、ユニークな言葉遣いがこの句を引き立てた。

◇

投句先　〒544　大阪市生野区勝山南1―18―10　小出智子

這う

石原淑子選

葡萄前進　戦友は異国の土となり　武庫坊
能舞台滑るよう這う白い足袋　杜的
這うまでは一人で暮らす意地がある　智加恵
居合わせた者みな這わすコンタクト　高明
床下も母が這うてた大掃除　遊峰
福豆を拾う這い這いごっつんこ　御前
月をみに蟹は塀を這い上る　義美
這い上がる意地どん底にある暮し　希久子
這うてでも行くと嬉しいことを言う　(藤)正雄
幼子がめざめて母の胸へ這う　拓生
寝たきりが這うてゆきたい子の訃報　サワ子
廃屋へ蔦の青さがきれい過ぎ　南奉
選挙中這いつくばったこと忘れ　柳五郎
這い回る赤ん坊に見る進化論　正坊
いな光り怖くて這いよる母の膝　志重
逆転の打球が這った三遊間　狸村
ひと筋を這うて悔いなしカタツムリ　洋
ふまれても地を這うて行く草の意地　玉恵
這ってでも帰ってきますよPKO　勝美
這いそうなのも付いてくる三次会　ようじ
押しピンを這うて探している夫婦　博史
這い回る裸をタオル追いかける　たもつ
吊り橋の最後をようやく這い渡り　紀一
お隣の西瓜に負けぬよう這えよ　はるお
新畳三枚ほどは這うてみる　四郎
這うように十二単の裾を持つ　倫子
歩行器で育ち這い這い知らぬまま　やすお
泥の田に這いつくばってでも守る　高夫
這うように登った山頂足すくみ　さとし
地を這えば花の秘密に出逢えそう　日枝子
ぎんぎらぎんなめくじ這って隠れん坊　高栄
クローバー四葉捜して地面這う　芙美子
朝顔のつる這う速さたくましさ　美子
山を這う小道は何時か雲の上　哲静
明日の蝶を夢に青虫今日を這う　彩子
火の竜のマグマ這いずる普賢岳　舞鳥影
奈落から男の意地が這い上がる　正剣
佳
腰痛に泣かされました這いました　公乃
腹這いで大地の鼓動確かめる　枯梢
風ヒュルル簀に這ってる一夜干し　ただし
這い出した児に英才の勧めくる　鉄治
這うほどにのめめ今日は棟上がる　きみえ
人
田を這った自負が自由化許さない　大柏
地
灼熱の地を這う慟哭　八月忌　寿恵子
天
子の膝に葡萄の泥はつけられぬ　藤田芳郎
軸
ふたありを包み込むよに霧の這う　村興しのどかな里が消えていく　ちかし
寝そべってテレビ見ている妻の留守　美子
かたつむりのどかに這うている若葉　三和
のどかさを残し故郷過疎に泣く　圭一郎
水郷ののどかな朝を櫓が破る　(池)正雄
田植済み蛙の鳴き声さえのどか　シマ子
のどかなる生き甲斐づくり二人して　姫女
日向ぼこ老婆の寝息のどかなる　忠三
牧場の時が止っているのどか　蕗児
揚げ雲雀声ものどかな麦の秋　多賀子
のどかだね休耕田の蛙たち　舞鳥影
会議中　欠伸する人　眠る人　紀一
のどかだと思える日日の充実感　理瑛
陰日向なく生かされて長閑なり　螢
子の誘いのどかな住居捨て切れず　一乗
蝶二匹抜きつ抜かれつ遍路笠　杜的
郵便屋お茶を頂く一軒屋　凡々子
ひらめきのないままのどか地平線　静子
老夫婦のどかに話す種も尽き　隆
遮断機がひとり鳴ってる村の道　英明
客一人のどかに走る田舎バス　(藤)正雄
ビル谷間のどかにテープ焼芋屋　章久

のどか

北勝美選

花筵　生きた仏がむつみ合う　宵明
消防車のどかに洗ういい日和　時弘
縁先に薬草干してのどかなり　遊峰
サイレンが隅まで聴こえ村のどか　明水
反芻の牛の寝姿　春の丘　ツネ
のどかさを求め余生を過疎の村　ふさ子
普賢岳のどかな昔いつ戻る　隆
万歩計提げて芝生で丸くなる　一花
大欠伸のどかに揺れる竿の先　虹汀
肩書きのとれてのどかな高い天　洋
春のどか犬も見ている紙芝居　つえ子
水ぐるまのどかに輪廻説いている　俊子
通りゃんせのどかな小径ボクの道　雄々
春のどか珈琲館に僕の椅子　しげお
年金でのどかな暮らしできますか　正坊
佳

タバコの輪のどかに浮かせ野に下り　愛論
炭焼の煙のどかな風景画　寿美
太陽が味方のどかな老農夫　英壬子
火花散るのどかに見える香合わせ　重人
ボーと鳴る汽笛へ牛は首もたげ　鉄治
人

塔の風のどかに渡る花遍路　高夫
地

草にねて雲の流れへいまむかし　千歩
天

定年の絵皿のどかな色を溶く　斉藤劦
軸

松籟へ鳶が輪を画く午下がり　恵美
雄々
ちよ
保州
しげお
大柏
洋

ソース

山口美穂選

たこ焼にソースの味を教えられ　狸村
ソース瓶たらいまわしにする飯場　高夫
自己主張しないソースがよく売れる　智加恵
広島でお好みソース買うてくる　信義
脇役を立派に果たしているソース　きみえ
辛口のソースも明日のエネルギー　寿恵子
空腹にソースが臭う屋台の灯　正坊
たっぷりとソースめし屋のコロッケへ　宵明
カレーにもソースたっぷりかける癖　新造
父さんのためにいつもあるソース　恭昌
カラフルなソースで飾る帆立貝　英壬子
セレナーデ聞きつつソースそそぐ皿　三和
グルメ番組ソース決め手というている　みつこ
料理教室習ったソースの味が出ぬ　喬水
特製のソースに妻の味がある　蕗児
手作りのソースが自慢お裾分け　ふさ子
ソースいっぱい育ち盛りの肉料理　典子
画竜点睛シェフのソースが味をたて　ちかし
メインよりソースとシェフの苦労談　良江
かあさんのソースで煮込むお惣菜　はる子
仕上りにかけるソースで味決まる　倫子
下味の下手さをカバーするソース　アサ

ごまかしのじょうずなソースに頼りきり　重人
自分史へソース一滴つけ加え　繁男
ニュースソース秘密守ると聞き上手　明水
特だねのニュースソースに顔がない　隆
姑の口にも合うてきたソース　千歩
孫がいて祖母もソースの味に慣れ　彩子
三世代住んでソース派お醤油派　京子
かくし味ソースにこだわる料理長　橋本孝由
三代の知恵のソースでとんかつ屋　四郎
ソースをかけて陰口を唆す　螢
お造りにソースのような夫婦づれ　抜智
小言いうソースの口を拭いている　高栄
ウスターソース主婦をやめようかと思う　日枝子
ソースかけるだけにも意見食い違う　不二
お好み焼ソースを刷毛で撫でまわし　忠三
佳

たっぷりとソースくぐらす試食品　重人
コック歴やっとソースの味が出来　繁男
出前でのソースは首に紐をつけ　明水
五つ星ソースで決めるシェフの腕　隆
ソースは錨そんな頑固と暮してる　千歩
人

永田町どこを掘っても湧く汚染　彩子
地

チンをしてソースかけたら出来上がり　京子
天

からいソースですこし悪女になりました　橋本孝由
軸

お好み焼わたしの味にするソース

初歩教室

題 ― 水着

吉岡美房

今回の「水着」という題では、ピチピチしたギャルの水着の投句を期待していましたが、投句者の年齢の関係か、水着を着た若い日の思い出とか、若い人達がうらやましいとかいう句、水着ショー、水着売場などの句が殆んどであったのは淋しいことでした。しかし、それはそれなりに愉快な句も多く、また、数少ない現役の句を出来るだけ取り上げるなど楽しく添削と選をさせて頂きました。

それでは添削句から発表します。

自惚れを助長してやる水着きる　孝由
（うぬぼれと自信が闊歩する水着）

古日記水着に熱い傷がある　あき子
（日記から遠い水着が甦る）

着ない儘年ねん小さくなる水着　(秦)正子
（この水着着れた昔もあったのに）

水着着た写真ありますわたしにも　礼子
（水着着たこんな写真の日もあった）

誘惑に勝ってハイレグ諦らめる　幸枝
（ハイレグの水着諦めきれずいる）

張り裂けそうな水着で豊かなる女　静子
（水着から溢れそうなが居て楽し）

カラフルなトドの群かと浜辺見る　暁子
（トドとまで言わぬが恐れ入る水着）

体形が水着姿に拒否をする　(古)和子
（水着からこの体形じゃ拒否される）

焼くための水着汐の香少し嘗め　一乗
（焼くための水着で一寸濡れてみる）

熟年の水着姿がはにかんで　恵美
（熟年のはにかみ妻に見た水着）

豊満な乳房露わにした水着　義男
（豊満な乳房に自信ある水着）

身をさらすしばしのスリル水着きる　行隆
（水着着るまでの恥じらい脱ぎ捨てる）

人生のタルミそのまま水着に出　りつえ
（人生のたるみ隠せぬ水着着る）

M寸の水着夢でなと着るよ　円女
（水着着る勇気がほしいこの暑さ）

水着つけ泳ぎ下手でも得意そう　(加)正雄
（泳げない分を水着でカバーする）

こっそりと買った水着を風呂で着る　志重
（こっそりと買って風呂場で着る水着）

夏だけの水着に愛を訴える　忠男
（水着買う今年の夏に賭ける恋）

水着つけも一度彼と泳ぎたい　嘉子
（水着つけ彼と泳いだ夢を見る）

水着きて心の奥は恋の火か　美寿子
（恋の夏彼に見せたい水着買う）

誘われるままにハイレグ買うて来る　康子
（張り合って買ったハイレグ着ないまま）

水着になって痩せた体が恥ずかしい　侑里
（痩せている方が水着は恥ずかしい）

若かりし妻の水着がなつかしい　あきら
（水着着た妻の写真は若かった）

若い日の水着出番を待っている　恭子
（若い日の水着出番のないままに）

遠い日の潮騒恋し古水着　みつこ
（遠い日の潮騒恋しがる水着）

半袖の水着タンスにかくす母　杏村
（かくしてる母青春の日の水着）

ハワイツアー金婚の父母水着持ち　ひろ子
（金婚の父母もハワイへ水着持ち）

ハワイから帰った母さん水着を買うて　秀香
（ハワイでは着たよと水着買って来る）

泳げないけれど水着は持って行く　義
（泳げない水着も入れてハネムーン）

見た側がうら恥ずかしいTバック　(直)幸子
（見る方が恥ずかしそうなTバッグ）

この夏の水着どこまでVカット　はる子
（限界と思う水着のVカット）

カラフルな水着濡らさぬ陽やけ止め　ツ　ネ
（カラフルな水着濡らさぬまま帰る）
大胆な水着に親はしかめつら　修　光
（大胆な水着が親を悩ませる）
曲線美若さの水着うっとりと　トミエ
（うっとりと水着の若さ追って見る）
カラフルな水着の花が咲く浜辺　志華子
（目の届く限り水着の花が咲く）
泳げない水着はしゃいで派手なこと　芳　水
（泳げない水着とわかるはしゃぎよう）
うっかりと水着で部屋を間違える　ひでの
（よく似てた水着で彼女見失う）
夏休み水着の展示二度三度　春　風
（夏休みとって水着を見せに行く）
泳ぎより水着のおしゃれ華美極む　姫　女
（泳ぎより水着のおしゃれ競い合い）
ギャル達の水着姿の露天風呂　美智子
（露天風呂水着のギャルに占拠され）
露天風呂水着をつけて入ってる　節　子
（露天風呂なんで水着を着て入る）
露天風呂水着姿が味を消し　美恵子
（露天風呂情緒乱して入る水着）
ミスコンの水着に羞恥心は無い　彩　子
（コンテスト水着に羞恥心が無い）
先取りしいつも真冬の水着ショー　君　枝
（水着ショー真冬に夏を期待する）
デパートの水着売場で目が迷う　金　吾
（とまどいは水着売場に僕が居た）
水着買う話が夏を引き寄せる　高　栄
（水着買う心は夏にとんでいる）
マネキンがもうそこまでという水着　隆
（マネキンが水着の夏を引き寄せる）
ショーウインドーの水着縁なく通りすぎ　義　子
（縁のない水着売り場で夢を見る）
マネキンもハイレグ姿目を伏せる　幸　枝
（ハイレグのマネキンにさえ途惑いぬ）
次は何ビキニハイレグ露出好き　き　ぬ
（ビキニからハイレグ次を期待する）
潮焼けの男六尺よく似合い　あづま
（六尺は男の華という水着）
三歳児水着はいらぬ水遊び　三　重
（水着など要らない孫の水遊び）
忘れない感動の水着バルセロナ　黎之助
（感動の水着に沸いたバルセロナ）
おじいちゃん水着のパンツイキな事　タ　ミ
（昭和一桁祖父の水着にある元気）
だだっ子も水着になるとびはねる　辰　男
（だだっ子の水着にまたも逃げられる）
去年着た水着小さくなった孫　ふさ子
（輝きを孫の水着に見た若さ）
買って来た水着父さんには見せぬ　芳　郎
（思春期は父には見せぬ水着買う）
嫁入りの衣装に水着揃えてる　たもつ
（嫁入りの衣装に水着しのばせる）
七月は凡て水着のカレンダー　幸　子
（七月の部屋は水着のカレンダー）

着想・表現ともに立派な句

水着着て泳げるうちが花かしら　よしみ
見てほしい人がいるから着る水着　ますみ
嫁ぐ娘にペアの水着を買わされる　君　江
マネキンと同じ水着でこの落差　絢　子
水着ショー　タイやヒラメに酔っている　㊐和　子
家中を閉めて独りの水着ショー　章　子
ファッションの水着を競う水中花　友　熙
初恋も水着も二度と戻らない　あき子
おそるべき水着が歩くサングラス　三　重
超ビキニ我が娘を叱り他人褒め　あきら
青春がこぼれ出ている超ビキニ　みつこ
ヌードより水着の方に見た魅力　美智子
水着着るために我慢をしたケーキ　㊇和　子
アルバムの水着に秘めた青春譜　康　子

私の句

カラフルな水着雑談ばかりする
雪月花　水着で翔べる夏も好き

◇

題「呼　ぶ」―8月15日締切（10月号発表）
宛先　〒583　藤井寺市道明寺2丁目11―4
吉　岡　美　房

エッセー

男とおとこ

土橋　螢

昭和六十年三月、鹿野町役場を退職し、名刺がわりに『私の四季』という俳句選集を出版して、俳句から川柳に身の置きどころ、こころの拠りどころを求めた。NHK学園の川柳に入門し、『川柳塔』への投句を続けて、川柳らしい作品がやっと作れるようになった昭和六十一年度のNHK作品コンクールに次の句を応募した。

雪達磨春を迎えに行ったきり

「特選第一席に選ばれた」と、橘高薫風先生からお電話をいただいた。NHK学園の大木俊秀さんがわざわざ鹿野までインタビューにお出でになる。大変なことである。小林由多香鳥取県川柳作家協会長、小倉鹿野町長ともに喜んでいただき、インタビューを済ませました。その後、薫風先生から北海道産のガラス細工の雪達磨と雪三題の短冊を頂戴いたしました。

風花す雪子が髪を梳くらしく　　薫風
美しいものに雪置く美しさ　　〃
牡丹雪ゆっくり俺が昇天す　　〃

感激してうれし涙を拭いた若輩土橋螢の初陣の物語でございます。生涯忘れることのできない川柳の絆、薫風先生との出会いです。その後、米子きゃらぼく忘年句会で薫風先生にお目にかかり、その時も私の句

高い樹にとまったことがない燕

が薫風先生選の三才に選ばれました。公務員として三十五年、その間、固い壁の中で嚙った俳句、書道の世界では、こんな晴れやかな師との出会いはありませんでした。昭和六十三年秋には、伝統工芸品の熊野筆特注、しかも一螢用筆の刻印のある二本組を薫風先生から送っていただきました。こんなに贔屓にしていただいたら罰があたると自分を疑うほど感激しました。そして、「男は黙ってついてこい」、五・七・五を詠むんだ。薫風先生とごあいさつしても恐れ多くて、目と目が会って頭がさがるだけです。

そしてこの四月下旬、鎌足桜の絵葉書が届き、「先日、野口初枝さんが、日川協の営任幹事会に来阪されましたが、『雪だるま』の句を思い出したり、いつも私との共選が多いので不思議ね、と言っておられた」と薫風先生から達筆で、いつも私を驚かせる出会いをつくってくださいます。恐縮する果報者です。思い出していただける師弟愛に溺れることなく、男の檄と受け止めて五・七・五の川柳をより高め、友をつくり、精進することが恩に報ずることだと信じています。

「当って砕ける、そして砕けるときの音を聞いて帰る」と特攻隊で訓えられた昔話を思い出しながら、「信じきる男らしさ」を薫風先生の教えとして、少しでも男とおとこのご高誼をと願っています。生涯忘れることはない出会いをいただいた一匹の螢の果報を無にすることなく、残り少ないいのちと男の生きざまに、五・七・五の川柳を織りこんでゆきます。誰も味わったことのない男らしい男とおとこの出会いを「薫風先生と螢」、大それた失礼をお許しください。

いま川柳塔鹿野みか月の仲間五十三人と川柳の輪をひろげ、お互いの絆を大切にして「貶すことより尊ぶ」ことにつとめています。そんな男とおとこ、女とおんな、男と女の輪が五・七・五のリズムにのって、鹿野からひろがってゆくことを喜んでいます。

全日本川柳愛媛大会に参加して

田中正坊

第十七回全日本川柳愛媛大会が六月十三日愛媛県民文化会館で開かれ、川柳塔社から西尾栞主幹、橘高薫風理事長ら多数が参加した。

前日の十二日、日川協常任幹事会と前夜祭が行われるため、野村太茂津・川島諷云児氏と私は全日空機で同日午後、松山市に到着、宿舎の全日空ホテルに入った。会議まで時間があるので、リフトで松山城に〝登城〟、姫路城・和歌山城と並ぶ連立平山城の重要文化財指定の天守閣など城内を散策、帰路は史跡庭園として整備された二之丸跡を見学した。

前夜祭は午後七時から全日空ホテル万葉の間で開かれ、月原宵明大会実行委員長の歓迎のことば、仲川たけし全日本川柳協会会長のあいさつ、来賓祝辞があり、地元川柳家による川柳朗詠の後、祝宴に入った。宴席では全国から参加した同人・誌友や各柳社の人たちと酌み交わし、この間、前田伍健が創始したといわれる野球拳がアトラクションとして披露されるなど、和やかな交流が行われた。

十三日はホテルから伊予鉄道のチンチン電車で大会場の愛媛県民文化会館に向かった。午前十時からの日川協総会に出席後、会場の真珠の間に入ったが、舞台正面には新しく制定された若草色の地に会章を白く染めぬいた大会旗が掲げられ、さすがの広い会場も昨年の記録を更新した八〇五人の参加者によって埋めつくされるという大盛会となった。

出句が締め切られた午後零時半から開会式が行われ、大会連続出席十回の九名を表彰、内田弘保文化庁長官、伊賀貞雪愛媛県知事、岡田己宣県会議長、田中誠一松山市長がそれぞれ祝辞を述べ、午後一時半からいよいよ入選句の発表に入った。

初めに事前投句の三課題が披講されたが、今回の事前投句者は一、六一八人で、出席者を合計すると二、四〇〇人を上回るというこれまた新記録となり、当日課題入選句披講の第二部との間に内田文化庁長官が「文化と伝統」と題して講演、アトラクションとして伝統芸能〝伊予万才〟が上演された。

さて披講では、入選・全没など悲喜こもごもの大会風景が展開され、七課題各二名の入選句は本誌七月号（一〇五頁）に速報したとおりだが、同人の川島諷云児氏（高槻市）、誌友の大橋政良氏（砂川市）、川見絹子さん（大阪市）が特選に選ばれ、大会賞の賞状と賞杯が授与されて拍手を浴びた。

最後に大会旗の引継ぎがあり、次期開催地の群馬大会実行委員長のあいさつの後、万歳を三唱して閉会したが、午後からぐずつきだした天候は、同日夜、大阪空港に到着した時は土砂降りの雨となっていた。

原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月**25日**締切・30句以内厳守。二百字詰
原稿用紙に清記をお願いします。**編集部**

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

ぬくもりがまだあるうちに手を打とう　弘子
遺言の声がビデオにとってある　隆風
あの人のぬくもりがいま邪魔になる　公子
ぬくもりを従え見舞う足の音　正恵
ぬくもりに触れた両手が濡れている　公弘
私の涙を梅雨が連れてきた　盛桜
神さまの前で白だと言えますか　銀嶺
お隣の猫に噛まれた鯉のぼり　はるお
花も嵐も踏み越えている八十路　喜与志
辿り来てながき道のり風薫る　明美
次々に悩みができて呆けられず　幸枝
汽笛一声極楽行きだ早よお出で　富恵
正直に痛いところを孫がつく　一京
娘に送る便りに母のぬくもりを　八重子
愚痴捨てた窓からぬくい陽が覗く　三千代
ぬくもりとやさしさもらう老いの坂　智恵子
アイロンのぬくもり今日も雨なのか　かつ乃
自我折ればみんなぬくもりくれている　くに子
晴れ二日梅雨にも五日制がある　節子
ゆっくりと父のぬくもり消えてゆく　みさ子
名水を流す動脈が裏切る　実満
動脈の穴ボロ切れで止めておく　孔美子
それぞれを努め動脈小波する　諷人
動脈がいつも渋滞して困る　和子
滝壺に南無観世音充ちている　しげる
いさぎよく落ち行く滝の心にて　汲香
鷺も疲れたらしい声とぎれ　信江
古里の声が聞こえる森へ行く　睦子
大声で笑って腹が減ってきた　きみ子
雲が来て六月の声かけて走る　螢

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

軽口を叩いて空気和ませる　二南
ループタイさげて男が軽くなる　正坊
風船の軽さで地下街を歩く　薫
軽はずみ諭す地蔵の風車　澄子
据膳に箸もつけない一途者　勇次郎
がらくたの中で命を惜しんでいる　年代
転職を惜しんでくれる好敵手　紫香
口だけは惜しい惜しいと言ってくれ　ミサ子
希望退職惜しい人から辞めてゆく　渉
沖縄の踊りに合わす口じゃびせん　正子
救世観音その口許に謎がある　萬的
花菖蒲雨が湿気を持って来る　〆女
浸水にめげず生き抜く強い葦　まさお
湿気たせんべい趣味の無い熟年　キク子
ほどほどの湿気が欲しい喉仏　芳子
塩壺の湿気は妻の守備範囲　鹿太
根回しの根にも湿気の要る世相　正一
除湿機に吸い込ませたい妻の愚痴　園歩
神田川三畳一間に雨が漏る　伊三郎
湿気には弱い女の裏表紙　歌子
神様の声が湿っている不安　武庫坊
金の要る話でいつも雨期になる　鬼遊
タンポポもコスモスも咲く畦の道　一笛
漬け茄子の色を自慢のおばあさん　フク子
嫁入りをしてもやっぱり左利き　真柳
戒名に入れる字ぼちぼち考える　杜的
同情され口惜しさだけが残る日日　吉太郎
散る日まで女でいたい紅の彩　英子
下積みの汗を知ってるナッパ服　福一
会う度に自慢話を聞かされる　尚利

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

約束があると女は断わる弁　彰一
五十払い約手でよいと頼み込み　春風
人形の顔で涙は封じ込め　かおり
庭の草私の怠慢だけのびる　ひかり
残り火が尽きてボツボツぼけてくる　明人
すき間風悪い噂が吹いてくる　東雲
きっちりとけじめをつけるお人柄　志女
太棹が響くと人形生きてくる　英子
秘めごとが胸の鼓動に灯をつける　稲子
親のエゴ着せかえ人形ままならず　静江
ふれ合って人の情けの灯が温い　瀧小

人形に慰められたと自分史に　節子
弱音はくわたしを叱る仏間の灯　スミ子
約束を破って犬に吠えられる　波留吉
すぐに泣く人形だから捨てられず　芳子
約束が違う怒っている受話器　庸佑
素晴らしい夜景にきみの灯もひとつ　薫
ハンカチの折り目に妻の愛がある　英一
大阪の灯がみえて来た帰省の夜　茶の子
人形を相方にする芸達者　〆女
約束をきっちり守る花時計　求芽
句読点なしで小言がまだつづく　しげお
つまずいた石に答えが書いてある　武庫坊
我が過去をぼんやり映す走馬灯　正坊
言い負けてわら人形は灰になる　杜的
仏さん拝めぬ程に目が痛む　萬的
停止線にきっちり止まる盲導犬　太茂津
灯を点しつづけて悔いを繰り返す　白溪子
雨の日の約束向かい合う喫茶　紫香
お地蔵と長い話をしてる祖母　諷云児
灯を消して今日の一日追うてみる

川柳ささやま社　平野百合子報

それは歌父よあなたは強かった　恵美
子守唄たんとしみてる母の膝　純子
紺碧の海にかなしい涙あり　とよ子
童謡を唄うと過去が回り出す　つや子
母と泣き母と笑える唄ごよみ　とみ子
うぬぼれて自画像赤が多くなる　靖子
移る世へ絆は枯れず夫婦著　テル
うぬぼれのひとりへ堪えている赤字　百合子
うぬぼれた女が覗くコンパクト　市三
うぬぼれをお腹の虫に叱られる　ヒサ子
うぬぼれて階段一つ踏みはずす　和子
赤い糸手繰ると春の歌になる　芳郎
肩組めば骨がギシギシ鳴る軍歌　可住

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

磨いても受ける器が故郷に無い　花子
神からの磨けば光る石をだく　富美子
それなりに磨けば光る石の顔　千春
磨いても光らぬ私もて余す　高代
面かくしとって昔を磨き出す　晶子
靴を磨いて足許わきまえる　恵子
デリケートで磨くと毀れそうな壺　瑞枝
嫁さんが来る台所磨かねば　天雀
いぶし銀磨いて父に叱られた　保子
運勢を磨き通して負けはせぬ　亜弥
ガツンと割れた壺の一部を磨いている　夕子
悪友が磨いてくれる面の裏　荒介
こげつきを磨いて鍋に口止めす　寿々子
研磨機に出会ってからのダイヤ粒　ふみ
足音を消さんと足の裏磨く　松子
疑わず鍋を毎日磨いている　日枝子
磨いても磨いても卒業はない　八重子
磨きすぎぬ程度に踊り場を磨く　千代
風まかせ砂がやさしい絵をかいた　ゆき
明日の絵に預けるものがたんとある　玲子
さあおいで大きく描こう夕陽の絵　てい子

川柳化粧櫓　植村客遊子報

字引から知恵を拝借する祝辞　岳詩
女道男の知らぬ曲がり角　朱玉
炎えた日の余情くすぶる火消壺　サワ子
ふる里の温みがわかる橋渡る　秋信
お中日達者な足で古希の坂　礎石
角のない鬼と出会った繁華街　葉香
財産がないので遺書はいりません　拓味
金で済むと軽く言うてるのは他人　悲子
誘惑に負ける廊下が明るすぎ　客遊子
忍と苦で稼ぐ地下足袋日日の糧　三青
一品の料理へ旅の話題増え　奮水
老大で初心と裏腹仕事増え　松峰

佳句地十選（7月号から）

原　さよ子

母さんと内緒話をする頬っぺ　美智子
米作りハンドル重い耕耘機　勝美
足音がひとつになっている夫婦　保州
社のピンチ私の椅子がゆれている　花梢
政界のボス　カネの亡者になりはてて　水客
通り抜け偽札犯も通り抜け　薫風
ママの名はてつきり「オイ」と思ってた　たかし
進化して心をどこかにおきわすれ　政己
信心の母に迷いの隙がない　半銭
着てみたい色が溢れて街は春　諷云児

鬼も蛇も衣につつんで丸く生き　てる代
孫去んで連休すんでお茶をのむ　美音子
固い掌で社交ダンスを頑張って　寅
にせ札を機械まるのみ目がつかれ　たまえ
古都奈良の桜花変らず咲きほこり　寿美
今年また息子悩ます連休日　光峰
筍の皮へ戦後を想い出す　保水
富める国金ばらまいて文句聞き　美峰

城北川柳会　吐田公一報

若い者から相談されぬ寂しさよ　千世子
大根の味奢れる舌にほろ苦し　春蘭
相談をするじゃなかった案の定　秀夫
古雛を飾って心温かし　寿美礼
客筋のちがい創業二〇〇年　史風
この話損と知っても断れず　久留美
損をして儲ける浪速の土根性　一枝
そわそわすなと言ってる声がふるえてる　頂留子
澄んだ目で嫁して行く娘の影を追い　昭子
目の高さ変えて率直な風を呼ぶ　達子
もう少し生きていたいというカルテ　柳影
ささやかな義理の衣が脱ぎきれぬ　ただし
何かよいことがありそう春だから　ふみ
老親看取る相談なかなか纏まらず　倫子
相談も恥ずかしながら色ざんげ　八重子
末娘とつがせ春の日の長く　あい子
そわそわへ時計の針は無表情　典子
損益が吃水線に浮き沈み　白峰
易の灯へ相談に来た母と娘　静子
相談に行って泣きごと聞いてくる　満津子
そわそわと娘来る日は豆を煮る　登美子
住所録また一行消すクラス会　政子
相談へ父は無口の太っ腹　公一

いずも川柳会　吉岡きみえ報

橋渡り切って野良猫振り返る　ノブ
二十一世紀へ渡る身構えだけはする　明朗
結論は橋を渡ってから決める　正朗
風渡る海の広さに人許す　多賀子
さかしらの如くに春の風渡る　青湖
ありもせぬ財布はたいておごる癖　花子
揉み手する癖が誰かによう似てる　早苗
昂ぶるとつい口癖が多くなる　まこと
胸の中さらけて見せる損な癖　佳子
使いようで切れた一癖ある鋏　寿美
辛抱の心へ西陽強すぎる　義良
どん底に落ちて辛抱身につける　水煙
ぎりぎりの辛抱やっと陽が当る　芙佐子
辛抱を重ねた積木子が崩し　祥庵
辛抱は笑顔の中に老いのみち　芳子
満開の桜は孫とおない年　美磯
追想は亡師囲んだ花の句座　房子
追想のどの頁にも父の詩　文子
過去はみんなきれいで年をとりました　草丘
ガーベラが咲き追想は果てしない　一葉
追想がまた深くなる花吹雪　叮紅
追想に去年の桜ふりしきる　章峰
友情の叱咤に心入れかえる　㈱秀子
友情の中でポッポと鳩が鳴く　きみえ
友情が死線を越えて生きている　蘭水
友達の席を隣に空けておく　律子
友情の握手が堅い連結機　鳳笙
友情に甘えが過ぎた日の悔悟　れいじ
泥かぶる時に友情かけつける　満江
友情が憎まれ役を買うて出る　代仕男

川柳クラブわたの花　宮崎シマ子報

世話焼きが仲裁の策練っている　シマ子
京都弁新茶の香りに味を添え　友甫
噂の火つけて回った赤い口　美津留
口車のって妻から叱られる　トシエ
口さがない世間をよそに旅の空　春子
中高年時局の波に会う我が子　道子
お経読む口で小言もついて出る　初子
処世術口が大半占めている　泰成
周波数合わせて丸く三世代　ますみ
寝たきりへ木の芽の香る味噌を練る　君江
仏前も新茶が匂う朝の膳　弘直
大口を叩いた髭を剃り落す　幸枝
くちびるに触れる歯医者の手の憎さ　千枝子
よもぎ摘み餡を練る祖母いそいそと　暁子
練りに練った筋書きけなし合う会議　正子
鯉のぼりほどの口あけ五月風　明子
口止めを孫に忘れていたうかつ　みき子
心地好いセールスマンの口車　剛治
婆ちゃんと孫の口止めすぐにばれ　花子
練る程にむずかしくなるこの世なり　俊子

うるさいがそばにいないと物たりん　喜美子
真相をねたにするのは口封じ　龍　隆
真相に近いと売れる芸能誌　拓　生
妻になるまで控え目な口でした　一　風
無口だが父の背中は温かい　英　一
それごらん口を酸っぱく言うたはず　鬼　遊
お喋りも食べているのでおとなしい

川柳塔おっぱこ吟社　木村　明人報

向かい合う椅子に眼があり口があり　迷観子
もう一寸馬鹿でよかった女房どの　放　任
小企業椅子温める暇がない　かおり
脇役の似合う女であたたかい　マツエ
男花見事に咲かす妻の愛　白柳子
サングラス掛けて世間を軽く見る　よしみ
七人の敵を支えてくれた椅子　マサエ
好物と言えばまたまた膳の上　くに子
救急車天下御免の顔でゆく　ひかり
さわやかな人間くさい味に生き　チカエ
老いるとは五体ガタガタ知る年輪　伽名子
浜風の吹き抜けてゆく川柳碑　明　人
広い世界大きく泳げと鯉のぼり　ふ　み
お人好し何時も儲けにならぬ椅子　吟　笑
面影をただ何となく思い出し　タカエ
孫と居るおかげ今夜もよく眠れ　スミエ
明暗を分けて闘う格闘技　文　仙
校長室フワフワソファーがうらやまし　小6なみ子
洗ってもなかなか落ちぬ古い傷　迷　貫
人生の旅路は何時も坂ばかり　正　雪
汽車の旅忘れた人を思い出す　いさむ
ロゲンカしても実家が遠すぎる　登美代

サークル檸檬　小林　一夫報

光さしけり小さきものの足跡に　一　夫
藁摑みながら沈んで行きました　喜美子
出世する人は自分を知っている　智恵子
ベテランに釘も安心して打たれ　いわゑ
寄り道をして七色の影を持つ　みつ子
ガム噛んで言いたいことは引っこめる　楓　楽
ゆらりゆらりとむらさき揺れて物忘れ　千　代
これはわたしの手毬だと言い切ろう　智　子
遠花火ふいに献体など思う　幸
君の心臓ひょっと檸檬の色かたち　薫　風
あやかってレモンイエロー着る女　正　坊
理想論レモンかじっているゆとり　慶　子
滴ってショパンの曲となるレモン　あずき
搾り切るれもんあわれや愛の脆さは　薫
レモン輪切り女の敵は女なり　希久子

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

三世帯同居の独楽がよく回り　甫　正
心ない風が噂をまた配る　きくゑ
いつまでも知って下さる手が温い　吟　平
親展につば呑み込んで封を切る　志　重
捨てる神拾う神あり古希の坂　伊久栄
達筆の返書に戸惑う友の文　秀　香
筆書きは妻に任せた硯箱　すみれ
浅すぎてまだ湯が出て来ぬボーリング　邦　人
帳付けの何時もちびてた亡父の筆　久　栄
筆ペンを買って悪筆持て余し　半　仙
庭染めて花の踊り子あかず見せ　美恵子
久しぶり降れば百姓雨をほめ　賛　平

岸和田川柳会　田中　文時報

ひと桁生まれ親に従い子にまでも　文　時
猫背のまま僕に従う影法師　萬　的
サーカスが来て活気づく過疎の村　甚　一
ホステスがせつない心打明ける　東　雲
お互いにせつなさかかえる胸の内　朝　一
説得をせつなく聞いている訣れ　ひ　で
万葉仮名せつなさ秘めた歌碑にあう　さよ子
乳房張る海女の切ない磯笛よ　浪速子
天高くせつない程に空が澄み　勝　晴
せつなさを姑が一番汲んでくれ　柳宏子
契約を即きめる人粘る人　昭　二
辞令出て即日赴任させられる　通　彦
せっかちな部長即答待ってはる　月　子
即日完売そんな時代もあった家　白光子
厚かましい涼しい顔して嘘をつく　京
レモンかじるとても涼しい眼の女　一　弥
身に覚え無くて涼しい顔をする　二　南
涼しくて困っております海水着　狸　村
風鈴の音も嬉しい涼をくれ　甘　平

川柳後楽吟社　従野　健一報

外面のようにはゆかぬ漫才師　草　風
片足を半分入れて黙秘する　博　友

諸行無常心が白くなってくる　哲郎
前うしろとなりの吠える犬に耐え　柳五郎
再職で初心にかえる雑魚になり　桃風
黙考と沈思で暮れる曲り角　たけ志
うわさするくしゃみそれとも花粉症　青銅
戦いが終り足元冷えてゆく　拓治
行き悩み柔軟体操こころみる　美智子
闘いを忘れ汽笛に彩がない　道博
不甲斐ない薬に頼る日が暮れる　金吾
ひとつでも生きたあかしの句を思い　吟平
足腰の衰え見せぬ切られ役　正秀
障害者に教えられたり車椅子　邦季
古希近くゲートボールに歩く会　佐加恵
欲はないただ健康の二字がほし　玉水
営業所一人で所長という名刺　照路

岩美川柳会　羽津川公乃報

癌告知反省したり悩んだり　孝由
彼に出会い胸に青空広がった　美代子
神様と固い約束した出会い　照女
峠の茶屋で懐かしいひとと会う　喜与志
寡婦の部屋三面鏡は閉じたまま　希久代
顕微鏡覗きミクロの罪ほじり　善幸
鏡から今日の戦の貌貰う　單車
生きざまを写す鏡を磨きこむ　公乃
パトカーがバックミラーに現れた　螢
庭石の鏡に恥をかかせるな　はるお
鏡などいらぬ手櫛の朝支度　嘉津江
磨かれた鏡女を意識する　睦子
心まで映る鏡で怖くなり　芳江
アリバイのない手鏡をうらがえす　公弘
十字路の鏡で道をたしかめる　きみ子
ノーメイク鏡へ素肌褒められる　美恵子
等身大の鏡に心許さない　大漁
七光りの鏡背負ってくたびれる　忠良

三幸川柳教室　三宅保州報

うっかりと受けて登った針の山　初子
うっかり者と名乗る素顔にそつがない　みね
うっかりと本音あなたを傷つける　靖子
言い訳の癖がうっかり出て困る　章子
うっかりと他人の船で踊らされ　(上)幸子
秘すれば花うっかり心のぞかせぬ　朱夏
人間の仮面を脱げば楽になる　当代
煩悩があって人間らしい日々　恵美
人間の中にも出世魚が居る　正雄
人間の仮面の下に鬼が住む　美智子
人間の顔が厳しくなる砂漠　桂香
神ならぬ人間ひとを裁けるか　信子
頭打ちながら人間丸くなり　高夫
順不同だから平気で生きている　保州
バブル消え平気で居れぬ肩叩き　よし子
栄転と左遷平気なはずがない　悟
馬鹿になることも一つの処世術　町子
吊り橋も平気で走る里育ち　三千子
他人の目は平気私の彩を着る　千枝子
朝刊も開かぬままに夜が来て　公子
山開く忽ち変る団地の絵　美子
花嫁の父親泣いてお開きに　さち子
願いごと仏陀も迷う御開帳　親踐
算術の方が長けてる開業医　孝子
鰺の開きまたかと夫ふくれ面　鉄治
じいちゃんを饒舌にする開墾史　かなめ
風の道右脳の隅開けておく　千秀
預金帳開き命の話など　和子
白無垢の誓いさくらは満開に　百合子
　　茜

川柳東大阪　森下愛論報

花馬酔木石に仏が彫ってある　作二郎
不断桜も染井吉野も炎抱く　元紀
人の世も季節も変わる花ごよみ　度
紅花を摘む日やさしい風になる　湖風
素うどんを一現さんが褒めて去に　頂留子
猫舌の私にうどん長すぎる　雀踊子
大阪に讃岐うどんが根を下ろし　柳宏子
うどんすきどこにも寄らず父帰る　隆
きつね七銭古い話で笑われる　太一
肩書が取れてニュースにならぬ人　章久
バーゲンのニュース女の業を見る　晋吾
学校のニュースいじめの背が写る　真柳
千変万化女の襟にある文化　文秋
正す襟ない政治家の金バッジ　勝美
人形の襟足白く冷たすぎ　愛論
業績不振襟元だんだん寒くなる　恭昌
詰襟の釦をちぎった青い恋　猪太郎
詰襟に両親の期待を背負わされ　高尚

ほたる川柳同好会　井上　直次報

見舞客土筆を摘んで来てくれる　薫風
お見舞に早よ行こ退院してしまう　英子
お見舞がだんだん減って来たカルテ　明光
奥さんが見舞いにくるとひどい咳　博史
羽根ぶとんさえ重そうな友見舞う　吉太郎
見舞客椅子取りごっこ誰か立ち　馬洗
見舞客同士無沙汰を詫びている　方郎
病む友を見舞った帰りの炉端焼　一笛
健やかで見舞にゆける有難さ　純次
川柳を暑中見舞いに一句添え　しずえ
コキュにした相手と知らず見舞われて　光
秋時雨別れの時と同じ音　眞郎
古傷に沁みこんでくる今朝の雨　喜美子
いっそう緑いのちを洗う雨のあと　幸子
雨の日はマップ広げて一人旅　昭子
ご慶祝家事洗濯も休みです　保子
全力で守ると殿下しびれさせ　直次

南大阪川柳会　金井　文秋報

ネジを巻いても動かないお猿　智子
目玉クルクル何かを狙うカメレオン　萬的
薔薇垣のあたりで蜂に狙われる　作二郎
責任を認め小さい謝罪記事　信治
手触りに母の乳房が二つある　雀踊子
狙われるはずもないのに夜道を走る　冬葉
老いさびし弱視難聴総入歯　文秋
欠陥品並べたようなピカソの絵　秋子
手触りは木綿気さくな嫁が来る　直子
手触りの良さやっぱりと言う値札　恒明
責任感つよくはないよ昼の月　千里
あいまいに笑い責任はぐらかす　楓楽
テストハンマー欠陥一つ見逃さず　勝美
援助金だんだん当り前になり　柳宏子
なけなしをはたいて母からの援助　寿美
責任感強い寡黙が頼母しい　柳伸
陽炎に揺れる手触り見透かせぬ　真柳
札束の手触り頬ずりしたくなる　度
ブランドの手触りに眼が酔うている　悟郎
責任をとって長屋に移り住む　憲太郎
責任を果たしてほっとうまい酒　庸佑
痩せこけたあの目あの顔待つ援助　章久
狙うのが宝くじとは平和だな　潔
本能寺彼の狙いは別らしい　頂留子
外人の助っ人頼むプロ野球　岩信
大自然美しく子に残したい　トミ子
欠陥が目立つ目と歯と足の萎え　新造
援助だと思い一緒に泣いてやる　文子
援助待つ人には届かない援助　千梢
手触りを楽しんでいる膝の猫　公一

川柳塔まつえ吟社　恒松　町紅報

肩書の癖でネクタイ締めて出る　静江
肩書はないが自由な朝がある　太泡
肩書を捨てると下駄が好きになる　きみ子
置き物のような肩書持っている　雄々
肩書もないが怖いものもなし　螢
肩書のある間に娘嫁がせる　義良
無情なり男盛りを残される　清子
時々は砂漠にひとりひき返す　知恵子
異端者がひとり議長を困らせる　妻子
これもまた縁とか姉はまだひとり　早苗
人間の裏をときどき干すひとり　雀踊子
自販機ととっても仲のよいひとり　たつみ
青空へとても嘘などつけなくて　畔
青空の方が絵になる鯉のぼり　秀子
青空が笑っているので温かい　邦代
夕焼けの明日は青空鎌をとぐ　茂美
青空へ道草をしたランドセル　満江
こだわりはもう捨てました青い空　多賀子
阪神が勝った勝ったと祝酒　鶴丸
就職の子とくみ交わす祝酒　清志
人寄ればとにもかくにも祝酒　登志子
祝酒思わず量が過ぎていた　静恵
父と娘が一番つらい祝酒　与根一
宮参り家族どうしの祝酒　米子
パレードへツアー旅行も募られる　友子
パレードが通る道すじ花植える　みえ
旗のないパレード見てる蟻の群れ　長三
パレードの真ん中にいる赤いバラ　桂子
パレードを見るのに母は着替えする　芳枝
パレードが曲って興奮まださめず　町紅

川柳塔唐津支部　久保　正剣報

爺の膝へ這い寄る孫の初節句　朴竜
石段をのぼればそこが神の門　四郎

我が暮しギターひとつで立てて居る　高明
物指を捨てろ捨てろと腹の虫　幸夫
吊橋で尻込む旦那の手を引いて　タミ
シャツ一枚脱いで天気のすぐ崩れ　實
恵比須さん今日も大漁と祈る朝　旭恒
交叉点また逢う人と逢えぬ人　久仁於
国境もビザも問われぬ渡り鳥　はる子
二十四時では済みそうにない父の日よ　虹汀
かる鴨の行列見る人写す人　紀一
アコヤ貝無理に抱かされ珠みがく　ふさ子
母さんの笑顔まぶたの中に見る　ミチ子
八百長と見せぬ八百長見るのどか　ちよ
古希過ぎた人と思えぬ背の線　喜久亭
戦争が一番好きな貧乏神　治幸
敗戦忌赤いトマトが溢れ出す　義美
切手の位置誰が決めたか裏に貼る　正剣

川柳岩出　小倉　アサ報

ぽかぽかと杖が相寄る猫柳　忠雄
短気にも合わすパズルを解くおんな　綾子
開発の錦の御旗景色変え　紳一郎
気短が通用しない女将の座　和子
気短も素直にとけ合う夜の酒　春子
気短い男が逃がす福袋　精子
何時からか気短同士丸く生き　昌子
春の絵のひとつへ短気埋めてある　アサ
故里の景色だんだん風化する　愛子
気短がホームに並ぶ列乱し　千鶴子
気短と気長で暮らす夫婦仲　達子
気短いお方は何時も損をする　英子
古里の景色求めてUターン　保子
気短を気長に待って午前様　正義
気短な気まま出したい時もある　悦男
山の尾根若葉の萌える春の山　正直
借景も値段に入れる分譲地　瑞穂
気短い男が帰ってうまい酒　与呂志

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

季節感なくしたいちご誰の罪　鈴江
みちたりた姿で苺が熟れてきた　かつ子
古里の野苺の山懐かしい　聖子
聞こえすぎ時には耳栓したくなり　好栄
もぎたての苺の艶が滴るよ　ちよえ
達筆の追伸少し棘があり　英子
春がきて苺畠の息づかい　はるみ
ねじを巻き油もさせど昼の月　博利
言い勝った悔みの残るもの別れ　清泉
カラオケへストレスひとまず吐いてきた　白汀

京都塔の会　松川　杜的報

神足と読めないままに駅に着く　江美
このままの平和を願う飛行雲　飛鳥
吟行に幸先のよい虹が立つ　英子
ピカピカのお城に古いロマン秘め　栄
習慣を知り抜かれてる友が居る　三男
麦笛で呼び合う友をもっている　葉子
ふる里の麦茶疎遠を埋めてくれ　英一
軍歴があって麦飯苦にならず　武庫坊
職退いても尻尾振る癖直らない　諷云児
朝食の習慣にした駅うどん　白渓子
習慣の小言が妻の武器らしい　二南
習慣で先にお辞儀をしてしまう　正坊
眼鏡越しで見る習慣の古狸　〆女
習慣か惰性か夫婦手をつなぐ　希久子
習慣の今日一日を疑わず　薫
習慣は恐ろし鼻くそほじる癖　萬的
体のリズムまだ定年を受け入れぬ　美穂
朝刊の休みポストへ来て気づき　紫香
光秀の無念を偲ぶ勝龍寺　太茂津
ウイスキー育てた水で飲む番茶　ただし
武運長久昔語りの千度石　真柳
光秀と同じ家紋で憎めない　ゆみ子
舞う蝶にガラシャ夫人をふと思い　達子
ガラシャ像夫婦の絆かいま見る　芳子
勝龍寺緑の風に城光る　求芽
麦笛の音谺するノスタルジー　静江
麦畑で町が市になる話きく　静子
黙々と掘って世紀の謎を追う　房子
寝る時はお手々つないで休みます　八重子

川柳塔わかやま吟社　宮口　克子報

泥沼を這い出てからの人間味　光代
独身の強さ弱さを繰り返す　アサ
鮎寿しの味がむかえる祭り笛　綾子
突然の一言胸に灯をともす　鉄治
鵜の腹に鮎が届いたことがない　正博
テリトリー守る鮎にもある主張　呑天

釣ったのか釣られたのかオトリ鮎　好笑
お座敷へ跳び出しそうな軸の鮎　紀久子
飴だきの鮎が四季無い日に備え　千寿子
ある日突然夫婦茶碗がひび割れる　射月芳
突然が重なり合った吉と凶　勝
突然の出合いへ揺れるイヤリング　稚代
煩悩が突然噴火して困る　恵美
突然の事故を捕えたカメラアイ　信子
初恋の人がひとりという便り　和成
独身貴族へ業を煮やしている卑弥呼　公子
まだ独りひとつの山を越えられず　寿子
高僧が捏ねて生れた泥仏　忠
泥沼に転んでからの身が錆びる　豊太
ふるさとに泥を流せる母と川　佐代子
泥の舟一緒に乗って揺れている　紀美女
田の泥も知らず減反決められる　英子
泥沼に育ち仏の花となる　登志代
しなやかな指に男も鮎も骨抜かれ　克子

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

蓋開けて見れば変らぬ首脳陣　光子
開ける時ときめきがありプレゼント　慶子
心眼を開き仏と対話する　清芳
開かれたベールの奥に踊る影　弘直
旅の宿眠れぬままに鳥の声　千枝子
いにしえを偲ぶよすがの王仁の道　英一
満月に月下美人の気持きく　香住
手術室待つ身は祈るただ祈る　あずき
妻に教えてやれることありいい気持　シマ子
牽制球投げて気持をたしかめる　田実子
君の顔見てると罪な気持湧く　欣史子
つもり貯金気持を豊かにしてくれる　暁子
亡妻がまだ家に居る気の三回忌　留吉
その気持わかるわかるとけしかける　洋

西宮北口川柳会　丸山よし津報

白壁の町に今年も来たつばめ　英子
因習の壁乗り越えた真珠婚　園歩
寂しくてピンクのバラを活けている　江美
母を拭くピンクのタオルあったかい　哲子
ピンク着た母の背筋が伸びている　富喜子
社会的地位が邪魔する私生活　涼子
社会面の話さかなに縄のれん　武庫坊
賞罰なし社会に添って生きている　能子
我慢することも覚えた社会人　白渓子
社会からひとりにかえる鍵をかけ　宣子
隅に居るから社会の動きよく見える　ひろ子
秘宝展しばし社会と遠ざかる　きよ子
古代史にも社会の醜い傷のあと　萬的
ブランコの順番に見る子の社会　澄子
七転び目に起き上がる弾みつけ　鹿太
仰山な支柱を立てて妻の茄子　春蘭
玄関で疲れた靴が裏返り　透太
花菖蒲別れ話を聞いている　道胤
一日に三べん顔を洗わされ　しげお
キタキツネ道交法を知ってるか　絹子
毎日が「父の日」ですねお父さん　正坊
書き終えた手紙と雨の音を聞く　いわる、
ほのぼのと会話を聞いているビオラ　佐江子
納得がいった煙草の輪の中で　瀧小
パレードが青葉の道を人酔わす　千世子
梅雨空に傘いっぱいのよいデート　正一
たんたんと歩く石ころ蹴りながら　みつ子
回り道月が私を歩かせる　〆女
母の日は一緒に歩いてくれました　てる
歩きつつ聞こうと話乗ってくれ　紫香

倉吉川柳会　渡辺菩句報

紫のふくさに痛み入れておく　(山)康子
悪の種播いて刈り取る鎌が無い　寿朗
街の灯はチャップリンの映画だな　加代子
私とは無縁な位置の大太鼓　京子
手の皺をことしも紫蘇で染めて無事　柳風
紫が似合う美人は人の妻　よしえ
ぬくい灯が御苦労さんと待っている　(小)康子
憎しみを埋めた心へ灯をともす　雄々
紫の制服こころも衣替え　秋草
父が逝き心のあかり消えました　サカエ
種なしの葡萄が出来る注射する　かつみ
音だけで財布ふくれぬ銭太鼓　康志
紫に出逢ってからの物思い　秋女
どの種のなかにも仏さんがいる　石花菜
途中下車心をいやす灯を探す　ゆり子
由緒正しい種ですがいかがです　とみお
紫の好きな割には品がない　完司
でたらめに鼓を打って鬱を消す　和枝
タンポポの種ひきつれて風の旅　御前

ロックの尾崎人の心に灯をともす　独歩

尼崎尾浜川柳会　前田いわお報

蝶ちょうがひらひら花に挨拶す　まさ
ドラマよりクイズ見ているボケ防止　よしゑ
花の香に蝶も酔い舞う麗かさ　末貞一
年金へ招待状が多すぎる　すみ
雑学がやっとクイズで蘇る　勇次郎
夕暮れに騒ぎ立てる竹雀　六浦
生と死の隙間に謎が多すぎる　澄子
孫の出すクイズ真面目に呆けてやる　弘治
冗談がすぎて疎遠の日々を悔い　正治
冗談も本気にしてる律義者　敏之
冗談らしく確かめる赤い糸　夢之助
冗談のきつい男が踏む画鋲　鹿太
冗談の旨い女の遊び好き　歌子
さり気なく冗談言える姑が好き　紫香
通行人Aで台詞のない役者　石舟
子を脇に抱えて走る発車ベル　尚利
妻入院家事の労苦がよく判る　いわお

川柳藤井寺　高田美代子報

うやむやにロシアはしたい北の島　史郎
うやむやへ一矢報いる票がある　智久
前向きという答弁にない決め手　吸江
無愛想な亡父が仏間の額にいる　悦子
無愛想にみせる硬派の片想い　晋
無愛想な型で惚れてるから憎い　与呂志
飯風呂寝るこれだけですかお父さん　淑子
案外に嫌われてない無愛想　トミ子
無愛想な顔いつまでも覚えられ　透太
ノーコメントぶっきらぼうにのたまわく　一屯
無愛想と言われる目鼻口の位置　和子
無愛想なおたやんだから貴重品　美房
潮騒のリズム恋しい貝ボタン　政代
なりそめの一部始終を知るボタン　志洋
おやすみのボタンはひとつはずしとく　寿美子
核に手を置いて平和の夢をみる　和夫
核ボタン黙って押せぬ夏の雲　末一
何気ない飾りボタンの自己主張　たかし
単身赴任ボタン付けまで持ち帰り　三郎
大き目のボタンと遊ぶ淋しがり　森子
聞き流すことも覚えた胸ボタン　美代子
なるほどと火事場の凄さ見せられる　繁男
内向性いつも下座をえらんでる　キミ子
極楽も地獄もあって株相場　敦子
やりくりのミスを不況のせいにする　みのる
いつの日か役に立つ日を待つボタン　昭子
地球から請求された破壊料　修六
ひび割れた皿から過去をのぞかれる　治子
割り算で割れぬ情けを未練とか　寿美

翠洋会　渡部さと美報

新婚のあくびへ飛んで来る皮肉　兼治郎
反省会皮肉たっぷり聞かされる　英一
回り道教えた相手が先に着き　蛙
秘めた恋つつかれ不倫暴れ出し　叡子
眠ってるほっぺをつつく宮参り　千歩
つついたら目を覚ますかも詩ごころ　みつ子
お調子に乗った風船つつかれる　登志子
不景気に職安通い首つなぎ　綾子
受験生ひねもす辞書と首ったけ　絹子
首浮かべハミングしてる露天風呂　拓生
首までをゆっくりつかり雨を聞く　春子
首筋が寒い会社の赤信号　久峰
首の皮一枚残す窓の席　恭昌
この首がかかってますとセールスマン　光子
首をやる言われて見ても考える　東雲
ぬるま湯に首までつからないように　楓楽
首縦に振るまで時間かかりそう　凡子
つっつかれることは書かない申請書　ひろ子
人を待つやさしい首になってくる　希久子
みな太陽の子ダメな子はいない　正坊
太陽と約束があり早寝する　さと美
目もくらむような太陽二日酔い　正雄
人事課の机にぼくの首がある　鬼遊

打吹川柳会　奥谷弘朗報

怒るから猫撫声で答えてやる　孝恵
怒り虫なだめなだめて飯をくう　梅朗
神様もうんざりなさる世の乱れ　銀嶺
大漁のしるし霧笛がかん高い　春帆
発展がバブルの谷に蹴落され　喬水
億の税私も払った夢をみた　秀峰
国よりも僕の発展考える　勝見
相当な怒りだ電話線がゆれた　節子
惜しんでもきれいな海は戻らない　佳女

笑っても怒ってみてもピエロです　美ッ千
怒っても閻魔さんほどこわくない　良二
赤紙の別れ惜しんで行ったきり　よしえ
好い男だが銭惜しむのが傷だ　喜与志
雑草に花が咲いててぬきにくい　玲子
借金は借金花見は花見だ　八太朗
ラストダンスの余熱を惜しむ火消壺　雄々
怒られた昔の話姉とする　よし江
惜しんでいるうちに娘に薹が立つ　幸子
はるかなる思い毛糸を編み直す　たつみ
ふじの咲く頃に彼女と旅へ出る　宗光
怒られることを承知の夜盗虫　とみお
怒ったらしいくるり向き変えちゃった　和枝
惜しい人から惜しい人から攫われる　石花菜
惜しまれた人もやがては土になる　螢
怒られた訳日が落ちてから解る　かつみ
発展の川をさかなが逃げていく　邦俊
昇進に順序があってややこしい　弘朗

はびきの市民川柳会　榎本　吐来報

本棚へ眼鏡出す人外す人　かつみ
目的は寄り道にある万歩計　たけし
せめても父の威厳の大くしゃみ　泰子
嫁ぐ娘に泣き笑いする父と母　キミ子
吊橋へ私が先にと土地の人　繁男
乱雑に見える書道が前衛派　岩信
薫風に団地サイズの鯉のぼり　美代子
ぶつぶつと言うなと言われ又ぶつぶつ　治代
ぶつぶつの相手がほしいひとり者　ハツコ

ぶつぶつをさらい緑の風が過ぎ　みつこ

ぶつぶつが金権政治を追いつめる　敏
良い知恵も出す悲しいが皆無口　志津江
悲しみを乗り越えやっと出た笑顔　昭子
催促の知恵借りに行く飲み仲間　末一
催促の出来ぬ小金が仲を裂き　吐来
催促はないが仏へお茶と花　悦子
得手勝手催促されて鬼と言う　シマ子
愛犬にウインクしている私です　辰子
フランスに鯨がウインクしたのかも　夏秋
親友は傷口そっと避けてくれ　りつえ
マイナスもプラスもあって無二の友　敦子
親友がかばってくれたスキャンダル　昭平
親友がライバルだった青春譜　たかし
親友も妻から見れば飲み仲間　志洋
親友の諫めで落ちた目の鱗　昇
酌み交わすときは親友だったのに　晋
香典の番させられている親友　利武
言い足りぬ世辞桜もう散り始め　美南子
すらすらとお世辞でてきて寂しいね　ダン吉
世辞言わぬ鏡せっせと磨いてる　絢子

富柳会　池森子報

午前さんとなりの犬に吠えられる　二三子
鮮やかな友の裏切り空手形　紅月
周りからおだてられての役をうけ　花子
指の先恋も演じる文楽座　和夫
テレビでは僕のふる里夏祭り　昭水
周辺の変化の中で田植歌　絹子

おとなりと出会い無理した市場かご　昭子
タブーには触れずとなりと行き来する　美代子
表札の文字鮮やかな新世帯　トシエ
手に汗を握るドラマへ宅急便　智久
浦島帰る周辺すっかり様変り　(伊)勇
頼りにはなるがうるさいのも隣　(田)勇
周辺の顔が飛び出す救急車　透太
入院をしたのは隣の犬でした　文次
親しくて隣の医者を信じない　美房
執念の蟻は周辺気にしてず　維久子
お隣へ凄い美人が出入りする　花梢
隣国の選挙で命まで捨てる　柳太
周辺をわたくし彩に染めて春　森子

川柳大阪　高須賀金太報

スポーツ紙ハダカばっかり載せよって　まつお
見栄一つ大風呂敷に包んどく　柳弘
知らんふりしながら嘘をのぞき込む　与呂志
偏屈にされても正論吐き続け　しげお
一日の暦の長さよ無職の日　洛酔
一寸隙見せてやるのも生き上手　雅巣
寝付かれず声の便りを聞く深夜　我勝
矢印を歩きよそ見がしたくなる　希久志
券売機売り上げ伸ばす五月晴れ　比呂志
子の駆ける明日信じる五月晴れ　美津留
スローガン掲げてゴミの山高し　鉄心
権力の脆さを知らぬ掲示板　笑風
公約を掲げた同じ手を汚す　一歩
とりあえず妻に白旗掲げとく　重人

蝸牛世間の風もなんのその　亮太
蝸牛キャンピングカーで一人旅　司
なめくじの裸を噛うかたつむり　本蔭棒
異状なし引き継ぐ時の解放感　川童
紙一枚人事異動の泣き笑い　青道
筋通す妻へ異論の余地がない　金太

川柳塔とっとり　武田　帆雀報

湯上がりのビール五臓にしみわたる　輪多朗
五体にしみる情けが少し漂った　正恵
山緑五月かつおに空財布　揚芝
四捨五入されるといつも捨てられる　圭一郎
五月雨にやさしい声をかけられる　螢
それぞれに役目をもって五指動く　由多香
春眠の頭ぼちぼち始動する　孝由
裃をぼちぼち脱ごう座が温い　黙光
判りながら何故ぼちぼちと騙される　太平
ぼちぼちと印籠を出す時わかる　喬水
腹据えてぼちぼち歩くことにする　しげる
地蔵さんにぼちぼち罪を打ち明ける　静生
農業が面白くなる老後です　多可志
儲からぬ農業だけど大好きだ　侑里
農業はさせないからとお仲人　一枝
農業を政治の旗が振り回す　宗吉
農業を継げと息子に言い出せぬ　粗粒
転作の迷い大豆か大根か　大漁
メーデーの旗を尻目にふとん干す　明美
メーデーに子供の守りを頼まれる　行男
メーデーの列を離れて行く成田　俊路
メーデーの拳でドンが叩けるか　帆雀
メーデーの旗に負けじと鯉のぼり　一京
メーデーの遠くで心遊ばせる　艶子

むらくも句会　藤井　明朗報

縦じわをさすって笑い見る鏡　鶏生
父はもう許してくれている笑顔　正朗
立ち直る薬ひとこと苦かった　芳子
花嫁さんみな最高の美しさ　秀子
母さんにどの娘ももらった笑い顔　文子
不老長寿の薬　妻が買って来た　義良
朗かな友は笑いをまきにくる　一葉
みつめれば澄んでる瞳うつくしい　林蔵
豊かさは甘える世相作り出し　幸夫
美しい想像をする女文字　延子
健康の自慢しながら飲む薬　はる代
笑い声何の話か気にかかる　久仁
控えめで女らしさが美しい　百代
これからは日にち薬という気長　ヤス子
失礼になるから笑いこらえてる　仲子
風邪気味の薬きらいに玉子酒　島子
晩酌が過ぎてリズムにのるいびき　三津江
父と子のスキンシップは風呂の中　幸子
父の巣に戻って来ない子のつばさ　ゆき子
水たまり舗道に飛ばす雨しぶき　藤子
お日柄に合わせ雨もほめられる　美恵女
美しく老いてる女に憧れる　朝子
生きている証か爪がよく伸びる　昭子
美しい花にときどき刺されてる　明朗

尼崎小園川柳会　立谷勇次郎報

梅雨入りに張り切り出した庭の草　夢之助
雨に舞うサッカーボール男の香　弘治
出直せと雨はなめに降りしきる　十四郎
雨に打たれて道頓堀の灯が濁る　鹿太
紫陽花のブルーの彩は雨の色　尚利
顔出しただけで安心してくれる　紫香
野仏の鼻の落ちてる顔がある　六浦
冤罪が晴れて柔和な顔になる　歌子
人生の足跡かたる顔のしわ　フクヨ
顔かお顔十人十色もっている　洋子
帯解いてうたかたの恋夢みてる　幸代
祖母からの絆たしかな帯の芯　定人
帯締めや亡母の形見が光ってる　向西
残り火を帯で抑えた寡婦の胸　勇次郎

川柳たけはら　森井　菁居報

風よ止まれさくらがちってしまうから　小4　愛
水面にもきれいに映る金かく寺　小6　千枝
一枚の証書は枕許に置く　蘭幸
さわやかに生きよ生きよと風光る　菁居
あたたかい気くばり豆の種もらう　栄恵
キープボトル静かに出番待っている　比呂子
世の流れあまり厳しくとまどいぬ　夏喜
山の彩隠してしまう春霞　愛子
流氷の海より恐し春の山　美佐雄
ひからびた心をゆする唄があり　浪子
若い声飛び出す老いの相撲好き　麻代

鼻唄で車を押せば温い風　喜久恵
逢うて別れた記憶の庭のはなみずき　貞子
つっかい棒はずれてからの不整脈　房子
石仏あるけあるけとさそわれる　政己
敵に勝ち己に勝てぬ日の誤算　喜美子
毎年が一年生の田を植える　勲
立膝の小町の像におどろきぬ　蝸牛
子の投げるボールを父はよく落とし　白狐
六十を超しても楷書しか書けぬ　一路
いい湯だったタオルを干している独り　清水
鶏に知らせてならぬ卵の値　静佳
風の便り楽しみに待つ風車　一枝
灯台の闇から過去が呼びかける　笑子
妥協ばかりしてきた母の茶碗です　千代美
父の齢をはるかに越えた眼鏡拭く　不朽
こだわりを捨て取りかかるイチゴジャム　伸子
争いごと嫌で少うし距離をおく　静風
旅立ちの義姉に最後の着物縫う　八重美
満開の桜と遊ぶ老いの幸　規代

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

池売れたことを蛙に話すまい　しげお
ロボットは今日も四角い夢を見る　きく子
いろ紙に祈りを込めた千羽鶴　芳子
三吉の四角い土俵で銀が泣く　ただし
窓開けてまず空を見る外出日　慶子
カレンダーにない記念日を抱いている　(小)英子
憎かった人がこの頃懐かしい　(玉)英子
つながれた犬に雀のこぼれ飯　登代子
喋る口持つが聞く耳持たぬ人　明光
ご機嫌の父とわかった千鳥足　福一
失敗の僕をば僕が憎くなる　悟郎
てるてる坊主お前の首は幾つある　一薫
ちびっ子が吸い込まれてる蟬時雨　一笛
豆ご飯の好きな夫と五十年　博史
台所の要所要所にあるゴム輪　杜的
明日という夢が心を支えてる　武庫坊
スタートの日を吉日にしておこう　正坊
円高円安　無関係ですパチンコ屋　萬的

川柳塔社常任理事会（7月1日）

▽800号記念誌上川柳大会のPR・実施方法・会計などについて審議。
▽同記念川柳大会の実施要項について審議。
▽平成6年発行の合同句集について審議。
▽大阪文化祭の要項について諷云児氏が報告
本社からの選者は諷云児・吐来両氏に決定

甲吉句碑建立についてのお願い

川柳塔参与の工藤甲吉は、昭和三年に川柳を知り、川上三太郎の「国民川柳」（後の「川柳研究」）、村田周魚の「きやり」、前田雀郎の「せんりう」、岸本水府の「番傘」などに投句し、戦後は麻生路郎の門下に入って「川柳雑誌」、それを継承する川柳塔社の同人・参与として現在も活躍する青森県柳界を代表する長老の一人であります。

このたび、「川柳塔みちのく」（代表波多野五楽庵）が母体となり、甲吉の生地、尾上町に句碑を建立する運びとなりました。つきましては、川柳塔社の皆様のご協力のほどお願い申し上げます。

建立日　平成5年10月17日（日）
建立地　青森県尾上町・猿賀公園内
募　金　1口1000円
締　切　8月31日までに左記へ
弘前市元大工町50—5・大手門歯科
工藤甲吉句碑建立実行委員会
電話(0172)33—6030
振替　盛岡　0—36673

■各地句会だより

はびきの市民川柳会

塩満　敏

創立句会は一九七九年（S54年）二月で、出席者五名、投句者三名で始まりました。誕生から十四年経っているとは、今更びっくりしています。

「川柳を理解してもらうこと。川柳する人を増やすこと。川柳で人格育成！」をモットーに続けています。

句会は、川柳の好きなもの同士の集まりだけに、和やかで笑い声が絶えません。小集の強みで、前号に互選応募作品を無記名で列記し、句会で会員の推薦句を集計し、約一時間かけて作品鑑賞・討論をしています。

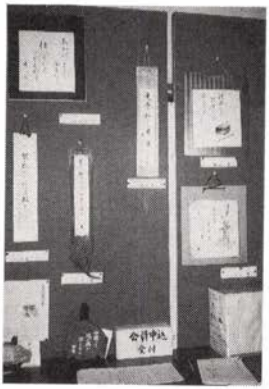
会の発行物は、『川柳はびきの』を創立から今年の六月号まで、毎月、発行しています。会として『三周年記念句集』『四周年記念句集』『百号記念合同句集』『創立十周年記念合同句集』『誌上句集合併号』『題詠索引表』を発刊しました。

会員の著作は、塩満敏『夫婦酒』、『川柳資料室』、田中隆二『かぼちゃぱい』、定成希代司『シルクロードの旅』、中島志洋『ふぐ提灯』、瀬戸かつみ『鈍行』、『鈍行2』、榎本吐来『吐来の川柳初歩教室』、芦田絢子『花手桶』、芹川ケイ子『つれづれ』の八名が十冊発行しています。発刊記念句会や還暦・古希・傘寿・米寿を祝う句会もあります。

八三年から毎年吟行を開催、今年は八回目。同年から毎年「陵南の森市民のつどい」には、「川柳展示会」「市民募集吟」で参加しています。また、毎年陵南の森公民館ロビーで川柳作品を展示しています。

これまでに、三回の「川柳教室」（十回の講義）を開きました。八六年から五十回「吐来の初歩教室」を誌上で開き、後学の人の一助と思って製本し、昨年六月和歌山市で開かれた第十六回全日本川柳大会の日に発刊しました。八三年十二月号から八五年四月号まで十八名の『誌上百句集』を発表、九三年三月号から第二回「誌上百句集」を只今、連載中です。八八年「日本一の川柳の町」久米南町の川柳公園に大槻一屯・高田美代子・吉川寿美・楠昭子・塩満敏の句碑を建立しました。

想い出が深いのは、八九年一月二十九日、「創立十周年記念句会」が、川柳の仲間の友情に支えられて「市立陵南の森公民館」で行われたことです。九十五名の参加者が十二名の選者に挑戦しました。今後ともよろしく！



川柳作品の展示

勢ぞろいした会員

柳界展望

編集部

★全日本川柳協会は**6月13日**、松山市で開いた第17回全日本川柳大会で戸澤久夫太田市長、國忠泉久米南町長に感謝状を贈呈、田中好啓・宮本時彦・藤原時化緒広瀬反省・根本冬魚・山本勝・大山花城・高橋雨耕・小針翠琴・近藤紫風・越郷黙朗・藤原華琴12氏を表彰

★堺川柳会の第11年度夜市川柳のベストテンが次のとおり決定した。

①新家完司②神平狂虎③河内天笑④奥山晴生⑤神夏磯典子⑥小島蘭幸⑦西口いわる⑧安平次弘道⑨小池しげお⑩山本希久子

★豊中もくせい川柳会は**7月19日**、平成5年のもくせい賞に玉置英子さん、優秀賞に、①春城武庫坊・田中正坊③田中薫④松本ただし⑤小池しげお・桝本蕗児の6氏を決定、授賞した。

★第16回阪神文芸祭の入選作品が決定した。川柳部門では奥田みつ子さん（西宮市）が兵庫県文化協会賞、川島諷云児氏（高槻市）が阪神県民局長賞を受賞。

子の巣立ち静かに風を聞いている　奥田みつ子

人生の節目で仮面つけ替える　川島諷云児

★第3回・太平記の里全国川柳大会は**10月31日**（日）午前9時から太田市社会教育総合センターで開く。第1部（当日参加者）の課題と選者は、彦＝仲川たけし▽九＝山田良行▽郎＝渡邊蓮夫▽没＝西村在我▽後＝山崎涼史▽二＝川俣喜猿▽百＝竹本瓢太郎▽年＝荻原柳絮（各題2句、字結び・読込み可）。特別課題は、城＝清水惣七選。参加費1000円（昼食・記念品・発表誌とも）、合点30位まで知事賞・議長賞ほか呈賞第2部（郵送参加）の課題は「馬」（2句）で選者は西尾栞など10氏。応募者は参加費1000円を添え、**9月10日**までに所定用紙で〒373太田市浜町2―35・太田市文化振興事業団へ。なお、1・2部の特選句中から全選者の協議により最優秀作品を決め、句碑建立。

★大阪文化祭第45回川柳大会は**11月6日**（土）、大阪府中小企業文化会館で開かれることに決定した。

★第29回川柳塔きゃらぼく忘年句会は**12月5日**（日）午前10時から米子駅前米吾ビルで開かれる。会費は昼食・懇親会とも3500円兼題は樹・駅・笛・パン・砦・残す・蝶・礫・カード売る・花火。欠席投句拝辞

▽同人消息△

■春城武庫坊・年代の同人夫妻が今年、金婚を迎えることとなり、6月22日、有志による祝賀宴が開かれ、橘高薫風理事長が「若い金婚　君ら少々生意気な」ほか全員が祝吟を贈った。

■森井菁居氏（本社理事・竹原市）は第60回逓信記念日に永年勤続で郵政大臣表彰を受け、6月8日、簡易保険の計画指導功労者として郵政局長賞を受賞した。

■奥田みつ子さん（常任理事・西宮市）の「川柳がかわいそう」の投稿が6月25日付『朝日新聞』の「ひとときの」欄に掲載された。

■西田柳宏子氏（副理事長・大阪市）6月下旬、自転車事故による大腿骨折で阿倍野区阪南町の田中外科病院に入院・手術、約三か月療養の見込み。

▽出　版△

■『あなたもやれる　楽しい川柳―森紫苑荘の痛快指南』（愛媛新聞社刊・B6判250頁）仲川たけし・三条芳文序文、本文2色刷第一部（講座編）・第二部（随筆編）、価1800円。

■遠山夏生川柳句集『旅人』（噴煙叢書第12集・B6判172頁）吉岡龍城ら序文作品345句を収録。

▽ご芳志△

■西尾栞主幹から『水鶏庵こらむ散歩』発刊を記念して金一封を拝受しました。

■松井かなめさん（同人・有田市）から夫君叙勲の内祝として金一封を拝受。

第29回　路郎忌

本社　七月句会

七月七日(水)午後五時半
メンズファッションセンター

没後二十八年目の路郎忌句会は、他柳社の方々の参加も得て百十二名の盛会となった。そのため、今月に限り兼題については急きょ入選が四十五句に増やされた。

「おはなし」は理事長の橘高薫風氏。

「今年は番傘八十五周年、来年早々に川柳塔の八百号記念行事があり、大阪柳界の大きな節目とも言える。ここに至ることが出来たのは、水府・路郎師の傑出した巨頭の川柳へと情熱があったからだと思う」にはじまり、ところどころに句を入れながら、氏の初心時代や路郎師晩年の逸話などの紹介があった。

交換選者の番傘主幹礒野いさむ氏からは、心あたたまる四方山話が選の前になされた。

初出席は濱田良知(枚方市)、榊原慧(大和郡山市)の両氏。

月間賞は松本ただし氏(川西市)に輝く。

(司会—東雲)　(受付—みつ子・希久子)
(記録—ダン吉・月子)

席題「団体」　山本翠公選

団体が通ると風が生臭い　三男
気まぐれの空へ気をもむ団体旗　稚代
部屋割りで飲めない組と飲める組　恵美子
みやげ屋が悲鳴　団体よく値ぎる　悦子
パックツアーそれから情緒不安定　公子
団体に幹事泣かせが一人居る　凡子
団体が退いて修羅場の影残す　澄子
靖国へ行く団体が減ってゆく　湖風
団体の去った旅館に虚が残る　元紀
団体のひとりが合掌して遅れ　美幸
缶ビール冷え団体のバスが出る　白光子
団体の旗にバブルの影はない　典子
団体に入ると顔が消えている　朱夏
団体さんが何んにも買わず通り過ぎ　天笑
団体が甘酒茶屋を占領す　蕗児
団体さんの宿のメニューは別にある　幹斉
団体行動　出来ぬ女でひとり身で　房子
苔寺のまた団体に荒されて　いさむ
団体の膳に冷めてる茶碗むし　勝美
団体を送って金を数えてる　月子
団体の中に気付かぬアデランス　隆
団体を受けて宿坊活気づき　シマ子
団体の後ろでそっと集印帳　かすみ
みやげ屋に団体さんとあしらわれ　美津留
バス旅行　指名のがれに目を伏せる　慧
団体の足にあわせるバスガイド　鬼遊
団体の無理を聞いてるポチ袋　雀踊子
団体のひとりになれば強くなる　欣史子
バス五台　青い嵐を巻き起こす　天笑
団体にいつも遅れる同じ顔　秀子
団体が帰りゆっくり茶をいれる　度
一団の盲点に居る反逆児　澄子
団体が去り石庭が語り出す　楓楽
伎芸天観る一団をやり過ごす　たつお
団体できたのに螢まだ早い　柳影
団体に目も口もない頭数　希久子
手柏子がそろい団体活気づく　利武
団体の旅に慣れない土踏まず　諷云児
団体旅行みんなおんなじ顔になる　武庫坊
団体に占領されているロビー　正坊
団体が去って無残な浜になる　湖風
団体の中で転んでばかりいる　恵美子
団体が降りて旅情をとりもどす　たつお
団体を抜けて酸素を補給する　楓楽
レベルアップ農協さんもお静かに　翠公

兼題「ゆっくり」　吉川寿美選

ゆっくりとさせてやりたい父の靴　悦子
政治改革　亀がお昼寝したように　文時
巣立たせてゆっくり回る夫婦独楽　(新)正子
花の道　朝の散歩はアンダンテ　秀子
牛歩戦術ここにも税の無駄遣い　一二三
句読点打って余生は急がない　祥庵
十二単ゆっくり進む御神殿　天弘
ブラックコーヒーゆっくり恋をあたためる　緑良
ゆっくりと今日振り返るしまい風呂　庸佑

二度寝した日はエンジンがかからない　満州
神様がゆっくりせよと風邪をくれ　昭子
時かけて咲かせてみたい花がある　洋
ゆっくりと迫り最後は手に入れる　房子
下心あるゆっくりを見ぬかれる　柳影
ゆっくりして来いと支局へとばされる　たつお
親と子でゆっくり対話してますか　親踏
雨垂れへゆっくり溶いている未練　薫
ゆっくりと終章を書く冷や奴　美幸
右ひだりゆっくり歩く菖蒲園　頂留子
ゆっくりと言うはしばしに棘がある　三男
母の森へゆっくり沈みゆく夕日　いわる
ゆっくりと妻を眺めたことがない　保州
四季の花咲かせて余生ゆっくりと　良知
花時計ゆっくり回る待ちぼうけ　諷云児
母の歩幅でお大師さんの小半日　たつお
一病とゆっくり坂をのぼります　天笑
ゆっくりと返事　呼吸の中に置く　雅文
傷はまだ浅いゆっくり策を練る　朱夏
一病息災ゆっくり生きることにする　恭昌
三部経ゆっくり亡母を連れてくる　おさむ
大物は最後にゆっくりくち開く　欣史子
手応えは確かゆっくりリール巻く　庸佑
毒舌のタクトゆっくり振り下ろす　いさむ
夫婦船　揺れてゆっくり陽が沈む　吐来
言うだけは言うてゆっくり眼鏡拭く　希久子
一歩ずつ肩の力を抜きながら　満州
佳
ゆっくりと確かに幕は降りてくる　森子
ゆっくりと君に傾く夕陽です　希久子
生きざまの答ゆっくり出るだろう　楓楽
ゆっくりと記憶ひとつを消す美学　美代子
ゆっくりと独りじめする刻がある　寿子
人
ライバルがゆっくり矢尻研いでいる　正剣
地
峰打ちの跡がゆっくり痛みだす　信治
天
紙吹雪をゆっくりおとす未完の絵　美代子
軸
水平線　今日がゆっくり沈んでゆく　寿美

兼題「振る」　吉岡美房選

一日を棒に振ってる目撃者　正剣
ハンカチを振ると人生終りそう　四郎
使命感があるんだ振り子が動く　祥庵
手を振ってあげるが票は入れません　保州
雅子妃に幸あれ日の丸ちぎれそう　典子
蟷螂の斧も振りたい永田町　千秀
タクト振る妻でLLサイズ着る　希久子
振り上げた拳が思慮を問われてる　文秋
妻の腕の中で無職の旗を振る　たず子
無い袖を振って生きてる古希の坂　武庫坊
母さんが旗振っている朝である　ダン吉
振り向かず檜舞台を去る背中　房子
権力へ振った尻尾を悔いている　朱夏
傘振って逢うた余韻を雫する　英子
僅少差　大手振るのは未だ早い　二南
鍬振れば鍬に答えてくれる土　信治
振りむけば巡査が僕をみつめてた　重人
振った手が還らなかった雲の果て　正坊
首縦に振っては孫を手懐ける　完次
シェーカーを振り振り耳をたてている　露児
振ったのはおんなで先を読んでいる　たつお
白旗を振る夢ばかり見てしまう　欣史子
振った男の数だけ悔いを抱いている　朱夏
手を振ると入道雲は亡父の貌　森子
尻尾振る犬の打算をわらえない　ただし
反旗振る気骨は持たぬ雑魚の群れ　希久子
首を振るこけしに遠い里がある　たず子
首を振る事を覚えた妻の乱　雀踊子
清貧の誇り大手を振っている　笛生
首をふる張り子の虎にあるコント　雀踊子
雑兵として振らされる旗がある　完次
手を振ってくれた女に火傷する　歌子
振る旗の表裏を白と黒にする　倫子
再会へ胸の振り子が鳴り止まぬ　稚代
こめかみの鬼をすっぱり振り払う　美代子
振り切って真紅の薔薇を活けてみる　寿子
振り向けばあなたに負けたことになる　文子
酸欠の男が旗を振っている　重人
佳
雑草の位置で自由な旗を振る　諷云児
振りかかる火の粉　男としてあびる　花梢
タクト振る男の孤独笑うべし　岳人
時々は見えない尻尾振っている　みつ子
振り向くと味方は誰もいなかった　三男

人

残像を振り切るための灯を点す　薫

地

死ぬまでに何度手を振る騙し舟　千歩

天

白旗を気軽に振って雑魚でいる　楓楽

軸

散る時の僕は帽子を振るだろう　美房

兼題「風景」　春城　武庫坊　選

いのち預ける風景を描いている　信義
いい風景いいことあった帰り道　緑良
風景がかわる心を探さねば　鬼遊
風景を変える政治の風を待つ　〆女
木屋町の宵を絵にして舞妓ゆく　湖風
灯台のある風景を子にゆずる　英子
絵心の無さを悔いてる嵯峨の道　朱夏
足もとの景色雪崩れるガン告知　澄子
追憶の目は故里の絵の中に　希久子
風景の裏に利権が渦を巻く　典子
原点を問いかけるミレーの風景画　萬的
悪趣味な風景にした村起し　湖風
いつも同じ風景ばかり見て夫婦　美房
追憶の原風景にある野菊　満津子
絵はがきのあそこに立ったことがある　保州
絵葉書が美しすぎる普賢岳　三男
山川草木　瞰に焼いて村捨てる　月子
庭の雨見ながらコーヒーとケーキ　たつお
貧しさが原風景にある自伝　月子
風景は朝でおいしそうなパンよ　悦子
途中下車　会いたい四季の顔がある　道胤
ユトリロが描く教会の白い壁　一風
絵日記の庭は緑の木でいっぱい　森子
あなたと居る風景が好き風薫る　倫子
夢に見る風景　父も母も居る　公子
遠景の古里エデンにも見えて　おさむ
自画像へ後ろの山がこだまする　完次
黒枠の矢印　寒い街にする　栞
ひと時雨あって嵯峨野の景となり　蕗児
音楽のある風景に迷い込む　元紀
風景の途中でモネの絵が消える　森子
落日の風景　薔薇が吐息する　楓楽
老夫婦いる風景が喜劇めく　欣史子
あの日から風景のない日記帳　寿
アルプスの絵を吊り空気甘くなる　元紀
風景の遠いところに神が居る　天笑
モスクワの赤い風景いつまで冬　美房
ふるさとの原風景で兵は死ぬ　透太
原風景　愛の化石を抱いている　美代子
星の降る風景がある相聞歌　笛生
双塔の借景見事　山焼ける　歌子
小袖噛む風景　木偶の声が嘆れ　人
父の過去たどれば魁夷の道になる　美幸

地

風景がまっ白になるしらせ聞く　恵美子

天

癌告知以後　風景に彩がない　楓楽

軸

ぶらんこから見た風景に母がいる　武庫坊

兼題「高い」　磯野　いさむ　選

向日葵のどれも私の背を越す　祥庵
背の高い女がもてる世紀末　四郎
高くても諭入米より内地米　文時
ユーモラスに見える高さに鬼瓦　緑良
高層のビルに童話がなえてゆく　秀子
八月忌　平和な空が高く澄み　寿美
火の匂させて高見に立つ男　朱夏
昔ならすんなり飛べた高さだが　美代子
人の命に高い値がつく国に生き　公子
文明度ビルの高さで計られる　絹子
高い絵が残る画廊の寒い壁　たつお
おだてにはのらない高所恐怖症　しげお
高のぞみ捨てて息子が継ぐ家業　信治
陸橋の高さは老いを拒絶する　鬼遊
物見高くて空中庭園までのぼる　道胤
その昔　通天閣は高かった　利武
火遊びで払った高い授業料　倫子
気高さや飛鳥美人に逢いに行く　透太
高いのがいちばん売れる二十・リッチ　正坊
受け売りに高い評価はしてくれぬ　文秋
就職内定　高々挙げる象の鼻　寿美
新幹線のキセルが高いものにつき　天笑
結婚前は高所恐怖と聞いていた　冬葉
塔高く子供も鳩も集い来る　みつ子
内定通知　少し枕を高く寝る　信治

高望み闇に落ちたるアホウ鳥　愛論
高熱の舌に味覚は砂になり　親路
程々の高さに罠が仕掛けられ　庸佑
三人で組めばたやすい務所の塀　寿
新党の人気が高いアンケート　たつお
プライバシー我が家の塀は高々と　愛論
ドル高も株安もない鍬握る　稚代
森瑶子　高く積み上げ愛に飢え　楓楽
西高東低　路郎　水府の置き土産　武庫坊
円高のハワイで泳ぐ夏休み　隆
豊漁の鰯へ高く舞うトンビ　萬的
高い評価　複製ですと言いそびれ　翠公
山頂の空気がうまいワンカップ　良知
背の高い妻に劣等感を持つ　完次
高うおまっせ商売人が気を遣う　欣史子
佳
高い壺　買ったはなしは黙っとく　楓楽
一票が高くつくとは言わせない　恵美子
安心の出来るブランドばかり買う　文秋
円高のうちに行きたい国がある　満州
ゴンドラでビルの窓拭くアルバイト　勝美
軸
高く買いすぎたマチスに悔いはない　いさむ

兼題「帆」　西尾　栞選

帆を張った舟に溺れているわたし　祥庵
帆船を浮かべ維新を比較する　螢
恋ゆえに北前船は帆をあげる　文子
帆船のロマン爪弾くかえり船　柳伸
逆風の帆は世直しへ向いている　たつお
出帆の銅鑼が哀愁誘ってる　狸村
ボロボロの帆が喋りだす航海記　月子
帆をあげて一票一票を糾す　恵美子
順風満帆そうそう世間甘うなし　洋
仏滅を大安にする帆を揚げる　しげお
逆風へここは我慢と帆を下ろす　庸佑
舌鋒は確かに白い帆を上げて　おさむ
帆を張って世界の風と語らんか　森子
帆を上げて港まつりへ下駄を履く　岳人
帆をはって若さも夢もぶっつける　一風
帆船が器用に入る瓶の中　正雄
帆に風を受けてライバルやって来る　欣史子
クリントンさんが帆張ってきたニュース　幹斉
帆を上げて文左衛門が出た港　稚代
帆を畳むきれいな恋が許されて　豊太
つぎはぎの帆を張っている夫婦船　完次
帆を上げて男は一度勝負する　薫
白い帆が琵琶湖に夏を作りあげ　笛生
夢捨てたわけではないが帆をおろす　智子
金波銀波に愛の帆をゆだね　愛論
帆の下で家族五人がまるくなる　(新)正子
帆を上げて男育てる日本丸　天弘
定年になったら好きな帆を上げる　(新)正子
風孕む帆船が好き父の書架　翠公
父の帆に吉相の風吹きはじめ　豊太
満帆のマスト無謀な策を練る　澄子
アゲマンの追い風に乗る男の帆　ただし
帆を下ろすと舟は痩せたようになる　眉水
少しシワが増えましたねと夫婦の帆　恵美子
帆を出して幾つか罪のブーメラン　悦郎
かあちゃんの都合もきいて帆を上げる　天笑
ヨットマン女性も強くなりました　かすみ
佳
帆を見ると思い出すのは裕次郎　満州
青春讃歌　止まることの知らない帆　弥生
大空の遙かはるかに路郎の帆　薫
帆を下ろし男の顔が丸くなる　典子
八百号へZ旗あげて帆をあげて　天笑
人
海ネコが憩う帆柱から夏に　希久子
帆の向きで敵にも味方にもなれる　保州
天
尻に帆をかける男は見逃そう　ただし
軸
得てに帆をあげたまんまの過労死か　栞
（清記―楓楽）

8月各地句会案内

	日時と題	会場と投句先
堺川柳会	1日(日)午前11時開会 **第11回夜市川柳大会**	堺市総合福祉会館　**題**　手紙・無駄・おんな 腕・ごめん・ヒント・一枚・吠える・駅・赤
尼崎 いくしま	6日(金)午後1時から ハンカチ・足・海・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5−25−17　春城年代
川柳塔 まつえ	7日(土)午後1時半から 団体・夕映え・土産	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
川柳塔 わかやま	8日(日)午後1時から 匂う・人形・虹	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111−2　牛尾緑良
西宮北口 川柳会	9日(月)午後1時から シャツ・はじく・華やか・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9−4　西口いわゑ
八尾市民 川柳会	10日(火)午後6時から 治す・畑・天国・キャンプ	八尾市立学働会館(山本)　近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1−15　宮崎シマ子
川柳 ねやがわ	15日(日)　正午から 訳・風・モデル・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9−9　高田博泉
もくせい 川柳会	16日(月)午後1時から 天・ソフト・望む・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5−801　田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(火)　正午から 眠る・重い・港・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3−8−8　川島瓢云児
富柳会	19日(木)午後1時から 影・眩しい・ガラス	富田林中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4−1　池　森子
南大阪 川柳会	19日(木)午後6時から 母国・持ち味・余分・浪費	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1−5−2　金井文秋
京都 塔の会	20日(金)午後1時から 炎・任す・他人	京都府南労働セツルメント　近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41−1　松川杜的
南海 川柳会	20日(金)午後6時から 不服・大切・好物・回答	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15−18　寺井東雲
はびきの 市民 川柳会	22日(日)午後1時から 安心・温泉・カウンター・(結婚)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8−31−11　塩満　敏
岸和田 川柳会	26日(木)午後6時から 支える・砂・世話・雑巾	市立福祉総合センター　南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610−85　芳地狸村
東大阪市 川柳 同好会	28日(土)午後6時から 騒ぐ・スランプ・薄い・孤独	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3−21　片岡湖風

★日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06−762−4408)へご連絡ください。

編集後記

★ケースワーカーたちで発行する機関誌に特集された〝川柳〟が新聞に報道され批判を捲き起こした。これについては、本誌の目次下のエッセーで田中薫氏も触れているので、あえて繰り返さないが、これらの〝川柳〟は、生活保護受給者への侮べつであるとともに、川柳をも冒とくするものであると思うので、川柳塔社編集部として作者およびそれを企画した編集者に猛省を促したい。

★これほど極端ではないにしても、およそ社会的弱者を軽べつし、嘲笑の対象としたり、心身の状態や職業・身分・民族などについて差別する言葉を使うのは、あってはならないことである。人権意識が低かった江戸時代につくられた古川柳には、そのような差別的表現が少なからず見受けられるが、現代川柳にあっては絶対に許されることではない。

★しかし、現実には柳誌や句会作品の中で、選者や作者の不注意から不適切な作品がまかり通っている。明らかに社会的差別を助長するような言葉は、文芸作品だからと言ってその責任を免れることはできない。作者・選者ならびに編集者は心しなければならない。

★それでは、何が差別語にあたるかは、わずかなスペースで明らかにすることはできないが、いちばん分かりやすいのは心身障害に関する言葉である。例えば、めくら・おし・つんぼ・びっこ・気違い・片目・白痴…などで、その他については稿を改めたい。（正）

ひとこと

作家のモラル

『俳句』7月号の記事を見ておどろいた。去る5月15日に大阪で開かれた関西俳句大会で渡された「句集」の大会賞はじめ5句の上にべったりテープが貼ってある。印刷後に類想句が判明、指摘され徹夜の手作業で貼ったという。

「盗想句を応募し、作家としてのモラルを失して平気な俳人のいる今日、入選取消しに踏み切った決断はいさぎよい」と同誌の編集子はコメントしている。

振り返って私たち川柳界も、俳句界の出来事を笑ってはおられない。つい最近、川柳塔社同人の著名な句が盗作されて大会で入選した事例が二件もあったということを聞いた。うっかりも事によりけりで、関係者の決断とモラルを失した作家の反省を求めたい。

伏見　二郎

○遅ればせながら、ファックスを買おうか、買うまいか思案している。毎月、本社句会が終ると、すっ飛んで帰り、句の清記を開始、原稿を速達にして出来るだけ早く投函する。ところが思わぬ邪魔が入り、予定どおり運ばない時もある。だから、句会終了から投函までの時間は、スリルとサスペンスに満ちあふれている（ちょっとオーバー）。

○投函してホッとしても、「速達料返せ！」と叫びたくなるほど遅れることが、ときに何故か起きる。そして今度は、編集長をやきもきさせる。

○ファックスがあれば、これらの問題点は解決し、万事めでたしめでたしとなるはずである。が、ふとこれまでのことを思い返してみた。本社句会が会場などの都合で、七日より早くなった場合、その分早く原稿が送れたか―答は「ノー」。時間にゆとりがあればあるだけ、だらだら片付けてしまう。せっかく文明の利器を買っても、結果は目にみえている。

○これが買うのを迷っているわけの一つである。それと内緒なのだが、スリルとサスペンスを楽しんでいるフシが、無きにしもあらずなのである。（ふ）

『川柳塔』八〇〇号記念全国誌上川柳大会参加用紙

川柳塔誌上川柳大会　参加用紙

No.	No.
スタート	大　空

姓・雅号	住所
	〒
種別	
同人・誌友・一般	
No.	

（送金方法）

振替・小為替・現金

きりとりせん

No.	No.	No.	No.
雑　　詠	時　　計	嘘	妻

きりとりせん

全国誌上川柳大会への参加は、この用紙をご使用ください。

参加要項は、本誌の表紙裏に掲載してありますのでご参照の上、参加をお願いします。

なお、同人・誌友以外の方におすすめいただく場合は、別刷りの参加用紙もありますので、川柳塔社事務所へご請求ください。

本社8月句会

日時　8月9日（月）午後5時半
会場　メンズファッションセンター3階
中央区内本町1―1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点南西角
兼題　「すんなり」　高杉千歩選
「過失」　藤井一三選
「切る」　岩本雀踊子選
「深い」　黒川紫香選
「舌」　橘高薫風選
席題　1題　当日発表　各題2句以内
会費　500円
投句　句箋（4cm×19cm）1葉に1句を書き、投句料310円（62円切手5枚）同封のこと

本社9月句会　6日（月）

兼題　「のびのび」「改める」「相場」「早い」「力」

作品募集

10月号発表（8月15日締切）

川柳塔（10句）　西尾栞選
水煙抄（10句）　黒川紫香選
銀河系（3句）　河内天笑選
茴香の花（3句）　小出智子選
課題吟（3句）「除く」　金井文秋選
「ダンス」　平松かすみ選
「ゆっくり」　町田達子選
初歩教室「呼ぶ」（3句）　吉岡美房担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

11月号　課題吟　「狭」「売る」「レンズ」
初歩教室「鳥」

夜市川柳募集

第3回「借る」　谷垣史好選
ハガキに3句　8月末締切
投句先　〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「あいさつ」　森中恵美子選
ハガキに3句　8月10日締切
投句先　〒540　大阪市中央区馬場町3―43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表　8月22日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「待つ」　森中恵美子選
ハガキに3句　8月15日締切
投句先
〒540　大阪市中央区谷町2丁目2―20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

定価　六百円（送料51円）
半年分　三千八百円（送料共）
一年分　七千五百円（同）
平成五年八月一日発行
編集兼発行人　西尾巌
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二丁目一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六九一―六九一四番
振替口座大阪8―三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成五年八月一日発行（毎月一日発行）
刊刊六三三三号　通巻七九五号　川柳塔　八月号　定価　六百円（税抜五百円）

■自分史・句集自費出版　■小・中・高・大学の教科書　■各種本の製作・出版

いろいろな本製作専門！

◇句集・詩集・自費出版等のご相談に応じます。
● 部数の少ない本も取り扱っています

書籍・図書・印刷・電算
ミヤケ プランニング
MIYAKE planning
〒557 大阪市西成区千本南1-12-8
電話 06-659-5514
FAX 06-652-2928
図書出版・ジェイ パブリッシュ
電話 06-658-8741

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

TJ 豊津住宅株式会社

本　社　豊津住宅KKビル
〒564 吹田市泉町5丁目28—27　TEL (06) 330—0102

豊津店
〒564 吹田市泉町5丁目11—14
TEL (06) 330-0006(代)
FAX (06) 388-6102

関大正門前店
〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL (06) 388-6166(代)
FAX (06) 388-6886

雑誌 05703—8